

---

# 風炎の契約者とパンドラの少女達の出会い

オヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風炎の契約者とパンドラの少女達の出会い

### 【Nコード】

N4988X

### 【作者名】

オヤ

### 【あらすじ】

人類の運命を掛けて戦う物語です。

内容が原作やアニメとは多少事なると思いますのでご勘弁ください。  
今回の作品はリベンジです

## プロローグ（前書き）

ご感想とアドバイスおまちしています

## プロローグ

異次元体ノヴァ、突如出現したこの未知の生命体によって人類は滅亡の危機にあった。現在人類が保有する近代兵器もこのノヴァの前では意味をなさなかった。しかし長きに渡るノヴァの研究によって人類はノヴァに対抗できる力パンドラという存在を生み出した。パンドラとは聖痕と呼ばれるノヴァの身体の一部を女性に埋め込む事により超人的な戦闘力と身体能力をもつ存在の事である。彼女達パンドラの存在によって人類は滅亡の危機から逃れるすべを得た。しかし、人類にとつての脅威はノヴァだけではなかった。太古の昔より闇に潜み人間の負の感情と人間を喰らう存在、人はこう呼んだ妖魔と。長きに渡る争いの中でたまりたまつた負の感情によつて妖魔の封印が解かれようとしていた。しかし、ノヴァに対抗する存在でパンドラがいるように妖魔に対抗する存在として精霊術師が存在する、精霊術師とはこの世界に存在す地・水・火・風・光の精霊の力をかり戦う者達の事である。そしてこの世界にただ1人存在する風と火の精霊をあつかえる少年アオイ・カズヤ。・・・彼との出会いによつて少女と人類の運命が大きく動き出す。

今、新たな戦いが始まる。・・・

## プロローグ（後書き）

今度はちゃんとやっついていきたいです

## 接触禁止の女王（前書き）

タイトルは前回の作品と同じです。また途中で文章が途切れたりするかも知れませんが多めに見ていただけたらと思います。

## 接触禁止の女王

ウエストゼネテイクス、ここは異次元体ノヴァに対抗する力パンドラとリミッタを育成する異次元体対応作戦学校と呼ばれる機関である。ここでは、聖痕に適正のあった女子はパンドラとして、そして志願してきた男子はパンドラをサポートする存在リミッタになる為4年間このゼネテックスでノヴァについて学ぶのである。現在このゼネテックスは世界中に存在し生徒達は日々訓練に励んでいる。

そして今、この日本にあるウエストゼネテックスではカーニバルと呼ばれる実戦訓練が行われていた。そして、現在その訓練をしているのは2年生のパンドラ達であり、己の力量を測る為それぞれ激突していた。そしてその様子を管制室のモニターで見ている人達がいた。軍人A「今年もこの時期がやってきましたか！マーガレット校長」マーガレット「ええ・・・」軍人の隣に立っていた教会の神父のような格好をした女性が答えた。この女性の名はシスター・マーガレット、このウエストゼネテックスの校長であり！その他にもノヴァに対する豊富な知識やそれ以外にも歴史などにも強く現在人類における対ノヴァに対抗する力として必要とされている数少ない人物である。しかし、彼女自身それをはなに掛けるような事はせずその容姿と母親的な雰囲気をもつ為男女とわず多くの人々から尊敬をあつめている。軍人B「しかし毎年の事です、ウエストのパンドラは将来有望な者達多いですねなフフ。他のゼネテックスでも天才と呼ばれるパンドラは生まれますがウエストは別格だ。」軍人A「同感です、一体どのような訓練をなさっているのですかマーガレット校長」2人の軍人は興味しんしんに聞いてきた。マーガレット「フツ・・・私は何も全て彼女達の自身の力ですわ」軍人C「またまた、ご謙遜を！ハツハツハツ」マーガレット達がそんな話をしているとモニターに動きがあった。オペレーター「学年の5位から2位他パンドラを撃

破しています」軍人D「おおお！今年もこの4強が残りましたか」  
「. . . . .」学年5位「はあ、はあ、はあ. . . . .」  
「くらえええええ」他パンドラ「ぎゃああああああああ」  
「げえげえ、くそおおおおお」学年5位「ぬおおおおお  
おおおー、でやあああ」モニターでは2年生の学年5位であ  
る短い短剣のような武器を持ったパンドラが他のパンドラを撃破し  
ていた。そして続いて別のモニターでは学年4位のパンドラの戦い  
が映し出されていた。学年4位「ふうーふうーふうー. . . . .は  
あ！. . . . .」他パンドラ「ぬうおおおおおおー. . . . .」学  
年4位「ぐうううううう、こつのおおおおおおーでやあああ  
ああああ」他パンドラ「ぐぎゃあああああああああああ  
あつくはああああ」学年4位「はあ、はあ. . . . .はあ」学年4位  
の「パンドラは鎖鎌のような武器で2名のパンドラを撃破すると素  
早く移動を開始した。そして、その近くで学年3位の戦闘が行われ  
ていた学年3位「はあああああああーてやああああああ  
あ」他パンドラ「いやああああああー. . . . .はあああああ  
ああああ、ぶひゃああああ」  
「きゃあああああー. . . . .」学年3位「ふう. . . . .」学年3位は大きな斧のような  
武器を使い一瞬にして3人のパンドラを撃破していた。するとそこ  
に学年5位、4位のパンドラが集合すると. . . . .戦闘を始める訳で  
もなくともに移動し始めた。オペレーター「学年5位から3位移動  
を開始」すると別のオペレーターから通信が入るオペレーター「現学  
年1位移動を開始」軍人ABC「現学年1位！. . . . .」マーガレッ  
ト「ええ」軍人A「彼女達以外のもまだいるというのですか. . . . .  
」  
「その場にいた軍人全員が驚愕していた。そして、モニターに学  
年1位のパンドラが映し出されていた。マーガレット「彼女こそ、  
接触禁止の女王サテライザー・ブリジット2年生最強のパンドラ」  
軍人ABC「接触. . . . .禁止の女王. . . . .」全員が再びモニターに顔  
を戻す。

時間はすこし戻りある更衣室・・・そこに1人の少女がいた、長い金髪の髪に眼鏡をかけドレスのような制服をつけていた。するとおもむろに制服と下着を脱ぎ始めた、10代の少女の平均を明らかにその裸体にを男女問わず見とれるかもしれないそれに加え端正な顔立ちを100人がみれば100人が美少女と答える美しさだった。するとおもむろに少女が言葉をつぶやいた・・・サテラ「ボルトテクスチャー装着」すると突如少女の身体が光り出すと先ほど脱いだドレスと同じような服が装着されていた。そしてその瞬間彼女のかもしだす雰囲気は10代の少女とわえない殺気をもそ出していた。

サテラ「・・・」サテライザー雨の中をただひたすら歩いてきた、するとそこに続々と他のパンドラ達が集まり出していた。他パンドラ「はあ、はあ、はあ」・「ぜえー、ぜえー」・「はああ・・・」そしてその数はいつの間にか10名を超えていた。オペレータ「現学年1位の周りを9名、11名のパンドラを確認」軍人B「彼女があおの名門ブリジット家のご令嬢・・・」軍人C「しかし・・・接触禁止の女王とは・・・」マーガレット「すぐにご理解いただけます・・・動きます」

ブォーン ブォーン・・・2年生のカーニバルが行われているころウエストゼネテックスに1台のバイクが止まった。カズヤ「ふうー、ここかあ」ヘルメットを取るとそれは1人の少年だった、まだ幼さの残る顔立ちは実年齢よりも幼く見え、下手をすれば女の子にも見えるかもしれない。すると少年はバイクにのせてあった花束を持ちゼネテックスの門に向かった・・・しかしいつけん見た目は普通の少年だが見る人が見れば気付いたかもしれない、この少年の動きには一切の隙が無かった事を！そして何より少年から放たれる圧倒的な力に・・・

場所は変わりカーニバルが行われている訓練所……そこではとんでもない光景があった。

サテラ「ボルトウエポン展開……はぁー、ノヴァブラッド」  
サテライザーがボルトウエポンを展開し10人を超えるパンドラを向かえうつっていた。普通に考えればサテライザーの絶望的な状況のはずだが、とうのサテライザー心を乱すわけでもなく落ちついていた。むしろ……相手のパンドラ達は怯えむしろ追い詰められているかのようだった。そして、サテライザーがゆっくりと動きだした瞬間1人のパンドラが動き出したと同時に他のパンドラ達が襲いかかる。しかし、その瞬間サテライザー以外のパンドラ達の悲鳴が広がった、他パンドラ「ぎゃあああああー」・「ぎゃはかああああ」・「いやああああああ」オペレーター「3名撃破」他パンドラ「うわあああああー」・「やめてええええええええええー」・「はああああああああああ」・「きゃああああああ」オペレーター「続いて4名撃破」あれほどいたパンドラ達が一瞬の内に次々に倒されていた。そして、最後に残ったパンドラは最早逃げる気力もなかった。他パンドラ「あつああああ……ああああ」その最後の1人にもサテライザーの刃が振り下ろされる。そして管制室よりモニターを見ていた軍人達から声が上がった。軍人A「確かに……カーニバルはパンドラ個人の力量を測る公式戦だ、場合によっては複数を相手にするのも珍しいことではないがあ……」軍人C「これだけの人数を相手に出来る2年生など今まで事例が無い……」軍の本部の人間ですら驚愕するほどサテライザーの力は異常だった。

オペレーター「現学年1位行動を開始第3ブロックに移動を開始そして学年5位から3位も移動を開始しました。」軍人B「まさか、上位メンバー3人を1人で相手にするというのか……」

エリズ「さつさと、パンドラ負傷場所の結合及び治癒を急がせる！



その名に……偽りなし……か、うう」そういうと3位は意識を  
落とした……

場所は再び変わりゼネテックスの校舎そこに2人の学生が歩いてい  
た。シフォン「うん、今日はいいい天気ねシフォン」ティシ「そ  
ですな会長」2人の学生は楽しそうに話していた。この2人はこの  
ウエストゼネテックスに所属する3年生のパンドラである。髪がシ  
ョートでヘアピンを付けている少女の名はシフォン・フェアチル  
ドここウエストの3年生の学年1位であり生徒会長を務める少女で  
ある、その面度見のよさといつも笑みを絶やさない事から下級生か  
らも人気の高い少女である！そして彼女の隣を歩く少し青がかった  
ロングヘアーの少女はティシ・フェニル彼女も3年生であり学  
年3位の実力者であるシフォンの懐刀と呼ばれ生徒会の役員でもあ  
る。

ティシ「会長、今頃2年生のカーニバルが行われている頃ですね」  
シフォン「そうね」ティシ「今回は何か波乱は起きますかね、サ  
テライザーさんを止める人が」シフォン「うう……そうねええ、  
いるかしらね……ホッホホホ……波乱はないと思うは」テ  
イシ「えっ？どうしてですか」シフォン「現在の2年生の中で彼  
女に勝てるパンドラはいないは……下手をしたら3年生の上位  
メンバーを除けば彼女にかてる人はいないかもしれないはね」ティ  
シ「……会長」シフォン「なんちゃってね」ティシ  
「もう、会長」シフォン「ふふ、ごめんなさい！さあ、そろそ  
ろ戻りましょうか」ティシ「はい、あれ？」シフォン「どうした  
の？」ティシ「校門の前に誰かいますよ！」シフォン「えっ？」  
シフォンも校門を見るとそこには青ジーンズに黒の皮ジョンを来た  
少年が立っていた。ティシ「誰かのご家族のかたですかね？」シ  
フォン「そうねえ……とりあえず行ってみましょう困ってい  
るようですしね」ティシ「はい」そういつて2人は校門に向け駆け  
だしていた。彼女達はまど知る由もなかったこの少年との出会いが

自分達の運命を大きく変えることになるとは。これが初めて風炎の契約者とパンドラとの出会いであった。

接触禁止の女王（後書き）

誤字脱字をないように気を付けたいと思います

## 精霊の歌（前書き）

サブタイトルは似たようなやつも使います。

## 精霊の歌

ゼネティックスの校門に辿りついたカズヤはそこで、立ち往生していた……カズヤ「まいったな……どうやって入ればいいんだろう……うん、あれ？」カズヤがどうするか考えていると校舎の方から誰か走ってくる2人の女性が見えた。カズヤ「この人かな？」カズヤがそんな事を考えている内に2人わ門の前に来ていた。シフォン・テイシ「はあ、はあ、……ふう〜」シフォン「お待たせしました、ゼネティックスに

何か御用ですか。」シフォンが息を整えるといつものように愛想のいい笑顔を浮かべ話しかけてきた。カズヤ「はい、姉の墓参りに」シフォン「そうでしたか、では今開けますので」するとシフォンが監視カメラに向け合図をすると校門の扉が開いた。シフォン「さあ、どうぞ」カズヤ「ありがとうございます」そしてカズヤは門をくぐった。

場所は変わりカーニバルの訓練場上位メンバを撃破したサテライザーはそこで少し周りの様子を伺い動き出そうとした時瓦礫の山から甲高い声が響いたガネツサ「オーホッホッホッホッ、さすがは学年1位やりますわね！しかし、あなたの学年1位もここまでですは。この学年2位束縛の天使ガネツサ・ローランドによって敗北の味を知る事になるのですから。」そこには赤色が掛った髪に長髪を両方で分けて結んだ少女が立っていた。そして、まるで挑発をされた立場のサテライザーは表情を変えずに少しガネツサを見るとサテラ「……」まるで興味が無いかのように無視して歩き出した。ガネツサ「ちょ……ちょっとお待ちなさい。この私しを無視するとはいい度胸ですわああああ、はあああああ束縛の鎖いいいい」ガネツサの背中から飛び出した鎖がサテライザーに襲い掛かった。

カズヤ「ありがとうございます、本当に助かりました」シフォン「

いいえ、お気になさらないで下さい」ゼネティックスに入る事が出来たカズヤはシフォンとテイシの案内で戦死したパンドラ・リミッタの墓に向かっていた。カズヤ「あっ、申し遅れました僕はアオイ・カズヤといます」シフォン「私はこのウエストゼネティックスの生徒会長を務めていますシフォン・フェアチャイルドと申します。そして隣にいる子が生徒会役員のテイシ・フェニルさんです」テイシ「よろしくお願いします」カズヤ「こちらこそ」3人自己紹介がすむと再び歩き出していた。すると、カズヤの少し後ろを歩くシフォンが何か難しい表情をしていた。テイシ「どうかしたんですか会長？」その表情に気付いたテイシが話し掛けてきた。シフォン「えっ、ああちょっとね・・・なんか不思議な人だなんて思ってたね・・・」テイシ「会長もそう思いますか」シフォン「えっ、テイシもなの？」テイシ「はい、何ていうか佇まいが普通すぎるというか・・・何ていうか・・・すいませんうまくいえないです。だけど・・・なんか心がやすらぐんですよねあの人の雰囲気」それに関してはシフォンも同じ気持ちだった自分の目の前を歩く少年からは不思議と心を落ち着かせる雰囲気があった。シフォン達が考えに没頭しているとカズヤが話し掛けてきた。カズヤ「あの・・・あの」シフォン「あっ、、、はあはいいいい」突然呼ばれたので思わず声が裏返ってしまった。カズヤ「道はこのままで大丈夫ですか？」シフォン「あっ、ごめんなさい、ええもうすぐ着きます」シフォンが変わりに先頭に立って歩き出したテイシ「あの〜カズヤさん」カズヤ「何ですか？」テイシ「お姉さんのお名前何ていうですか？」カズヤ「アオイ・カズハです」シフォン・テイシ「えっ」2人から同じ声もれた。

場所は変わりゼネティックスのある教室、そこでは今年入学したパンドラ・リミッタの1年生がノヴァについて授業を受けていた。そして巨大なモニターの前には1人の女性が立っていた。その女性の名前はキム・ユミ4年前に起きた第8次ノヴァクラッシュから日

本を守り生き残った数少ないパンドラである。現在は退役しこのゼネティックスで講師をしている。

キム「異次元体ノヴァ、このノヴァの出現と同時に発せられるフリージングによって半径五キロ以内の物体及び生物は強制的に行動を停止されます。そこでリミッタの役目はこのノヴァのフリージングを中和しパンドラが活動可能な空間をつくる事」キムが説明をしていると。ヒイラギ「ふあああ」髪にヘアピンを留めた女の子があくびをしてしまった！その瞬間その子のパソコンの画面にキムの顔が写る。キム「ヒイラギ・カホ、私の授業そんなに退屈かね」するとその子は急いで立ちあがると、ヒイラギ「い、いいえ！とんでもないですキム先生」キム「それじゃ、あなた達パンドラについて説明してもらえるかしら」ヒイラギ「はい、え」と私達パンドラは聖痕を身体に熟成する事によってポルトテクスチャー、ポルトウエポンの装着が出来ます。さらに聖痕は私達に驚異的な身体能力と治癒能力をあたえてくれます」ヒイラギが言い終わるとキムは軽く拍手をしていた。キム「1年生にしては上出来です」褒められて安心したのかヒイラギは席についた。キム「今説明があつたように私達パンドラは聖痕の力によってどれほどの怪我をおつてもパンドラのDNAを辿る事によって傷を完璧に治癒する事が可能です。実際に私も4年前に右腕を失つた・・・」突如キムは右腕を見ながら悲しい顔をした。

すると、そこに1人の金髪の男子生徒の声が上がったアーサー「あのキム先生」キム「何だ、アーサー・クリップトン？」アーサー「4年前と言えば第8次ノヴァクラッシュが起きた時ですよね」ヒイラギ「あつ！」他の生徒達「あつ！！！！」アーサー「聞かせていただけませんか！その時の話を」するとキムは教壇の上に置かれていたりモコンを操作するとモニターに画像が映し出された。キム「ノヴァによる本格的な8度目の侵攻それが第8次ノヴァクラッシュ・

（過去）



命中しノヴァのコアを露出させる。その瞬間キムの指示が飛ぶ、キム「今だーーーーー」しかしその瞬間イレンバーセットの効力が消えてしまう。パンドラ達「あっああ」キム「ちっ、このタイムリングで・・・こそ、もう一度イレンバーセットだ」リミッタ「はい！」「キム達が再びイレンバーセットをやるうとした瞬間突如ノヴァから光が放たれる。

オペレーター「ほとんどのパンドラがLOSTですー、まだ息のあるパンドラを優先に回収を行ってください。」「キム「うううう、生きているのか・・・はっ！みんなは」その瞬間キム顔が驚愕に染まった・・・そこには部下であるパンドラ達とリミッタ達の亡骸があったからだ。キム「くそおお・・・」キムが再び立ちあがるうとした瞬間突如自分の右腕の違和感に気付いた、右手に顔を向けると自分の右手が溶けてしまったのだキム「ぐああああああ、があああああー」キムの絶叫が響いた。エリズ「キムーーーーー」キム「するとそこに声を聞きつけたエリズが走ってきた、エリズ「キム、しっかりと」キム「エリズ・・・生きていたのか」エリズ「なんとかね、待ってて今応急処置をするから」キム「すまない」処置がすむとキムはエリズの肩を借りその場を離れようとした瞬間、再び爆発が起こる。ノヴァの侵攻を止めようとしたヘリが破壊されたのだ。誰もが諦めかけた時にノヴァの正面に位置する鉄骨の建物の頂上に1人の少女がいた。キムとエリズもその姿に気付くその少女の声を叫んだ、キム「カズハ」エリズ「カズハちゃん」カズハ「・・・」聞こえているかはさだかではないが今のカズハには周りの声は全く聞こえていなかった。ただ、真っ直ぐに目の前のノヴァを見つめていた・・・最愛の弟を奪った存在を・・・そして次の瞬間カズハは走り出して全身を青白い光に輝かせながらノヴァのコアに攻撃を仕掛けていた。そして、カズハのボルトウエポンがコアに直撃する！ノヴァ「フウアアアアーーーーー」その瞬間ノヴァの身体が輝き出すと周囲の物と、そして・・・カズハを巻き込みながら消滅した・・・カズハ「カズヤ・・・私も今行くから

ね・・・」その瞬間アオイ・カズハの命と引き換えに日本は救われた。エリス「くうううううー」キム「カズハーハーハー」

(現代)

キム「・・・これが、第8次ノヴァクラツシユの真実だ・・・」キムが話し終わると全員が悲痛な顔をしていた。アーサー「・・・ありがとう・・・ございます」バツが悪そうに答えた、その瞬間キーンコーン・カーンコーン授業終了の音楽が流れた。キム「よし、それでは今日はここまでだ！個人で復習しとくように。それでは以上だ」生徒達「ありがとうございます！！」キムは教室を出るともう一度教室にいる1年生達を見ていた、全員がこれからのゼネティックスをそして人類を守ってくれる逸材達だ！キム「カズハ、あなたが守ったこの世界を今度は私達を守るからね・・・次の世代の子達の為に・・・そういえばカズヤも生きていたらあの子達と同じ年頃なんだよな」そうつぶやくと教室を後にした。だがキムは知らなかった今この瞬間にカズヤがここゼネティックスにいる事を・・・

カズヤ達3人はある広い草原の丘にいた、そこはノヴァとの戦いによって戦死したパンドラ・リミッタが眠るお墓がある場所だった。そしてカズハその墓の1つに花を添え手を合わせていた(アオイ・カズハ)その墓石にそう彫られていた。カズヤ「久しぶりだね・・・姉さん」まるでカズヤは会話するように話し掛けていた！シフォン「あなたのお姉さん、アオイ・カズハさんは私達パンドラの英雄であり！そしてたった1人で4年前の第8次ノヴァクラツシユにおいて自分の命を掛け日本を守った本当の英雄です。」シフォンが答えた。カズヤ「そうですか・・・」ふとつぶやくとカズヤは周りを見渡していた。すると、カズヤ「こんなにも沢山の方が亡くなられたんですね、自分の大切な人達を・仲間を・そしてこの背中に向こうで生きてる沢山の人達を守る為に」シフォン「そうですね、ノヴァとの戦いは常に命掛けですが我々は戦わねばなりません。あな

たのお姉さんアオイ・カズ八さんのように「その言葉にはとても強い思いが込められていた。

カズヤ「そうですね」カズヤが不意につぶやく手元に持っていた入れ物から何かを取り出した、何だろうと2人が顔を見合わせているとカズヤの手にはオカリナが握られていた。カズヤ「ここの、風は心地いいな」その瞬間カズヤがオカリナを吹いた瞬間シフォン、テイシ の思考は完全に停止した。」

「まるでこの世のものとは思えないその幻想的な音に2人は完全に見とれ心を奪われていた。しかも今この瞬間周りの世界さえも変わったかのような錯覚と、そして何より2人の目にはカズヤの周りに蒼と紅の光が輝いているように見えた。シフォン・テイシ 「この人は・・・一体」そしてカズヤがオカリナを吹き終えると、カズヤ「姉さん、そしてみなさん！みなさんの想いは僕達に届いていませんどうか僕達を見守って下さい。カズヤ「すいません、お待たせしました」カズヤが振り向いて2人に声を掛けた。シフォン・テイシ 「・・・・・・・・・・」  
2人とも今の光景に心を奪われ状態のままだった。カズヤ「あの？シフォンさん、テイシ さん」シフォン・テイシ 「へっ・・・・・・・・・・」  
「カズヤ「大丈夫ですか？」カズヤが心配そうに答えた、すると2人はシフォン「あっいつつああああ・・・大丈夫です」テイシ 「はああああ、はい」かなり動揺していたのか2人とも恥ずかしそうにしていた。カズヤ「よかった、それでは行きましょう」シフォン「ええ」テイシ 「はい」そして3人はその場を後にした。

## 精霊の歌（後書き）

なるべく長く書きたいです。キャラクターの心の感じも

姉の面影（前書き）

カズヤの力をここで少し見せられたらと思います

## 姉の面影

教室を後にしたキムはある所に向かっていた、そしてその場所に着くと！キム「エリズ入るぞ」そう言うのとドアを開け部屋に入ってしまった。するとそこには1人の女性が白衣を着て座っていた。エリズ「ちょっとキムここは保健室何だからノックくらいしなさいよ」勝手に入ってきたキムに少し呆れながら笑顔で答えた。この女性の名はエリズ・シュミッツ、キムと同じく4年前のノヴァクラッシュに参戦していたパンドラの1人である！現在はキムと同じく退役しここウエストゼネティックスで校医をしている。エリズ「でえ、突然どうしたの？こっちはようやくカーニバルの負傷者の治療が終わったばかりなんだから」キム「悪い・・・ちょっとな・・・」エリズ「どうかしたの？」キムの異変に気付いたのか、諭す話しかけてきた。キム「実は、さっきの講義の時に第8次ノヴァクラッシュの話をして1年生に聞かれて話したんだ・・・」エリズ「別にいいじゃない、今の子供がああ戦いについてやカズハの事を知りたがるのは別におかしい事じゃないは」エリズの言う通りである、カズハは今でもなおパンドラ達の目標であり英雄なのだから。カズハの事を知りたがるのは珍し事じゃない。

キム「違うんだエリズ・・・」エリズ「えっ？」キム「勿論話しながらカズハの事も思い出していた。それと・・・」エリズ「それと？」キム「カズヤの事を思い出してしまったんだ、あの事件の事も・・・」その瞬間エリズ表情にも悲しみが見えた。エリズ「そう・・・カズヤの事を・・・」あの事件とは4年前のノヴァクラッシュが起こる前に起きた事件である、2人にとってそれは忘れる事の出来ないものだった。

(過去)

あれは、3人でカズ八の家に行つた時……

カズ八「もう2人と本当に着いてくるなんて」カズ八が呆れながら自分の左右を歩くキムとエリズに話しかけていた。キム「だつてカズ八の自慢の弟君見てみたいじゃないねえ、エリズ」エリズ「そうね、ウエスト最強のバンドラ！アオイ・カズ八をブラコンに変えちゃうほどの子なら是非見なくちゃね」2人とも笑いながら答えた。カズ八「私は別にブラコンじゃないわよ、失礼しちゃうは」エリズ「ふふふ、自覚ないのね」キム「あのね〜カズ八普段弟君の話をしている時の自分を思い出してみなさい、あれでブラコンじゃなかつたら何よつて感じよ」キムが付け加えるように言つてきた。とまあ、そんな風に話ながら歩いてみると綺麗な町が見えてきた。花に囲まれ縁があり何よりその町が活気に溢れていた。キム「へ〜え、こんな町があるなんて知らなかつたな」エリズ「ホント！」そしてしばらく歩くと目の前に一軒の家が見えてきた。カズ八「ここが、私の家よ」キム・エリズ「へえ〜〜」カズ八の家は木造つくりでいて古い感じはするがとても暖かい気持ちにさせてくれる家だつた。2人が家を見ている間にカズ八は家のチャイムを押していた。・・・ピンポン・・・鳴らしてみるが誰も出て来なかつた！カズ八「あれ、今日帰るつて連絡したけどな、ごめん2人とも少し待つてて」そういうとカズ八は裏口に走つていった。エリズ「素敵な家ね」キム「ああ」2人ともカズ八の家を見ながつぶやいていた、するとドアの開く音が聞こえるとそこから1人の女の子が出てきた。カズヤ「すいません、ちよつとシャワー浴びていたものですから！どちら様ですか？」カズヤが2人に話しかけた。しかしとうの2人はカズヤに見とれていたキム・エリズ「……」カズヤ「あつ・・・あのお〜」すると不意にキムがエリズに話しかけた。キム「エリズ、カズ八妹がいるなんていつてたつけ？」エリズ「いいえ、聞いてないわね」カズヤ「妹？あつああ、そつか」少年は何を納得したのか笑いながらこたえた。カズヤ「お姉さん・・僕・・男ですよ」キム・エリズ「えつ・・・えええええーえええええーえええええ」

2人の絶叫がこだました。カズハ「どうしたのー、2人共」声を聞きつけたカズハが走ってきた、そして現場を見て納得したように微笑んでいた。カズハ「まあ、驚くわよね！ふふカズヤー」名前を呼ぶといきなりカズハはカズヤに抱きついていった。カズヤ「カズハ姉さん」突然の姉の登場にびっくりしていた。カズハ「ただいま、カズヤ」カズヤ「お帰りなさい、カズハ姉さん」カズヤも微笑みながら答えた。そしてカズハはカズヤを抱きしめながらキムとエリズに振り向くとカズハ「2人とも紹介するわね、私の弟のアオイ・カズヤよ」カズヤ「初めまして」キム「はっはは」エリズ「全く、驚かせないでよね」2人は笑いながら答えた。カズヤ「とにかく、中にどうぞ冷たい飲み物でも用意しますから」カズハ「さあ、2人とも」キム「ああ」エリズ「ええ」2人も入った。これがキムとエリズにとってカズヤとの初めての出会いであり、最後の出会いになった。

(現代)

場所は変わりゼネティックスの校庭、カズハの墓参りがすんだ3人は出口に向かい歩いていった。そして、シフォンは歩きながら先ほどの光景を思い出していた。シフォン「さっきのは一体？」テイシ「会長、さっきの間間違えじゃないですよね」テイシ「同じようにさっきの光景を思い出していた。テイシ」・・・聞いてみましょうか「シフォン」うん、いきなりは・・・」2人がそんな相談をしていると出口の門が見えてきた。カズヤ「シフォンさん、テイシさん今日は本当にありがとうございました」シフォン「えっ、お帰りになるんですか？」カズヤ「ええ、姉に会う事も出来たので」シフォン「そ、そうですね、ははっ、ははは」この時シフォンは内心焦っていた、このまま帰ってしまったらさっきの事が聞けなくなる・・・どうしようか考えてると、テイシ「あの、よかったです校舎を見ていきませんか？」カズヤ「えっ」テイシ「せっかく、来られたんですから是非」シフォン「そう、そうですね」

「是非見ていかれて下さい」カズヤ「・・・わかりました。それではお言葉に甘えて」シフォン・テイシ「はい！！」「シフォン「それでは、テイシ お願い」テイシ 「はい！こちらです」

ゼネティックスから少し離れた山の中に巨大な洞窟があった、その穴はどのようにして出来たかは不明だがその洞窟から発せられる異質な雰囲気は周りとは不釣り合いだった。そして、その洞窟の奥に息を潜める数体の影があった。鵜ぬえ「もうすぐだ・・・もうすぐ我らの力は完全に元に戻る」一体の顔が猿で下半身が蛇に背中に翼の生えた生物が喋っていた。窮奇きゆうき「うるさいぞおー鵜ええー、切り裂かれたいのかー」今度は身体は完全な虎の身体に以上に伸びた牙そして背中に巨大な翼を広げた生物が喋っていた。鵜「強がりにはよせ窮奇よ！いくらお前が大陸最強とうたわれた妖魔であろうと今の状態では我には勝てぬよ、フッフフ、フッフッフハッハッ」そうこの2体は妖魔と呼ばれる存在であった。窮奇「なら、試してみるかあああああー」窮奇が動き出そうとするといきなり、駕がし驚ゆっ「なりません窮奇様、そのお身体では」窮奇「邪魔をするな駕驚ゆっ」鵜「ハッハッハ、手下に心配されるとは落ちたな窮奇よ！さあ、我は先にここを出るぞ、いきのいい人間の女がいる所を見つけたんでな。ではな窮奇よ」そういうと鵜は洞窟を飛び出し消えていった。窮奇「覚えているがいいいいいい、力が戻った時真っ先に貴様を八つ裂きにしてやるはー」駕驚「窮奇様」そういうと2体は洞窟の奥に消えた。

再び場所はゼネティックスの校舎の中、カズヤはゼネティックスの施設や教室を案内してもらっていた。テイシ「ここが、ゼネティックスの管制室です。ここは全てのセキュリティの制御をしている場所です、このおかげでノヴァをいち早く発見する事が可能です」カズヤ「へへへ、凄いですね！」カズヤが感心している後ろでシフォンとテイシ は先ほどの事について聞くタイミングを伺っていた。

シフォン「もう、いいかしら・・・」テイシ「・・・はい」2  
人が聞こうとした瞬間カズヤが話かけてきた。カズヤ「あの？」シ  
フォン「はっ・・・はいいい」いきなりの事だったのでまた声が裏  
返ってしまった。カズヤ「さっきから聞こえるこの音何ですか？」  
シフォン「ああ、これは現在訓練場でカーニバルが行われてるんで  
す。」カズヤ「カーニバル？」シフォン「パンドラ同士の実戦を想  
定した訓練の事です、このカーニバルによってパンドラの力の向上  
とランク付けを行っているんです！」カズヤ「なるほど」カズヤが  
納得していると突如天井の窓ガラスが割れるとそれと同時に女の  
人が降ってきた。カズヤはその女性に視線を向けるとおかしな事に  
気が付いた。なんとその女性は服など破けており、ほぼ生まれのままの  
姿のまま落ちてきたのだ。とうの降ってきた女性は！ガネツサ「  
何ですのあの女！この前よりも強くなってるじゃありませんか・・・  
くう・・・」忌々しそうにつぶやいていた。ガネツサ「ん？」ふと  
視線に気付いたのかカズヤの方を振り向いた、カズヤはカズヤでな  
んだか困った顔をしていた。ガネツサ「なあっつな何を見ていま  
すのおー」先ほどの感じとはうって変ってまるで乙女のように  
露出している部分を手で隠すがあまり意味をなしていなかった。カ  
ズヤ「あっ、すみません」目の前に裸体の女性がいるのにカズヤは  
至って冷静だった、そのカズヤの反応にガネツサはしょうしょプラ  
イドを傷付けられたのか少し顔をゆがめてカズヤを睨むがカズヤに  
は効果は無く逆に、カズヤ「あゝ、どうして裸で天井から落ち  
てきたんですか？もしかして露出狂なんですか？でしたらもう少し  
恥じらいを持った方がいいかと」そのカズヤの言葉にガネツサが顔  
を真っ赤にしながら怒りだした。ガネツサ「この私が露出狂ですて  
えええー」あなたねこの格好を見てどうしたらその  
考えに結び付くんですの、これはー」ガネツサが続きを言  
おうとすると突如天井のガラスが割れるとそこからまた1人の女性が  
落ちてきた。ガネツサ「くうう・・・」ガネツサは女性を睨み  
つける。その女性もガネツサに目を向けていた！シフォン「サテライ

「ザーさん」突然のサテライザーの出現にシフォンもティシ戸惑っていた、しかしカズヤは違っていたサテライザーを凝視したまま固まっていた、カズヤ「カズ八姉さん・・・」一瞬だがサテライザーの姿にカズ八の面影を見た。カズヤは一度目をこするともう一度サテライザーを見た、そこにいたのは金髪の長い髪をした1人の女性だった。

これが接触禁止の女王と風炎の契約者の初めての出会いだった・・・

カズヤの力・突然の再会（前書き）

カズヤとキム達は直接は会いません

## カズヤの力・突然の再会

天井から無事着地したサテライザーはすぐにガネツサへと視線を向けた、その眼光は鋭く向けられているガネツサは身体が硬直して動けずにいた。サテライザーはふと誰かの視線に気づく、そこには黒髪の少年がいた誰だろうとサテライザーが視線をカズヤに向けた瞬間ガネツサがチャンスとばかりにサテライザーに攻撃を仕掛けた。ガネツサ「くらえええええええー」鎖がサテライザーに向け放たれた。サテライザーはそれに気付くと素早く四方からくる鎖を全て弾き飛ばした。サテラ「……………」ガネツサを睨みつける！ガネツサ「くううう……………」悔しそうにサテライザーを睨みつけと再び鎖の攻撃を仕掛けるが、サテラ「無駄だ」そういうと再び鎖を弾き飛ばす、しかしその時サテライザーの視線に弾き飛ばした鎖が黒髪の少年に向かっていて、シフォン「危ないー」ティシ「カズヤさんー」2人が叫ぶ。しかしこのカズヤは冷静にそれをかわそうとした時自分の視界にサテライザーが飛び込んできた、そして自分を庇うように抱きつく飛んできた鎖がサテライザーに直撃した。サテラ「ぐうはああああー」そしてそのまま倒れた。カズヤ「大丈夫ですかー、しっかりして下さい」すぐさまカズヤが駆け寄って抱き起こす。サテライザーの直撃した背中からは大量の出血があった！カズヤ「ひどい…動かないで下さいすぐに直しますから」サテライザー「……………」何を「カズヤが行動を起こそうとした瞬間、鎖がサテライザーに向け放たれた。カズヤはそれに気付くとサテライザーを抱きかかえ攻撃をかわす。ガネツサ「なあー」シフォン「……………」見えなかった……………」ティシ「うそ……………」三人とも今のカズヤの動きに驚愕していた……………」カズヤ「いきなり何をするんですか！！この人は今僕を庇って怪我をしたんです、そんな人に攻撃を仕掛けるなんて」カズヤがガネツサを咎める。ガネツサ「そんなの関係ありませんは！これは

カーニバル、実戦を想定した訓練なのですから。怪我だろうが何だろうが油断したその女のミスですは、それにあなた見た所ゼネティックスの学生ではありませんはね・・・ふっ、部外者は口をはさまないでいただきたいですは」カズヤ「確かに僕は部外者です・・・けど、自分を盾にしてまで助けてくれた人を見捨てるほど腐った人間になるつもりはありません」ガネツサ「まるで私がその腐った人間とでも言いたげな発言ですわね、いくら私でもそこまで寛大ではありませんわああーあなたも少し痛い目を見た方がいいですわね。くらいなさいー」ガネツサが再度攻撃しようとした時オペレーター「カーニバル終了！カーニバル終了パンドラはただち戦闘を停止せよ、繰り返しパンドラはただちに戦闘を終了せよ」声が流れる。ガネツサ「なんですてえ！！くう、後少しあの女を倒せるというのに・・・諦めてなるものですか」ガネツサが命令を無視して再びカズヤとサテライザーに向け攻撃を仕掛けようとすると、シフォン「おやめなさい、ローランドさん」いつの間にかガネツサの左右にシフォンとテイシが移動し動きを封じていた。テイシ「感情に流されたとわいえ、パンドラが一般人に攻撃を仕掛けるなんて許されません」テイシがガネツサを咎める。さすがのガネツサも3年生の1位と3位が相手ではどうしようもなかった。ガネツサ「わかってはいますは、今のは冗談ですわよ！」それがガネツサに出来たせめてのも抵抗だった。

そのころ管制室では・・・オペレーター「全パンドラ戦闘停止しました」マーガレット「そうですか」軍人A「とんだ災難でしたな、まさかあしそこで一般人が巻き込まれるとは」軍人C「全くですなあゝゝ」軍人達からそんな声がこぼれた。しかしとうのマーガレットは、マーガレット「いいえ、まずは一般人が怪我がなくてよかったですは、カーニバルはまだありますから」まるで何とも無かったように答えた。マーガレット「せっかくお越しいただいたのにこのような形で終わってしまいもうしわけありません」マーガレットは軍人達に頭を下げた。軍人B「いいえ、素晴らしいものをみさせて

頂きましたよ！次もまた期待していますよ」マーガレット「はい、ありがとうございます」軍人A「それでは、我々も退散するか」軍人C「そうですね、それではマーガレット校長」マーガレット「はい、送って差し上げて下さい」教員「はい」そういうと教員は軍人を外に案内した、それを見送るとマーガレットはオペレーターに指示を出した。マーガレット「最後に戦闘のあった場所をうつして下さい、一般人の安否の確認を」オペレーター「了解」すぐさまカズヤ達が写ってる映像が映し出された。そして、その瞬間マーガレット達は幻想的な光景を目にした。

シフォンがガネツサに対して説教していた頃、少し離れた場所でカズヤはサテライザーを抱きかかえ立っていた、すると！サテラ「うっとうっとうっ・・・」サテライザーが意識を取り戻した。カズヤ「大丈夫ですか？」カズヤが心配そうに声を掛けた。しかし、声を掛けられたサテライザーはそれどころでは無かった。現在の自分は見知らぬ男の子にお姫様だっこされ抱えられているのだから。サテライザー自身顔が赤くなるのがわかった、しかしその時サテライザー自身ある事に気付く。サテラ「・・・触られてるのに・・・全然イヤじゃない」それはサテライザーにとつて驚くべき事だった。再び少年に顔を向けると屈託のない笑顔を向けてきた、その瞬間再び顔が赤くなるとの同時にこの少年から心地よい風と太陽のような暖かさを感じた。シフォン「今回は見逃しますが、次は処罰の対象になりますからね！」ガネツサ「わかっていますわ！ふんっ」シフォン「全くうゝ、あつカズヤさん大丈夫です・・・」カズヤの安全を確認する為に振り向いた瞬間シフォンは目の前の光景に完全に心を奪われた。テイシ「会長？」シフォンの様子の変化に気付いたテイシ「とガネツサも視線を戻した瞬間2人も目の前の光景に心を奪われた。カズヤ「息吹け癒しの風、蒼癒」カズヤがつぶやいた瞬間サテライザーとカズヤの周りを蒼い光が包んでいく、そしてそれと同時に背中の中の傷が見る見る内に消えていく。シフォン「あれは・・・さっきの・・・」テイシ「間違えありません、やっぱり見間違え

じやなかった」先ほどアオイ・カズ八のお墓の前で見た光景と同じ事が目の前で起きていた。ガネツサ「な、何ですの・・・あれは」目の前で起きている光景にガネツサの思考は完全に停止していた。それは実際にその現象を受けているサテライザー自身もそうだった、サテラ「これは一体・・・」改めて目の前の少年を見る、少年の周りを蒼い光が包んでいた余りの心地よさに目をつぶってしまうのを懸命に絶えていた。そして、最後に少年の笑顔を見たのを最後にサテライザーの意識を途切れた。そして同時に蒼い風もやんでいた・・・するとそこに救護班がやってきた！隊員A「退いてください、重傷者を搬送します」カズヤ「あつ、すみません」隊員A「おい、そのパンドラも搬送しろ」隊員B「了解」その指示に何人かの隊員がガネツサに向かう。隊員A「他に人がはいませんか？」カズヤ「大丈夫です」カズヤが答えた。隊員A「よし、急いでメデイカルセンターに運べ。」他の隊員「はい！！！」「そいうと足早に去って行った。シフォンとティシ もようやく今の現状に気が急いでカズヤの側に近づく。ティシ 「あの、すみません！本来は私達がしなきゃいけないのに・・・」ティシ が申し訳なさそに頭を下げた。カズヤ「いいえ、気にしないでください」カズヤは笑顔で答えた。シフォン「あの・・・アオイ君・・・さっきの・・・」シフォンがいを決してカズヤに先ほどの聞こうとした時突然カズヤが窓の外を振り向いたカズヤ「うっ！！」シフォン「あつ、あの・・・」突然のカズヤの行動に2人は戸惑っていた。そんな2人をしりめにカズヤ今感じた邪悪な気配を探っていた。カズヤ「・・・気のさいか」一応風の精霊に警戒するように伝えてカズヤは再び2人に視線を戻す。カズヤ「あつ、すみません！」シフォン「あつ、いいえ」シフォンも気にしてないいつもの笑顔で答える。カズヤ「すみません、シフォンさん、ティシ さん僕ちよつと用事があるんでここで失礼します」シフォン・ティシ 「えっ！！！！」2人とも思わず変な声を上げる。カズヤ「今日は本当にありがとうございました。おかげで姉さんに会う事も出来ましたから！出口は覚えてるんで見送りは大丈夫

夫ですから「シフォン」「そんなー」テイシ「そうです！ちやんとお送りします」2人とも凄い剣幕でよつてきた。カズヤ「あっははは、じゃお願いします」

その頃マーガレットがいる管制室では全員が今日の前で起きた光景に唾然としていた。オペレーターA「今は一体……」オペレーターB「あんな僅かな時間で傷を回復させるなんて……ありえない」その他のオペレーター達からも声上がる。そんな中で1人マーガレットは今の現象について心あたりがあった。マーガレット「まさか……」教員「シスター・マーガレット？」1人考えこむマーガレットの様子に気付いた教員が話しかけてきた。マーガレット「すぐに、この映像を校長室のパソコンに転送して下さい！そしてキム・ユミ、エリズ・シュミッツ両先生を至急校長室に伝えて下さい」教員「はっ、はい」突然のマーガレットの指示に教員はびつくりしながらも答えた。それだけ伝えるとマーガレットは足早に管制室を後にする。そして、校長室に向かいながらある事を考えていた。マーガレット「先ほどのあの力は……まさか……、それにあの男の子は……もしや」自分の仮説が当たっているか調べる為にマーガレットはさらに歩きを早めた。

その頃、校門の入り口に着いた3人は出口で会話をしていた。カズヤ「今日は本当にありがとうございました」カズヤが改めて2人に礼を言うと、シフォン「いいえ」テイシ「また、着て下さいね」カズヤ「はい、出来れば姉さんのご学友の方とも会いたいと思っておりますから、それじゃ」そういうとカズヤは停めていたバイクにエンジンを掛けると行ってしまった。シフォン「結局、聞けなかったわね……」テイシ「はい……」2人は今日自分達が見た現象を思い浮かべながらも一度カズヤに会える事を願った。

同じ頃、キムとエリズは校長室に向かっていた。キム「緊急の呼び出しって事だけど……何だろうな？」エリズ「さあ、行けばわかるでしょ」そんな事を話してる内に校長室に着いた。キムがドアを叩くと、マーガレット「どうぞ」キム・エリズ「失礼します」キム「

緊急のご要件とは？」キムが椅子に座っているマーガレットに話しかけた。するとマーガレットはおもむろに立ちあがると持っていたリモコンを操作しスクリーンを出すと！マーガレット「あなた方に見ていただきたい映像があります」そういうと映像を再生する。すると、そこには先ほどまで行われていた2年生のカーニバルの映像が映し出されていた。エリズ「シスター・マーガレット、これが何か？」エリズの質問にもマーガレットは反応せずただ映像を見ていた。2人ともいつもと違うマーガレットも様子に首をかしげていた。すると急に映像が変わるとゼネティックスの校舎の廊下が写りそこには3人の人が写っていた。キム「あれは3年のシフォン・フェアチャイルドとティシ・フェニルだな。だけど・・・もう1人は誰だ？」エリズ「生徒の身内の人じゃないかしら」2人がそんな話をしていると突如天井のガラスが割れそこに2人のパンドラが落ちてきた。エリズ「あれは2年のサテライザー・L・ブリジットとガネット・ローランドね」キム「あいつら、校舎の中で戦闘を始めていたのか、はあ〜どうりでカーニバルが強制終了したわけだ」2人は呆れるようにつぶやいた。エリズ「シスター・マーガレット見せたかった映像とはこれですか？」マーガレット「いいえ・・・ここからの映像です！よく見てみてください」そういうとマーガレットは視線を元に戻す。2人も再び視線を映像に戻すとそこではガネットサガサテライザーに攻撃を仕掛けていた、しかしサテライザーはその全てを防ぐ。キム「さすがだな・・・」エリズ「ええ、2年最強は伊達じゃないわね」2人は荒削りながらも高い戦闘能力をもつサテライザーに感心していた。その時弾いた鎖が先ほどの一般人の少年に直撃しようとしていた。キム「あぁああ」エリズ「あぶないー」2人も思わず叫んでしまった。しかし、その少年を庇うようにサテライザーが盾になっていた。キム「ほう〜これは」エリズ「以外ね、あの接触禁止の女王サテライザー・L・ブリジットがね」2人はサテライザーの行動を見て彼女に対する認識を改めていた。しかし、映像ではガネットサガがさらに攻撃を仕掛けようとしていた、

それを先ほどの少年がサテライザーを抱きかかえながら説得していた。しかし、その瞬間ガネツサは少年に向け攻撃を仕掛けていた。キム・エリズ「なっ！！！！」ガネツサの行動に驚いた2人だったが、さらに驚く事になるガネツサ攻撃が当たったと思った時少年はサテライザーを抱えたままいつの間にか別の場所に移動していたのだ。エリズ「い、今は・・・」キム「全然みえなかった・・・」いくら映像とはいえこれほど人の動きが見えなかったのは初めてだった。キム「シスター・マーガレット、もしかしてみせたかったものとは・・・」キムが話しかけるがマーガレットは映像から目を離さない。キムも再び視線を映像に戻すとガネツサがシフォンとティシに抑えられていた、そして、その近くで信じられない事が起こっていた。そこでは少年とサテライザーを蒼い風が包んでいたのだ。もしかしたら見方によっては蒼い光が包んでいるようにも見えたりもしれない、隣にいたエリズもその光景に言葉を失っていた。すると突然マーガレットが映像を停止2人に振り向くと、マーガレット「一応、これもあなた方に見せたかったものですが・・・しかし一番あなた方に見せたかったのはこの写っている少年の顔なんです」キム「顔？」エリズ「少年？」今の光景に驚愕していた2人は意味が理解できなかった。すると、マーガレットがリモコンを操作し映像をズームするとさらに少年の顔を鮮明にした、そして出てきた少年の顔を見た瞬間キムとエリズの表情が信じられないものを見ているかのような目になりその映像から目を話す事出来なかった。キム「・・・そっ・・・そ・・・そんなあ・・・どうして」エリズ「こんな・・・事が・・・、ありえない・・・だってカズヤは4年前に2人の動揺はすさまじいものだった。なぜならそこに写っていたのは4年前のあの事件で死んだはずのカズヤがうつっていたのだから。

**動きだす闇の住人達（前書き）**

妖魔達との接触と、4年前の出来事少し掛けたらと思います

## 動きだす闇の住人達

キムとエリズが映像を見ている頃、カズヤは都市部に向かいバイクを走らせていた。すると、またゼネティックスで感じた禍々しい妖気を感じた。カズヤ「うっ！！」カズヤはバイクを停止させると、ゼネティックスの方角をみる。カズヤ「胸騒ぎがする・・・」そういうとカズヤはバイクをリターンすると再びゼネティックスに向かった。

そして、場所は変わりゼネティックスのある部屋！そこに先ほどのカーニバルで負傷したサテライザーが治療を終え自分の部屋に戻っていた。そして、サテライザーはベッドに横たわりながら今日起きた事を思い出していた。サテラ「あの子は一体・・・」戻って来てからあの少年の事が頭から離れなかった。あの不思議な力もそうだが、何より人が自分に触れるのをイヤな自分があればほど触れられてイヤじゃなかったのは初めての事だった。サテラ「あの子の手・・・暖かかったな」サテラはそれを思い出すと胸が暖かくなるのを感じた。自分が知ってる、あのいまましい弟とは違うものにサテラ「くっつ・・・」少し昔を思い出したのか忌々しげに口を歪めた。サテラ「会いたいな・・・もう一度」あの笑顔をもう一度見たいサテライザーもシフォンやティシ 同様カズヤとの再会を願った。

校長室・・・そこではキムとエリズは今だ目の前に突き付けられた事に動揺を抑えきれずにいた。マーガレット「2人とも大丈夫ですか・・・」マーガレットが心配そうに声を掛けてきた。すると、少しだけ落ち着きを取も出したエリズが喋り出した。エリズ「はっははい・・・大丈夫・・・です・・・はあ、はあ」なんとか落ち着こうとしているがやはりまだ動揺しているようだった。すると、ずっと映像を見ていたキムが突然喋り出した！キム「これは一体どういうこ



た事があるキムとエリズには今のこの町の姿が信じられなかった。そこには、あれほど緑に溢れていた自然を初め、咲き誇っていた花達、あれほど活気に満ちあふれていた町が瓦礫の山となり地面にはいくつものクレーターがあり周りからは焼けただれた匂いが充満していた。そこにはもはや町と呼ばれる姿は無くただの荒野が残っていた！まるで元から人存在していなかったとでもいうように……

マーガレット「……これほどの事をノヴァが……」マーガレットは改めて自分達が対峙している存在の脅威に恐怖した。しかし、すぐに切り替えると近くで作業をしていた軍の隊員を呼びとめた。

マーガレット「いいですか」隊員A「えっ、あっ！シスター・マーガレット」隊員は姿勢をただとマーガレットに振り向いた。マーガレット「犠牲者や負傷者はどれくらいになっていますか？」

マーガレットの言葉にカズ八を初め全員が隊員に振り向いた。これほどの惨状なのだ犠牲者の数は想像を絶するだろう、もそかしたら全員死亡という最悪の結末かも知れない。全員がそんな事を考えていたが、しかし隊員から返ってきた内容は理解できないものだった。

隊員A「犠牲者は……1人です……他の住民達は全員安否が確認されています」マーガレット「なんですって……」

これだけの事がありながら犠牲者が1人……「そのあまり不可思議な回答に言葉を失っていた。しかし、そんな中キムが「カズ八！カズ八も無事かも知れないぞ」隊員の言葉を聞いてキムが嬉しそうにカズ八に話しかけた。エリズ「カズ八ちゃん」カズ八「うん……」

カズ八も先ほどの暗い表情とはうって変わりすこし生気が戻って来ていた。後輩達「カズ八先輩！！！」後輩達もカズ八の元に寄って来ていた。しかし、カズ八達の希望は一瞬で絶望へと変わった。

カズ八達が喜んでいる所に隊員が近づいて来ていた、すると突然カズ八に話しかけてきた。隊員A「あの、アオイ・カズ八さんですか……」

隊員は俯きながら話しかけてきた。カズ八「はい……」

隊員「実は……先ほどの犠牲者1名は……」

その時全員の脳裏に

最悪の答えがよぎった。隊員A「犠牲者1名は・・・うう・・・アオイ・カズヤ君なんです」誰もがその言葉を理解できなかった。その時、キム「ふざけるなあー！ー、他のみんなが全員無事でカズヤ1人が死んだだとおおお！そんなふざけた事があるかー！ー」キムが隊員に掴みかかっていた。エリズ「キム、やめなさい落ち着いて」後輩B「キムさん」マーガレット「それは一体どお言う事ですか？カズヤ君だけが死亡だなんて・・・他の住民は別の場所に避難していたとでもいうのですか・・・」隊員A「それが、住民全員もわからないというんです。」マーガレット「それはどういう事ですか？」隊員A「住民達に聞くととても逃げる時間なんて無かったというんです。そして何より全員が何か特別なものに守られた気がすると・・・」マーガレット「特別なもの？」隊員A「とにかく、今回のこの事件は不可解な事が多すぎます犠牲者が1人というのも奇跡なんです、何よりこれはノヴァ仕業じゃないかもしれないんです」キム「それは、どういう事だ」隊員A「生き残った住民から話を聞いたんですが、誰もノヴァの姿を見てないというんです・・・」キム「そんな・・・」隊員A「とにかく、この事件は不可解な事が多すぎます・・・」そういうと隊員は作業に戻って行った。誰もがカズ八にかける言葉が見つからなかった、すると不意にカズ八が立ち上がった。キム「カズ八・・・」すると突然廃墟と化した町に向かい走り出した。エリズ「カズ八ちゃん」キム「カズ八」突然走り出したカズ八をキム・エリズ、そして後輩が追いかける。そおして、カズ八はある場所にとまっていた、そこはカズ八達の家が建っていた場所だった。エリズ「カズ八ちゃん・・・」するとカズ八はいきなり瓦礫の山をどかし始めた。カズ八「カズヤ、待っててね・・・すぐに助けるから・・・」そう口ずさむとカズ八は一心不乱に瓦礫をどかしていた。爪が割れ手から血が出てカズ八は辞めようとしなかった。キム「カズ八ー！ー」後ろからキムがカズ八を抑えるように抱きついた！カズ八「キム離してー！ー、カズヤがカズヤが助けを待ってるのー！ー」エリズ「カズ八ちゃ

ん!!!カズヤは・・・もう・・・」エリズも後ろから抱きついていた。その瞬間カズ八が地面に座り込む、カズ八「こんなのって・・・こんなものってないよおおー」カズ八の目から涙が溢れていた、もうあの笑顔を見る事はできないのだ・・・もうあの温もりを感じる事は出来ないのだ。カズ八「カズヤああああ・・・カズヤああああ・・・カズヤああー」カズ八の絶叫と悲しみが辺りに広がった、そしてその瞬間カズ八の涙ように大粒の雨が降り出した。

(現代)

キムとエリズはその時を思い出していた、2人ともあの時のカズ八の顔は一生忘れる事は出来ないだろうマーガレット「とにかく、まだ可能性があるというだけでカズヤ君と決まった訳ではありません」キム「はい・・・」エリズ「そうですね!」2人共曖昧ながらも何故かあれがカズヤだと確信していた。マーガレット「あの少年がカズヤ君本人か確認するのも大事ですがもう一つ確認しなければならぬ事があります」マーガレットご答えた。エリズ「確認する事ですか?」エリズが質問してきた。マーガレット「カズヤ君が使ったと思われる先ほどの力の事です」キム「あっ!!!」エリズ「そういえば、あの力は一体」2人ともカズヤが生きているかも知れないと事で頭がいっぱいで先ほどの幻想的な光景を忘れていた。キム「シスター・マーガレット、先ほどの力が何なのかご存じなんですか!」エリズ「えっ!!!教えて下さい。」いつもは冷静なエリズもまえのみりになり聞いてきた。マーガレット「2人とも、まずは落ち着きなさい。女性がはしたないですよ!」マーガレットの言葉に今の自分の姿を見て赤面する2人、キム・エリズ「失礼しました・・・」2人はマーガレットに頭を下げると姿勢をただした。マーガレット「さて、先ほどの話の続きになります。カズヤ君の力についてです!正直まだ確信があるわけではないので推測にかすぎないのですが・・・」そういうとマーガレットは立ち上がり自分の机の引き出しから一冊の本を取り出すと、その本を2人の前に出した。キ

ム・エリズ「これは？」マーガレットの差し出した本にはこう書かれていた、「精霊術師」エリズ「シスター・マーガレット、これとカズヤが使ったとされる力が関係あるんですか？」マーガレット「はい、おそらくは・・・2人ともよく聞いてください。もしもカズヤが使ったとされる力がこの書籍に記されているものと同じものだとするならばカズヤ君の力はお伽話にでも出てくるようなレベルのものなんです」マーガレットのいつもと違う表情に2人は息を呑んだ。キム「・・・シスター・マーガレットあの力は一体・・・」マーガレット「おそらくですが、あれは精霊魔術と呼ばれるものだと思います。」エリズ「精霊魔術？、それはどんなものなんですか？」マーガレット「はい、ここからは私も書物を見て調べたものなのでどこまで信憑せいがあるかわかりませんが、まず精霊魔術とはこの本のタイトルにもなっている精霊術師達が使ったとされる戦闘技術です。太古の昔この世界には妖魔と呼ばれる闇の存在がいたとされています」キム「妖魔・・・」マーガレット「妖魔達は人間の負の感情や人間の女、子供を餌にしていたと記されています。そして、その妖魔達に対してゆいつ対抗できる力をもっていたのがこの精霊術師たお呼ばれる存在なんです！」2人ともマーガレットの話をまるでマンガやアニメの世界ののだと思いつながら聞いていた。マーガレット「まず精霊術師とは、この世界存在したとされる地水火風光の五つの精霊達の力を借りて戦っていた存在で、彼らは精霊達の力を借りる事によって自らの意思を現実にも顕現させる事ができる存在とされています。その中にはより強大な意志と精神力を持つ術者は物理現象を超えた事象を起こす事も可能と記されているのです・・・だからもしあの少年がカズヤ君で、あの力が精霊魔術だとすれば・・・もしかしたら4年前の事件とも関係があるのかも知れませんが・・・」キム「えっ・・・」マーガレット「あれほど不可解な事件だったんです、私達の知らない真実があるのかも知れません」エリズ「私達の知らない真実・・・」マーガレット「とにかく今は、あの少年が本当にアオイ・カズヤ君なのかを調べるの



動きだす闇の住人達（後書き）

うまく書けたかな

## 2人の女王の存在（前書き）

書いているうちにサブタイトルが変わる事があります。申し訳ない

## 2人の女王の存在

マーガレットの指示でシフォンとティシ を呼んだエリズは2人を連れながら校長室へと向かっていた。エリズ「……………」エリズは何も言わずただ2人の前を歩いていた、するとシフォンがエリズに話しかけてきた。シフォン「あのあ……………」エリズ先生、私達に聞きたい事があるってお話でしたが一体何の事なんですか？」エリズ「それは、校長室ではなす」エリズはそういと歩く速度を早めた。ティシ 「はあ……………」一体どうしたんでしょうか？エリズ先生、いつもと様子が違いますよね」シフォン「……………」ええ」シフォンもいつもは冷静沈着で滅多な事では感情を出さないエリズがこいかくこまで感情を見せるのに驚いていた。シフォン「とにかく、校長室につけば分かるみたいだから！今はとにかく向かきましょう」ティシ 「はい……………」そういうと2人も歩く速度を早めた。そして校長室につくと、エリズ「シフォン・フェアチャイルド、ティシ・フェニール両名を連れてきました」マーガレット「どうぞ」ドア越しからマーガレットの声が聞こえるとエリズがドアを開けるとそれに続くように2人も礼をしながら後に続いた。マーガレット「お忙しいのにお呼び立てして申し訳ありません」2人が入ってくるや否やマーガレットが2人に頭を下げた。マーガレット「さっそくですが、今日あなた方をお呼びしたのはカーニバルの時にいた少年についてです」シフォン「アオイ君の事ですね……………」やはりあの不思議な力について何ですね」シフォンもティシ も何となくこの事だろうと思っていたのでシフォン自身もやはりあの能力については気になっていたので素直に答えた。しかし、2人が考えていた事とは違う答えがマーガレットから返ってきた。マーガレット「ほ……………」本当に彼は自分の名前をアオイと名乗ったんですか……………」シフォン「えつ……………」はい、アオイ・カズヤ私達パンドラの英雄アオイ・カズ八さんの弟さんです」シフォンが答えるとキムが勢いよくシフォ

ンに寄つてきた。キム「本当だな、本当にアオイ・カズヤって名乗つたんだなー」余りのキムの感情の高ぶりに少し怯えながらも、シフォン「は・・・はいそう言っていました。今日は来られたのはお姉さんのお墓参りの為にこられたそうで・・・」キム「そうか・・・うつうつ・・・うつうつ本当によかった・・・」その瞬間キムの目から涙がこぼれた。テイシ「あ、あの・・・キム先生どうされたんですか？」あまりに突然の事にシフォンもテイシも困惑していた。エリズ「キム・・・よかったああ・・・」エリズも少し涙を流しながらキムに肩を置いていた。キム「ああ・・・エリズ、カズヤが生きていた」マーガレット「すぐに、居場所を調べましょう！おそらく近くの都市部にいる可能性が高いでしょうからね」キム・エリズ「はい！！！！」シフォン「あつ・・・あの・・・一体何のお話をされているんですか？」話についていけず説明を求めるようにシフォンが答えた。キム「あつ、ああ・・・うつすまない、2人を呼んだのはあの少年が本当にカズヤなのか確かめたかったんだ」テイシ「確かめたかった？どおいう事ですか？てつきり私も会長もカズヤさんが使ったあの不思議な力について聞かれるのかと・・・」マーガレット「もちろん、あの力についてもお聞きしたいと思つています！あの力がもし私が推測したものと同じなのか調べる必要もありますからね」シフォン「シスター・マーガレット！あの力についてご存じなのですか！！！」テイシ「えっ・・・」マーガレットの言葉に2人は飛びついた・・・しかしその瞬間、警戒警報の音がゼネティックスに鳴り響いた。そして校長室の電話に連絡が入る！マーガレット「もしもし、・・・何ですって・・・」  
・「マーガレットの顔が驚愕に染まった。

マーガレット達がカズヤの事で話していた少し前、管制室・・・オペレーターA「んっ？今のは？」オペレーターB「どうしたの？」隣にいたオペレーターが話しかけてきた。オペレーターA「いや、今変な反応があったような気があ・・・」オペレーターB「えっ・

・気のせいじゃない！こっちは何の反応もないわよ」オペレーターA「そう・・・一応調べてみましょう」オペレーターB「わかったわ、みんな今変な反応があったみたいなの！気のせいかもしれないけど一応それぞれ調べてみて」オペレーター達「了解！！！」

「オペレーターA「私達もやりましょう」オペレーターB「了解」

そういうと2人も作業を開始した。すると数分が過ぎた時突然1人のオペレーターが叫ぶ、他オペレーター「ゼネティックスの前方に奇妙な反応があります、それも一体ではありません10・・・25・・・反応がさらに多くなっています」オペレーターA「何ですって、ノヴァなのカー」他オペレーター「いいえー、ノヴァにしては小さすぎます。ですが大きさはかなりのものです」他オペレーター「その物体の反応の後方からノヴァ反応です、これはタイプSが2体そしてタイプRが4体です」オペレーターB「なんですって・・・、すぐにシスター・マーガレットに連絡を」他オペレーター「はい！！」オペレーターB「すぐに、その物体とノヴァの映像を出せ」他オペレーター「はい」そして映像が出された瞬間管制室全員が凍りついた。オペレーターA「何だ・・・これは・・・」

マーガレット「わかりました、すぐに向かいます」キム「シスター・マーガレットどうされたのですか？」マーガレット「ノヴァがこちらに向かっているそうです・・・」エイズ「何ですって！！！」

シフォン「ノヴァが！！！」ティシ「そんな、だって今ウエストには・・・」

マーガレット「ええ・・・特別選抜訓練で大半の4年生と3年生がいない為戦力はあまりないです、最悪1年生も出す事になるかもしれません」キム「それはどういう事ですか？こちらに向かっているのはノヴァだけではないという事です」するとマーガレットは電話を取ると管制室に掛け指示を出す「1年生を除く全パンドラとリミッタはボルトテクスチャーと防護服を着用し講堂に集合するように指示を出して下さい」オペレーターA「了解」

マーガレット「あなた方も準備を整え先講堂に向かって下さい」4人「

はい！！！！！」そういつとすぐに校長室を後にした。その後にもようにマーガレットも管制室に向かった。

鶴「ふふふ、もうすぐだあ・・・もうすぐ人間がくえるぞおおおお  
おおー！ー！ー！」鶴の咆哮に反応するように妖魔達も叫ぶ「妖魔  
達「ぎよあああああああああー！ー！ー！」「ぐうお  
おおおおおおおおおおお

その頃、管制室に着いたマーガレットは映し出されていた映像を見て自分が考えていた最悪の結果が写っていた事に冷や汗を流していた。マーガレット「妖魔・・・」オペレーターA「えっ・・・」するとマーガレットが指示を出す。マーガレット「この映像を講堂のデータに送信してください」オペレーターB「えっ、でも・・・」マーガレット「いいから！！！」オペレーターB「はっ・・・はい」そう指示するとマーガレットは管制室を足早に出ると講堂に向かった。

その頃講堂では集結した1年生を除くパンドラとリミッタ 達が何やら話していた。2年生パ「3年生や4年生の先輩達がないのに大丈夫なのかしら？」2年生パ「本当に・・・だって私達実戦経験がないのよ」リミッタ「俺、最近洗礼したばかりなんだよ」リミッタ「大丈夫かな」俺達「やはり実戦経験のないパンドラやリミッタ 達からは恐怖と緊張が走っていた。その中でも比較的冷静でいたのは実戦経験のある4年生とシフォン達3年生、そしてサテライザーくらいであった。シフォン「まずいですわね・・・」テイシ「はい・・・みんな主力の4年生達がいらないから士気が下がっています。これでもし、シスター・マーガレットが言っていたノヴァ以外のものを相手にすると・・・」テイシの言うとうりであった。もしこのまま戦闘になれば勝ち目はかなり薄い誰かが士気を上げなければ・・・ふとその時シフォンには1人の女性の顔

が浮かんだ自分達3年生の学年2位であり圧倒的なカリスマ性を持ちサテライザーと違う形で女王のような存在感を持つ1人の女性を・

・シフォン「こんな時、エリザベスがいたら・・・」テイシ

「会長・・・」もし彼女がいればわずかな言葉でこのどんよりした士気を上げてくれるだろう。彼女は持つているのだ生まれながら人を率いる才を・・・それのおかげで自分もテイシもかつて救われたのだからシフォンがそんな事を考えているといきなり講堂に声が響く。ガネツサ「一体いつまで待たせるのかしら、今の状況について何も知らせないなんて」アーサー「まあまあ、ガネツサ先輩落ち着いてください」ガネツサのリミッタであるアーサーがなだめるがガネツサはとまらない。ガネツサ「落ち着けですって、落ち着けるわけがありませんは！4年生と3年生の先輩方がほとんどいないこの状況で私達はノヴァ以外のものも相手にしないといけないのですよ」アーサー「えっ・・・」4年生パ達「何！！！！」3年生パ「ノヴァ以外のもの・・・」2年生パ「な、何よそれ・・・ほ、本当なのその話・・・」ガネツサ「間違えありませんは、ここに向かう途中にオペレーターお方々が話していたのを偶然耳にしましたから」リミッタ「まじかよ・・・」リミッタ「ノヴァ以外つて・・・」ガネツサの言葉に講堂にいる全てのパンドラとリミッタの動揺が走る。シフォン「まずいでは・・・何とかしないと」3年生だけではなく4年生のパンドラ達にも動揺が走っていた。シフォンがどうにかしようと考えているとまたもやガネツサの声が響いた！ガネツサ「何ですってー！、もう一度言ってみなさい」サテラ「何だ聞こえなかったのか？弱い奴はいてもしょうがないめざわりだと言ったんだ」シフォン「サテライザーさん」これ以上士気が下がるのはまずいそう思いながらもどうすればいいかわからなかった。そんな中でも2人の口論は続いた！ガネツサ「この学年2位の私が弱いですって・・・このおおおお」ガネツサがサテライザーに殴りかかるうとするのをアーサーが必死でなだめる。サテラ「事実を言って何が悪い、お前がいるだけで周りの士気が落ち戦闘に影響が

出てる。そんな奴がいてもしょうがないだろう」ガネツサ「ノヴァ以外の未知の存在と戦わなければならぬのよ！ましてや戦力も少ない誰でも恐れますわ・・・」サテラ「でえ、それがどうした・・・」ガネツサ「えっ・・・どうしたって・・・」サテラ「今お前が言った事が正論だったとしても私達は戦わなければならぬ。ノヴァ以外のものが相手だろうとここで戦わなければどの道そこに待っているの死だ」ガネツサ「うっうっ・・・」その場にいた全員がサテライザーの言葉に耳を傾けていた。サテラ「それに・・・ここで私達が逃げたらそれぞれが大切に思う存在が死ぬ・・・それを守る為に私達がいるんだ」その言葉に先ほどまで不安の顔を浮かべていたパンドラとリミッタ達から生気が戻り何かを思い出したかのように目に力が宿る。サテラ「それでもいいと言うならお前は部屋にでも隠れている」そう言うのとサテライザーはガネツサに背を向ける。ガネツサ「なめるんじやありませんはああー、この私が逃げる！上等ですはこの戦いで私の力をみせつけてやりますわ、サテライザー・L・ブリジット」そうして2人口論は終わった。しかし、サテライザーがもたらした効果は大きかった先ほどまでの空気がとは違い見違えるほどに士気が上がっていた。4年生パ「ほう、やるなあ」4年生パ「ええ、あれで2年」3年生パ「サテライザー・L・ブリジットかあ」3年生パ「あれが噂の接触禁止の女王か」先ほどのサテライザーの言葉には上級生達も感嘆の声を上げていた。シフォン「やりますわねサテライザーさん、ふふさすがウエストのもう一人の女王」テイシー「すごいですね、あの鋼のような意志！本当違う意味でエリザベスさんにそっくりですね」シフォンとテイシ「中でもサテライザーに対する評価は上がっていた。テイシ「もしサテライザーが同じ学年だったら凄い事になってましたね」シフォン「そっつそれは勘弁してほしいわね・・・はっはっ」すると講堂にキムとエリス、「そしてマーガレットが入ってきました。

## 風炎の契約者

先ほどのサテライザーとガネッサの騒ぎが落ち着きそれに合わせるかのようにキム、エリズ！そしてマーガレットが講堂に入ってきた。それには講堂全体から声上がる。四年生パ「どうしてシスター・マーガレットがここに……」四年生パ「それほどの事態という事なのか……」キム「全員よく聞いてほしい」キムの声が響いた。キム「今の状況を説明する、現在このウエストゼネティクスに2体のタイプSに4体のタイプRがこちらに向かっている……」3年生パ「タイプSが2体ですって……ノヴァが1度に複数出現だなんて……」リミッタ「大丈夫なのかよ……」全員からかつてない事態に次々と声上がる。しかし、キムの話はまだ続いた、キム「このようにノヴァが複数出現と言う事でさえ初めての前例だ、しかし……今回はさらに前例のない事が起きている」3年生パ「なあああああ……」3年生パ「ノヴァ以外の存在……」リミッタ「やっぱりさっきの話……」2年生パ「大丈夫なの……このままで……」2年生パ「勝てるの……」キム「その新しい前例についてはシスター・マーガレットより説明がある」キムがそういうとマーガレットが前に出てきた。マーガレット「みなさん、これから私が説明する事と、そして今から御覧頂く映像はとも信じられるものではないでしょう……私自身もまだうまく受け止められていません。ですが……これはまぎれもなく現実に起きています」そう告げるとマーガレットはリモコンを操作し映像を出した。そしてそこには先ほどマーガレットが管制室から見た映像が流された。キム「これは……な、何だ……」エリズ「う、うそでしょ……こんな事が……」今初めて映像を見たキムとエリズからも信じられないとでもいうような声が上がった。シフォン「なんですの……あの禍々しい物体は……」テイシ「あんなのが……現実に……」普段はそれほど感情が出

るほうではない2人も言葉が見つからなかった。ユジン「お姉ちゃん」アベル「テイシ先輩」2人のリミッタであるユジンとアベルが心配そうに声を掛ける。ガネツサ「な、何なんですか・・・あれは・・・」先ほどまであれだけ騒いでいたガネツサも言葉を失っていた。アーサ「ガネツサ先輩・・・」隣にいたアーサが手を握ってきた。サテラ「うう・・・」サテライザーもこの映像に写っている存在に恐怖を覚えた。今日は本当に色々な事があったあの少年の不思議な力、あれは本当にもう一度見てみたいと思ったし、暖かいと思った。だが、今映像で写っている存在からは画面越しからでもわかるくらいに気持ち悪さと恐怖があつた。昼間の事とはまるで逆の・・・

講堂全体がこの映像の光景に恐怖していた・・・すると突然マーガレットが映像を止めた。マーガレット「これが、先ほど確認された生命体です・・・この未知なる生命体がノヴァと一緒にこちらにむかっています・・・」講堂全体が息を呑んだ、ノヴァを相手にするだけでも困難なのに今からあんな禍々しい存在も相手にしなければならぬのだから。するとシフォンが手を上げてきた、シフォン「あのシスター・マーガレット・・・」マーガレット「何でしょうか？シフォン・フェアチャイルドさん」シフォン「先ほどの生命体の正体はわかっているのでしょうか？」シフォンの質問に講堂の全員がマーガレットに振り向く。マーガレット「はい・・・これもまだ憶測に過ぎないという確証があるわけではないので確実にはいえませんが・・・ですが、おそらくあの生命体の正体は妖魔と呼ばれる存在だと推測されます」シフォン「妖魔？」4年生パ「妖魔・・・それは一体・・・」リミッタ「そんな、マンガみたいな」3年生パ「そんな曖昧情報じゃ・・・戦えないわよ・・・」マーガレットの言葉に講堂から色々な声が飛んだ。キム「静かにしろーしろー」キムの怒声が響く、エリス「シスター・マーガレットが話されてるんだ最後まで聞け」キムの発言に全体が静まる。マーガレット「ありがとうキム先生、みなさんのお気持ちはわかり

ます。しかし今は私の話を聞いてください、妖魔とはかつて昔この世界に存在したとされる悪しき存在の事を現しています。彼らは人間の負の感情や人間の肉を餌としていたと記されています、しかしそんな妖魔達に対抗できる人達がいたのです」シフォン「妖魔に対抗できる人達？」テイシ「一体どんな人間が・・・」マーガレット「あなた方パンドラがノヴァに対抗できる存在であるように、妖魔に対抗できる存在として精霊術師と呼ばれる人達がいたのです。そしてその精霊術師達の力によって妖魔は封印されたといわれています・・・」4年生パ「それでは、あの妖魔と呼ばれるものが今いると言ふ事は・・・その封印が解けたということですか？」マーガレット「・・・そうなります・・・」4年生パ「何か対策はあるんでしょうか！」マーガレット「申し訳ありません、書物にはそれ以上の事は何も・・・」2年生パ「そ、そんな・・・」リミッタ「これじゃ、どうしようもないんじゃないか」マーガレット「あの妖魔達については本当に何もわかっていません・・・」応援でイーストゼネティックスに連絡しましたが今からではとても間に合いません。とても苦しい戦いになると思います・・・」するとサテライザーが声を上げた、サテラ「シスター・マーガレット・・・この戦いに勝機はあるのでしょうか・・・」マーガレット「正直見込みは少ないでしょう、いいえ限りなく0に近いでしょう・・・もしかしたら今日ウエストゼネティックスは無くなるかもしれない・・・」2年生パ「そんなー、無茶よ」4年生パ「今日が最後かあ・・・」4年生パ「これも人類の為か・・・」マーガレット「ト」ですが、もし少しでもあの妖魔に勝てる可能性があると言うのであれば、それはみなさんの生きようとする力と大切な存在を守ろうとする思いです。その思いが我々にとって最大の武器だと思えます・・・そしてある少年がこの異変に気付き駆けつけてくれる事を願うしかありません」マーガレットの言葉にキム、エリス、シフォン、テイシ、ガネツサ、そしてサテライザーはすぐに誰か感づいた。サテラ「あの子・・・あの子が来てくれれば・・・」そう考え

た瞬間何故か身体に力がみなぎる。キム「カズヤ・・・」エリズ「ええ・・・」マーガレット「みなさん、今はどうか力をかしてください。それではキム、エリズ両名を筆頭に4年生はすぐに出撃してください。」キム、エリズ「はい！！！！」キム「4年生半分は私に、残りエリズにそれぞれ配置に向かうぞ」4年生達「はい！！！！！！！！」「そういうとキム、エリズを筆頭に全員が後ににする。マーガレット「シフォンさん」シフォン「はい！！」マーガレット「2、3年生は学園の内部の警護をお願いします、指揮は任せる形になるかも知れませんがお願いします」シフォン「わかりました、みなさん行きますわよ」2、3年生「はい！！！！！！」テイシ「会長・・・カズヤさん来てくれますよね・・・」シフォン「・・・」シフォン「シフォンが渋っていると横から、サテラ「来る・・・」シフォン「えっ・・・」サテラ「あの子は来てくれる・・・」2人とも意外な人物からの言葉に驚いていたがシフォン「ええ、そうですよね、急ぎましょう」全員が居なくなった講堂でマーガレットは1人祈りをしていた、マーガレット「神よどうか、あの子達をお守りください」そう祈らずにはいられなかった・・・

カズヤ「妖気がつよくなってる、急がないと」「そっいいながらカズヤはアクセルをさらに早める・・・

キム「こちらA班、全員配置完了した」オペレーター「了解、シスター・マーガレットA班配置完了しました」マーガレット「わかりました、キム隊これより作戦を開始します。妖魔に関してはこちらは全く情報がありません、下手に攻撃を仕掛ければどのような結果を生むかわかりません。しかしノヴァは別です幸いな事なノヴァ達はタイプSが一体タイプRが二体ずつとそれぞれ表と裏から侵攻しています、まずはノヴァを倒す事を優先して下さい、そしてえ殲滅しだいですぐに学園内の警護に合流して下さい。」キム「了解」パンドラ達「了解！！！！！！！！」キム「全員ボルトウエポンを展開



との事です。「オペレーター」思ったより作戦はうまくいっていません、この調子ままなら・・・」何か期待を込めた目でマーガレットを見た。しかし、マーガレットの顔強張っていた！マーガレット「まだ、油断はできません・・・」

その頃、学園の中を警護している2、3年生は管制室からの報告に全員安堵の声を上げていた！2年生パ「さすがは4年生の先輩達だは！！！！」2年生パ「ホントに！！！！こんなにも早くタイプRを殲滅するなんて」リミッタ「しかもタイプRも今やコアも半壊しているんだ」リミッタ「この戦い勝つたも同然だぜー」あちこちから歓喜の声が上がった。しかし、そんな中でもシフォンを初めとする3年生とサテライザーの顔に歓喜の色は無かった、特に3年生は上位メンバーがシフォンとテイシ だけの上に実戦経験少ないその不安が3年生にはあつたからだ。シフォン「ノヴァはなんとか4年生の先輩方がなんとかしてくれる・・・しかし今だ妖魔達の襲撃がないのか気になる所ですね・・・」テイシ「はい・・・あの映像をみた限りではかなりの数がいたと思います。ですがあれから管制室からも妖魔に関する情報は入ってきてない・・・」シフォン「ええ・・・」2人にはそれが1番不安でしょうがなかった。テイシ「・・・カズヤさん・・・」テイシ のつぶやきに彼女のリミッタ であるアベルが興味を示した。アベル「あのテイシ 先輩1つ聞いてもよるしいですか？」テイシ 「何？アベル」アベル「今、先輩がいった名前の方がシスター・マーガレットがおっしゃられた僕達がこの戦いに勝つ可能性と言っていた少年なんですか？」テイシ 「えっ・・・」シフォン「あら・・・」隣にいたシフォンも驚いていた。ユジン「僕も聞きたいな、教えてよお姉ちゃん」シフォン「ユジンまで・・・」するとそこに、3年生パ「シフォン、それは私達も是非聞きたい」そこには3年生のパンドラ達が全員耳を傾けていた。3年生パ「教えてくれ・・・」すると意を決したようにシフォンは話し始めた。シフォン「アベルが言っていたように、先

ほどシスター・マーガレットがおっしゃられたもう1つの可能性、それがアオイ・カズヤ君なんです」3年生パ「アオイ・カズヤ・・・それってまさか・・・」テイシ「パンドラの英雄、アオイ・カズ八さんの弟さんです」テイシ「が付けたすように答えた。3年生パ「あの・・・アオイ・カズ八の・・・」3年生パ「アオイ・カズ八に弟が・・・」3年生パ「だか・・・どうしてそれが・・・」ユジン「だけとお姉ちゃん、アオイ・カズ八さんの弟だからってどうしてそれが勝てる可能性になるの？」シフォン「ユジン、ただ弟だけという理由で勝てる可能性だなんてシスター・マーガレットはおっしゃらないは・・・」ユジン「ならどうして？」テイシ「精霊術師・・・恐らくカズヤさんは、シスター・マーガレットがおっしゃられた妖魔と対抗できる存在精霊術師なんです。」3年生パ「何だと・・・そんな確証のない話でー」シフォン「いいえ、確証はあります！少なくともあの時あの場において、あの光景を見て人間にとつては十分すぎるくらいなんです、ねえテイシ」テイシ「はい！！」その時の光景を思い出したのかテイシの顔は眩しいくらいに微笑んでいた。今この状況には不釣り合いなくらい眩しかった、シフォン「とにかく、今は私達に出来る事をするしかありません。今ここを守るのは我々だけなのですから」3年生達「ああ！！！！」アベル「はい」ユジン「まかせて、お姉ちゃん」2人の話が一段落した時突如学園の防壁が破壊されるとタイプSが一体とその後方にノヴァほどではないが猿のような顔それにふつりあいな大きなトラの胴体そして尾からはいくつもの蛇が生えていた。そしてその隣には鷲を巨大化させた禍々しい緑色をした鳥の化け物がいた。そしてその後方にも奇妙な形をした妖魔達が数えきれないほどいた。

鳩「ふっはっはっー、鳩様こいつら全部喰っちゃってもいいですよねえええええええ」鵜「ああ、好きにするがいい、鳩よ」鳩「ひやははははは、喰う前にまずはいたぶって絶望の顔を拝みますかあああああああ」鳩の赤い瞳がシフォン達を捉える。その後ろに

いるノヴァを初め妖魔達も戦闘態勢に入っていた。シフォン「そんな……一体どうして……」テイシ「いつのまに……管制室からは何も……」3年生パ「あっああああああ、何だあれは……」恐怖で全員が震えていた。2年生パ「無理よ……タイプSもいるのに……」2年生パ「4年生はどうなっているのよおおおおー」……シフォン達がカズヤの話をしていた少し前……

キム「はあああああああ、とどめだあああああ」キムがタイプSに月狼を直撃させる。タイプS「フオオオオオオオー」……他パンドラ「よし!!!」他パンドラ「さすが、隊長」キム「ふうううううう、こちらキムノヴァの殲滅完了」オペレータ「すぐにB班への応援に向かってください」キム「了解、全員聞いたか！これよりB班に援護に向かう」パンドラ達「はい!!!!!!」……「そういうと全員いそいでB班へと向かう。キム「エリス無事であるよ!!!!!!」その頃、エリス達もキムの心配とは裏腹にタイプSのコアも露出させあと一撃で終わるであろうという状態にあった。エリス「よし、最後だ行くぞー」パンドラ達「はい!!!!!!」タイプS「フオオオオオー」最後の抵抗とばかりにノヴァが触手のようなものを伸ばし攻撃するが、エリス「無駄だ!!!!!!」エリス達はその攻撃をかわすとともに仕掛けようとした時エリス達を衝撃が襲いかかる。エリス「ぐあああああああ」他パンドラ「きゃあああー」他パンドラ「くっ……何が……」パンドラ達「隊長ー」パンドラとリミッタ達が駆け寄る。エリス「一体……何が……」キム「エリスー」そこに応援に駆け付けたキム達が合流した。エリス「キム……うっ……」キム「どうした……一体何が？」鶴「はっはっは、すまぬな人間よ、まだこいつにややつてもらわねければならない事があるんでな」その声に全員が振り向いた。キム「あれが……」エリス「妖魔……」パンドラ達「……うっうっうっ……」



呼びかけを続けて下さい」オペレーター「わかりました!!!」マーガレット「そして、2、3年生達には3年生の半分をタイプSへ残りの半分を妖魔にそして2年生は妖魔と対峙するときはなるべく2人がかりで戦うようにと」オペレーター「わかりました」マーガレット「くっ・・・」マーガレットはただ見ているしか出来ない自分が情けなかった

鳩「ほう〜、人間にしてはやるようだな」鳩「そうですね、昔は我々に対抗できたのは奴らだけだったはず・・・」鳩「時代も変わったという事だな、だがこのままやって夜が明けても面倒だ鳩よ少し手助けをしてやれ」鳩「はっ・・・待ちわびてました」サテラ「うおおおおお、でやああああー」妖魔「ぎやああああー」サテラ「くっ、はああああー、はあ、はいけるこいつらも倒せない事はない」シフォン「はあああああ、あ、妖魔「ぶぎやああああー」妖魔「しゃあー」シフォン「はっ!!!」テイシ「てやああああー、会長大丈夫ですか?」シフォン「ええ、ありがとう」テイシ「思ったよりもいけましたね・・・はあ、はあ」シフォン「ええ・・・はあ、はあ」3年生パ「ぬうおおおおー」3年生パ「なめるなああー、化け物がー」2年生パ「そっちにいったはー」2年生パ「了解!!!はあああー」全パンドラがおのれの全てを振り絞り戦っていた。シフォン「いけるかも・・・」テイシ「はい!!!」タイプS「フォオオオオー」シフォン・テイシ「はっ!!!」2人の後ろに突如タイプSが接近していた。2人が瞬時にその場を離れようとした時突如身体に異変が起こる、シフォン「な、何これは・・・くうううう」テイシ「身体が痺れてうごかない・・・」それは2人だけに起きていた事ではなかった。3年生パ「く、苦しいー」ぐはああああ「3年生パ「身体が・・・がはっああああ」2年生パ「身体に変な斑点がはあ、はあ・・・いやあああああー」



## 風炎の契約者（後書き）

すみません、とぎれとぎれでもちよっとで終わりますんで

明けない闇が明ける時(前書き)

体力がないな・・・

## 明けない闇が明ける時

突然現れた少年に全員が視線を向けていた・・・サテラ「あなたは・・・うつ・・・」シフォン「アオイ君・・・」ティシ「・・・カズヤさん・・・」その声に反応したのかカズヤは鵠と鳩に背を向けるとサテラ達に近付いてきた。カズヤ「遅れてしまつてすみません！すぐに治癒します。灯せ、生命の炎よ、てんせい天生火」その瞬間紅き炎が毒で犯されている全てのパンドラとリミッタを包み込む。キム「これは・・・一体・・・」エリズ「傷と一緒に毒の斑点が消えていく・・・しかも熱くない」2人とも初めて見る精霊魔術に目を丸くしていた。シフォン「なんて暖かい・・・力がみなぎってくる」ティシ「はい！！！すごい」サテラ「この感じ、あの時と一緒にだ・・・」サテライザー今朝の光景を思い出していた、そして自分の目の前でこの現象を起こしている少年を見つめていた。リミッタ「すげえー！ー、なんなんだよあいつ・・・」リミッタ「傷が一瞬にして消えてる・・・」アベル「この人が・・・」ユジン「アオイ・カズヤ・・・」パンドラ達「すごい・・・あの子・・・何者なの」この時その場にいた全パンドラがカズヤに心を奪われていた。カズヤ「よし、これでもう大丈夫です！すこしまだ痺れはあるかも知れませんが、すぐに動けるようになりますから」そういうとカズヤは全員に微笑みかけていた。その微笑みをキムとエリズは初めてカズヤに出会った時を思い出していた、キム「エリズ・・・間違えないな・・・うつ・・・あ・あれはカズヤだな」エリズ「ええ！！間違えないは、4年前と何も変わっていないのはあの笑顔」カズヤ「うつ！！！」カズヤが後ろを振り向く、鵠「貴様・・・精霊術師か・・・」鳩「ぐうつうつうつーあはあああ〜」先ほどの攻撃を受けた鵠と鳩がこちらを睨んでいた。カズヤ「シフォンさん、みなさんをここから非難させて下さい」シフォン「えっ」カズヤ「ここからは、僕がやります」シフォン「そんなー無茶です」ティシ「そうです、

危険すぎます！！！！」ガネツサ「そうですね、ちよつと変わった力が使えるくらいで1人で戦おうなんて・・・」カズヤ「大丈夫です！僕は負けませんよ」その言葉を聞いた瞬間何故かシフォン達は言葉が出なかつた、なぜか彼の言葉はなぜか安心させた。サテラ「なら、任せればいい・・・」ガネツサ「ちよつとあなたねー！」サテラ「ここに私達がいて何になる、この子の足手まといになるだけだ」シフォン「うっ・・・」テイシ「あっ・・・あっ・・・ガネツサ「くう・・・」3人の言葉におし黙ってしまった。カズヤ「それは違いますが、みなさんは足手まといなんかじゃないですよ。」サテラ「えっ・・・」意外な言葉に全員が振り向く。カズヤ「だって、みなさん僕が来るまで妖魔達と戦っていたじゃないですか・・・怖かつたかもしれない、逃げたしたかつたかもしれない！だけど、みなさんはこの後ろで生きている人々を守つたんです。その思いと心の強さはとても素晴らしいものです、僕は今日みなさんと一緒に戦える事を誇りに思います」カズヤの言葉に全員の心から熱いものがこみ上げて来ていた、中には感激のあまり泣き出す者までいた。キム「・・・カズヤ・・・」エリズ「いい男になつちやつて・・・」キムとエリズはカズヤの頼もしさに微笑んでいた。カズヤ「だけど、今は僕を信じて下さい！あなた方パンドラがノヴァと戦う存在なら、こいつらと戦うのは精霊術師である僕の役目です」シフォン「わかりました、全パンドラ・リミッタ　ここから離れるのです、出来るだけ戦闘の邪魔にならない所までー」パンドラ「了解！！！！」リミッタ「はい！！！！」シフォンの指示に2、3年生が一斉に移動する。キム「我々もだ、急いで移動しろ！！」4年生「了解！！！！」エリズ「キム、ちよつと・・・」キム「えっ、エリズ」エリズはいきなりキムの手を引っ張るとカズヤに向かって歩き出す。サテラ「ねえ・・・」カズヤ「えっ？」カズヤに背を向けながらサテライザーが話しかけてきた。サテラ「必ず勝つてね・・・絶対よー！」それだけ言うつとサテラもその場を後にする。シフォン「アオイ君」テイシ「カズヤさん」シフォン「勝つて下さい、そして無事

に戻って来てください」テイシ「信じていますから」その時キムとエリズが側に来ていた。キム「カズヤ・・・」エリズ「・・・カズヤ」カズヤが振り向いた時キムとエリズの目から涙あこぼれていた。そしてキムがカズヤ抱きしめた。キム「良かった・・・本当にいい・・・良かった」それに続くようにエリズはカズヤの顔に手を添えるとその目を見つめていた。シフォンとテイシは2人の行動に目をパチクリしていた。その時ユジン「お姉ちゃん・・・」アベル「テイシ先輩」シフォン「ええ、そうね！キム先生、エリズ先生」キム「あつ・・・」エリズ「キム、そろそろ私達も・・・」キム「ああ・・・カズヤお前に話したい事がたくさんある！だから必ず帰ってこい、いいな！！」カズヤ「はい」その力強い返事に笑顔で答えるとキム達もその場を離れる。カズヤ「待たせたな・・・来い」カズヤの言葉と同時に鶴と鳩が驚異的なスピードで迫る。それに対してカズヤは風の刃を放ちけんせいする、鶴「はあああああーあー」それに対して鳩は妖気を一点に集中させたてを造りそれを防ぐ、しかしその一瞬の隙を見逃さずカズヤが間合いを詰めると鶴の腹に気を圧縮した掌底を放つ、しかしその時後ろに回り込んでいた鳩の毒霧がカズヤに迫るしかしカズヤに焦りはなくすかさず紅い炎を放ち毒霧を消滅させる、しかしそれでも鳩の攻撃は止まなすすかさずカズヤの死角から鋭い爪で攻撃を仕掛ける。しかし、風の精霊と同調しているカズヤに死角は存在しないその攻撃を斜め横にかわすとすかさず鳩の羽を掴み柔道技のような投げで地面に叩きつける。鳩「ぐはあああー」そして距離をとると起き上がるうーとしている鳩に風の塊を叩きつける。カズヤ「うらあああーうー」そして再び鳩を地面にねじ伏せる、そして後ろから迫って来ている鳩の攻撃を交わすと足を払い炎を放つ、しかし鳩は再び妖気で攻撃を防ぐがカズヤの攻撃は止まなすすかさず蒼き風が襲いかかるカズヤ「風掌」蒼き風の濁流が放たれる。鳩「ぐあああああーあー」そして吹き飛ばされた鳩にカズヤはまるでそよ風のような動きで追撃する。そのカズヤの戦いぶりに管制室から見守っ

ているマーガレット達、そして離れた場所で見守っているサテライザー達パンドラとリミッタ は見惚れていた。サテラ「すごい・・・あの子あんなに強かったなんて・・・」ガネツサ「な、何なんですの一体、常識にもほどがありますわ」アーサー「すげー！ー！ー」ヒイラギ「あの子何なの・・・」アーサー「えっ！！」ってヒイラギなんでお前が居るんだよ！」ヒイラギ「先輩達が戻ってきたから戦いが終わったと思ったのよ。それより、あの子何なの・・・どうして1人で・・・」シフォン「私達が側にいたら邪魔になるからですわ」ヒイラギ「シフォン先輩達が邪魔・・・体どういう事？」テイシ 「そのままの意味ですよ。カズヤさん私達の誰よりも強いんです」テイシ が付け加えるように答えた。キム「今日この場にいられる事に感謝だな」ヒイラギ「キム先生！！！」エリズ「そうね、私とキムにとってはカズヤが生きていてくれた、それだけでも嬉しい事だけど・・・それ以上にカズヤと共に戦う事が出来た。それはとても素敵な事だわ」キム「ああ、その通りだ」キムとエリズの言葉に全てのパンドラは同意し同じ気持ちだった。キム「もしかしたら、特別選抜訓練に行ったパンドラ達は損したな、この力と戦いを見れないなんて」エリズ「ええ、特別選抜訓練では（閃光）の二つ名を持つ世界最強のパンドラ、イ・スナが訓練してくれると言っていたが、ふふふカズヤはそれ以上に強いようだしな」ヒイラギ「そんなに・・・」その言葉に納得できなかつたが、でも実際に目の前で行われている事を見れば納得するしかなかった。自分と同じくらいの男の子がたった1人であれほどの戦いをしているのだから・・・

鶴「はあ、はあ、馬鹿なああああー！ーいくら力が完全ではないとはいえ我々がたかが1人の精霊術師にここまで追い詰められるだとおおおおおお」鳩「鶴様、ここは一旦引きましょう」鶴「だあまれあえええええええ、このままおめおめと逃げるだ」と鳩を睨みつける。鳩「ですが、今のままでは力・・・」鶴「なら回復さ

せるまでだ・・・」鳩「何かあるのですか？」鵺「ああ・・・」  
お前だーーーー」その瞬間鵺は鳩の首を締めあげる。カズヤ「ん  
っ！！！！」サテラ「何を・・・」シフォン「まさか・・・」シ  
フォンの直感は的中した。鵺「お前の命でだああーーーー」鳩「  
鵺様あーーーー」鵺が口を開けると鳩の身体から黒い妖  
気がどんどんすい込まれていく。鳩「かつ・・・あつ・・・かか・・・」  
「みりみる内に鳩はやせ細っていく。キム「仲間を喰っているのか  
・・・」エリズ「吐き気がするわね・・・胸糞悪い」パンドラ達「  
うっうっうっう・・・おええ・・・」リミッタ 達「見てらんない  
よーーーー」そして鳩の命を吸収した鵺の身体に変化が起きていた、  
先ほどよりも2倍以上大きくなっていたのだサイズだけならタイプ  
Sとそんなしよくなかった。鵺「ぐをうっうっうっうっうっうっ  
ーーーー」鵺の咆哮こだます。鵺「さあ〜て、精霊術師よ  
最早貴様に勝ち目はないぞ、我の力は完全に元の状態に戻ったぞ。  
ハッハッハッーーーー」キム「アーサ もう駄目だ・・・お終  
いだ」ヒイラギ「あんなのに勝てるわけがない・・・」ガネツサ  
「イヤ、イヤですはーーーー」何人がが絶望のような声上がる。  
キム「落ち着け！まだ諦めるには早いぞ」アーサー「諦めるとか、  
そんな問題じゃないですよーーーー」ヒイラギ「そうですね、早く  
逃げないと」エリズ「いいから、落ち着けカズヤを見てみる」アー  
サー・ヒイラギ「えっ！！！！」エリズの言葉で2人が視線をカ  
ズヤに戻すと、そこには焦りや恐怖などとはまるで皆無のように笑  
みを浮かべながら立っているカズヤがいた。アーサー「笑ってる・・・」  
「ヒイラギ「それも、おかしくなったとか自暴自棄になった笑  
みじゃない」キム「ああ、勝つ自信があるんだよ」シフォン「信じ  
ましょう、アオイ君を」カズヤ「仲間の命を吸収して力を得るか・・・  
弱い奴がやりそうな事だな」鵺「何い〜、貴様余裕をこいてて  
いいのか！貴様の死は確定している」カズヤ「死ぬ???誰が??  
?」鵺「貴様に決まっている！そして貴様を殺したあとはその女ど  
もを全て喰ってくる、フッフ、ハッハッハッハーーーー」カズ

ヤ「残念だけど、それは無理だよ」鵜「何いーーーーー」カズヤ  
「今日、お前負けるんだから」笑みを浮かべながら答える。鵜「ほ  
ざけーーーーー」鵜の巨大な拳がカズヤに迫る、しかしそこに  
感触はなかった。鵜がすぐに振り向くといつの間にかパンドラ達の  
元にカズヤがいた。鵜「ちょこまかと、貴様さえ片付けさえすれば・  
・」カズヤ「それは、無理だよ！お前じゃ僕には勝てない」鵜「  
ほざけーーーーー」カズヤ「忘れたのか鵜よ、精霊術師の根源は思  
いの強さなんだ。ただ強いただけの者の精霊達は力をかさない」鵜「  
それが、どうした・」カズヤ「まだ、わからないのか・」  
今ここにはこれだけの心の強い人達がいるんだよ」サテラ「えつ・  
・」キム「カズヤ・」エリス「カズヤ・」カズヤ「今日お  
前は僕1人に負けるんじゃない、ここにいる全員の前に負けるんだ」  
そっぴいひはなつとカズヤは手のひらを空に向けると。カズヤ「精霊  
達よ、力をかしてくれ」その瞬間周りの雰囲気がいや世界の雰囲気  
が変わった。あまりの出来事に鵜を初めパンドラやリミッタも目  
を奪われていた。そこには、紅と蒼の光がカズヤを中心に集まり出  
していたのだ。ちょうどそこにマーガレット「はあ、はあ・」  
キム「シスター・マーガレット・」マーガレット「これが、  
精霊ですか！！なんて美しい」サテラ「すごい・」これをあ  
の子が起こしているの」シフォン「凄すぎますは」ティシ「本当・  
・」アーサー「行けー、カズヤー」なぜか呼びすてにアー  
サ「はなっていた。ヒイラギ「やっちゃえー」鵜「ぬううう  
うううー」カズヤ「終わりだ、魔覇・蒼刹炎業」集め  
られた風と炎の精霊が2匹の龍となり鵜に襲い掛かる。鵜「ぬああ  
ああー、馬鹿なー」この私がー」  
そして鵜の身体を消滅させる。そしてその時朝日が昇った。

こうして明けないと思われた闇があけた・

四年前の真実・スカウト（前書き）

感想ありがとうございます

## 四年前の真実・スカウト

キム「ようやく、あの戦いで壊れた場所もなおりそうだな」エリズ「そうね・・・あの夜が嘘だったみたいよ」キムとエリズは保健室でお茶を飲みながら話をしていた。エリズ「そういえば、シスター・マーガレットが今日辺りでもカズヤと連絡を取ってみると言っていたわね」キム「そうか・・・しかし、一週間かあ・・・」エリズ「長く感じたわね、でもようやくカズヤにカズ八ちゃんの事を伝えられる」

(一週間前のあの夜)

カズヤ「ふううー、終わった」キム「カズヤ！」エリズ「カズヤ・・・」2人の声にカズヤは振り向くと、カズヤ「もう、大丈夫です！！全て終わりました」キム「そうか」その瞬間パンドラ達「やったあああああー」リミッタ 達「よっしゃああー」歓喜の音が盛大に上がった。それは、当然の事なのかも知れない。この戦いは彼らにとって、とても苦しく長い戦いだっただから・・・カズヤ「良かった・・・」その光景を見ながらカズヤは微笑んでいた。するとそこに、マーガレット「アオイ君、あなた自身はお怪我はありませんか？」キム「シスター・マーガレット」カズヤ「はい・・・大丈夫です、あの・・・あなたは」エリズ「シスター・マーガレット、このウエストゼネティックスの校長だ」エリズがマーガレットの事を紹介した。マーガレット「初めまして、アオイ・カズヤ君。そして、何より助けていただきありがとうございます」そういうとマーガレットは頭を下げた。カズヤ「頭を上げて下さい、今回の戦いは僕1人では勝てなかった。ここにいなみなさんのおかげで勝てたんですから、むしろお礼をいうのは僕の方ですよ」マーガレット「はあ〜、そういつて頂けると幸いです」するとその時

空からヘリの音が聞こえた。マーガレット「イーストからの援軍です  
ね」キム「今さら来られてもな・・・」エリズ「コラコラ、そ  
う事言わないの」シフォン「そうですよ、キム先生」ちようどそこ  
にシフォンがティシを含めた2、3年生のパンドラと共にやって  
きた。マーガレット「とにかく、迎える準備をしましょう。事の詳  
細などは説明しないとなりますから、ヘリが降りられるように生  
徒達を移動させて下さい」キム「わかりました」カズヤ「それじゃ、  
僕も失礼しますね」マーガレット「えっ・・・」キム「なっ・・・」  
「エリズ「ちよっ・・・」シフォン「どうしてですか・・・」ティ  
シ「そうですよー、カズヤさん」ガネツサ「そうですわー！理  
由をおっしゃいなさい」その場にいた全員が納得のいく説明を求め  
た。カズヤ「あっ・・・はあはあ、今さらですがまだ精霊術の事は  
知らない方がいいと思うんです。みなさんはしょうがないにしても  
・・・今はまだこの力の事はみなさんの心に留めておいてほしいんで  
す」キム「カズヤ・・・」ティシ「カズヤさん・・・」マーガ  
レット「わかりました、精霊術の事はイーストの者達には話さない  
ように口止めしておきます」エリズ「シスター・マーガレット！！」  
カズヤ「ありがとうございます、それじゃ」カズヤがその場を後に  
しようとした時、マーガレット「あっ、アオイ君！あなたの連絡先  
を教えてください」カズヤ「えっ・・・」マーガレット「この状況  
が落ち着いたら、あなたとお話する時間をもおきたいんです。カズ  
ヤさんの事や4年前事を・・・駄目でしょうか・・・」カズ  
ヤ「わかりました・・・かまいませんよ」マーガレット「ありがとう  
ございます」マーガレットはほっとしたように顔をほころばせた。  
カズヤ「でも、連絡先かああ・・・まだ携帯持ってないしな」  
「マーガレット」でしたら、これを持って下さい」そういうとマ  
ーガレットは小型のメール機をだした。マーガレット「落ち着いた  
らメールで連絡しますので」カズヤ「わかりました、ありがとうございます  
ございます。それじゃ・・・」そういうとカズヤは今度こそ風を纏い  
姿を消した。

そして、今に至る……  
キム「しかし、本当にこの4年の間に何があったんだろうな……あれほどの力をどうやって……」エリズ「それは、会った時に聞きましょう、それが姉代わりのつもりの私達に出来る事なんだから。」キム「そうだな……あつそろそろ時間だな！教室に戻るよ授業の準備しないと」そういうとキムはお茶を飲みほすと保健室を後にした。

場所は変わり校長室、マーガレットは自分の机の上で1週間前の戦いの映像を見ていた。マーガレット「妖魔……ノヴァ以上に驚異となる存在……いつまでも隠しとせざるわけがない……」マーガレットはその事に頭を悩ませていた。するとそこに、ピロン！マーガレットのメール機が鳴った、マーガレットは急いで内容を確認すると。カズヤ「今日の昼頃に伺います！アオイ・カズヤ」と書かれていた。すぐにマーガレットも了承の返信をした。マーガレット「ふう〜、これから色々大変ですが！何故でしょうお話するのが楽しみです。アオイ・カズヤ君……あつ、2人にも伝えなければ」

そして場所は変わり3年生の教室の廊下、そこに1人の学生がいた！エリザベス「やはり、何か変わっているは……」彼女の名はエリザベス・メイブリ 3年生のパンドラの学年第2位の実力者であり、その圧倒的なカリスマ性で多くの3年生から尊敬をあつめ、その存在はシフォン同様に他のゼネティクスにも名をとどろかせている。そんな彼女には気になっている事があつた、3日前に特別選抜訓練から戻った時から感じていた事だつた。エリザベス「明らかに、私達意外に残った3年生の雰囲気が変わっている……」エリザベスはそう感じてならなかった。するとそこに、アーネット「エリザベス……」やっと思つた早く食堂に行きましょうよ「エリ

ザベス「アーネット……」アーネット「どうしたのよ？難しい顔しちやつて？」エリザベス「アーネット何か気付きませんか？」アーネット「えっ？何が」エリザベス「今の学園の雰囲気です、特別訓練で留守にしていた私達意外のバンドラ達の雰囲気が変わっているんです」アーネット「そう……私は別に感じないけど??？」エリザベス「そうですか、アーネット！シフォンを見かけましたか？」アーネット「えっ……あー確かさつき校庭の所にテイシ・フェニルと居たわよ」エリザベス「そうですか」それを聞くとエリザベスは校庭に向かう、後ろからアーネットの声が聞こえるが今のエリザベスには今自分だけが感じている真実が知りたかった。エリザベス「彼女なら……」そう思いながらエリザベスは急いだ。

テイシ「会長、ここもすっかり修復されましたね」シフォン「ふふ、そうね……あの時はもう全て無くなるかと思っただけど」シフォンとテイシは校庭を歩きながら修復された場所を見ていた。テイシ「あれから一週間、カズヤさんどうされてますかね？」シフォン「……わからないわ、けど……大丈夫よアオイ君なら、ねっ！」笑顔で答えた。テイシ「そうですね！」シフォン「そろそろ戻りましょう」そういって2人が後ろを振り向くとそこに、エリザベス「ようやく、見つけましたわ」シフォン「エリザベス……」テイシ「エリザベスさん……」意外な人物の現れたので2人は驚いていた。しかし、とうのエリザベスは2人のそんな心境などを無視して話しかける。エリザベス「テイシ・フェニルも一緒というのがあります。実はあなた方にお聞きしたい事があります」シフォン「私達に？」テイシ「……」2人は顔を見合わせた。エリザベス「この1週間の間にこのウエストで何があつたんですか？それを教えていただきたいのです。」シフォン「何があつたつて、シスター・マーガレットより説明をうけていませんか？突如複数のノヴァが出現したんです。」シフォンはマーガレットの指示であるカズヤの事については伏せて説明した、あの日の真実を知っている

のはあの場にいた者だけで、特別選抜訓練でいなかった者達にも話されていけないのだ。しかし、2人はここで改めてエリザベスの凄さを思い知る。エリザベス「その事については説明を受けています。突如現れた複数のノヴァにあなた方はわずかな戦力でそれを殲滅した、それはとても凄い事だと思います。」シフォン「なら、それが真実ですわ」テイシ「はい」エリザベス「本当にそうですか、本当にそれだけですか・・・」シフォン「どういう意味ですか？」エリザベス「訓練から戻ってから私はずっと違和感を感じていました。明らかに訓練でウエストを離れていた私達意外の学生の雰囲気や顔つきが変わっています、それも3年生だけじゃない、2年生や4年生まで・・・まるで何か特別なもの見たかのように、そして何かに気づいたように・・・あの雰囲気は戦いで変わったものではありません。もつと何か特別な体験をしんじゃないですか！あなた方は2人はエリザベスの言葉に黙るしかなかった。エリザベス「教えて下さい、一体何が・・・」シフォン「確かに、あなたの言う通り私達はノヴァ以上のものを体験しました。」テイシ「会長ー」テイシ「が止めようとするのをせいしシフォンは続けた。シフォン「ですが、教える事はできません」エリザベス「それはなぜ・・・」シフォン「シスター・マーガレットからまだ心に留めておいて欲しいと、時が来れば他の者にも伝えると」シフォンはエリザベスの目を見つめ答えた。エリザベス「・・・」シフォン「・・・」

・「重い空気が流れる・・・エリザベス「わかりました、ならば詮索はしません」テイシ「ほくく」シフォン「ありがとう・・・」

エリザベス「楽しみにしています」そういうとエリザベスは校内に戻って行った。シフォン「とりあえず、助かりましたわねくくく」

テイシ「本当ですよ、エリザベスさん鋭すぎです」シフォン「本当に・・・」

「ただ頼もしいわ」2人がエリザベスを見送っている

校門の入り口に1台のバイクが止まった。2人は振り向くとそこには・・・カズヤ「ちょっと、早かったかな？」シフォン「アオイ君ー」

「テイシ「カズヤさん」カズヤ「えっ！あっどうも」カズ

ヤは2人に気付くと頭を下げた。2人は急いで校門に走る。シフォン「どどど、どうしたですか？いきなり」カズヤ「いえ、マーガレットさんとお話する事になってるんです」ティシ「そうですねですか、あつすぐに開けますね」シフォンがすぐにカメラに合図すると門が開いた。シフォン「校長室へはご案内しますね」ティシ「はい！！！」カズヤ「はい、お願いします」そうして3人は校内に入つて行つた……

キム「それでは、今日の訓練はここまでだ」2年生パ「ありがとうございました」キム「ふう〜〜〜〜」そとでの格闘訓練が終わり、校内に戻ろうと何気なく窓を見てみるとそこには……キム「カズヤ、もう来ていたのか」キムはすぐにカズヤのいる階に向かった。その頃、シフォン「しかし、いきなり来られたので驚きましたわ」カズヤ「すいません、でもマーガレットさんから連絡がありましたんで今日時間があつたんで伺いますと連絡したんです」ティシ「そうなんですか」3人が話していると後ろから、キム「カズヤー！ー！ー」と声が聞こえた。カズヤ「えっ」振り向くとジャージ姿のキムが走つて来ていた。シフォン・ティシ「キム先生！！」キム「はあ、はあ、はあ……ふう〜〜カズヤもう来ていたのか。シスター・マーガレットから聞いた時間にはまだ早いが」カズヤ「すいません、時間に合わせて来ようと思つたんですが、思つたより早くついちゃつて」キム「そうか、でも良かった特にどこか怪我したりはしてないか？食事とかは大丈夫かあ」カズヤ「はい、大丈夫ですよ！身体も食事も」キム「そうか、良かった！今から校長室に行くのか」カズヤ「はい、今お2人に案内して頂いてたんです」キム「そうか、私も着替えたらずにエリズと向かうからな。2人ともよろしくな」シフォン・ティシ「はい」それだけというとキムは着替える為その場を後にした。そして、3人は再び話しながら歩き出した、そして校長室の前に着いた。コンコン、シフォン「シフォン・フェアチャイルドです」マーガレット「どうぞ」シフォン「失礼し

ます」先にシフォンが入りそれに続くようにティシ、カズヤが続いた。マーガレット「アオイ君・・・」まさかのカズヤの登場にマーガレットは驚いていた。カズヤ「すいません、思ったより早く着いてしまって」カズヤは申し訳なさそうに答えた。マーガレット「構いません、本日は来ていただきありがとうございます。2人も御手間をかけましたね」シフォン「いいえ、それでは私達はこれで」そういうと2人は再度マーガレットに挨拶をすると部屋を後にした。マーガレット「さあ、とりあえず座って下さい。今紅茶をいれますから」カズヤ「はい」カズヤはソファに腰かけた。そして、校長室を見渡し膨大な量の本に目を奪われていた。マーガレット「本に興味があるんですか？」カズヤ「えっあつイヤ、すごい量だなあ〜って思ってます。」マーガレット「ふふ、今キム、エリズ両名にも連絡をいれましたからもうすぐ来るでしょう」そうカズヤに伝えるとマーガレットはいれた紅茶を差し出した。カズヤ「ありがとうございます、いい香りですね。」マーガレット「ええ、この日の為に用意していた物ですから」カズヤ「あの、1つ聞いていいですか？」マーガレット「何でしょう？」カズヤ「マーガレット校長は精霊術について知っていたようですが、どうして僕が精霊術師ってわかったんですか？」マーガレット「ああ、それはこの本です」そういうとマーガレットは机においていた本を差し出した「カズヤ「精霊術師？」マーガレット「たまたま、見つけて読んで本だったんですが、妙に印象に残っていたんです、初めてカズヤ君の映像を見た時もしかしてと思っただんです」カズヤ「こんな物が・・・」マーガレット「今日は出来る限りで構いませんので色々教えていただけたらと思います」カズヤ「はい・・・」するとドアが叩かれた。マーガレット「どうぞ」キム「失礼します」するとキムとエリズが入ってきた。そして、2人の視線はカズヤに向けられていた。カズヤ「こんな言い方変かも知れませんが、お久しぶりです。キムさん、エリズさん」カズヤは笑顔で2人に答えた。マーガレット「さあ、立ち話もなんですからお2人も座って下さい」キム・エリズ「はい」そうして2

人もソファアに腰かけた。マーガレット「お2人も紅茶入れてきますね」エリス「すいません」そして、3人だけになると変な沈黙が流れたキムもエリスも話すきっかけが思いつかなかつたのだ。すると、カズヤから話しかけてきた。カズヤ「お2人とも、お元気そうで本当に良かったです」キム「そ、それをいうならお前もだ．．．よく生きていたな」エリス「本当．．．今でも夢かと思うくらいよ」2人は嬉しいと悲しいともとれる表情をした。カズヤ「すいません．．．」キム「イヤ、いいんだ！こうして生きていてくれたんだから」マーガレット「お待たせしました」キム「あつ、すみません」エリス「どうも」マーガレット「さて、お聞きしたい事、話したい事正直たくさんあります．．．ですがまず私達が知りたいのはアオイ君どうしてあなたが生きていたのか、4年前に一体何があったのか教えていただけませんか．．．」キム「あつ．．．」エリス「カズヤ．．．」カズヤ「はい．．．あれは．．．（4年前）

カズヤ「　　」　　．．あつ、また失敗しちゃったな　　、なかなかうまくいかないや！早く上手くなってカズ八姉さんに聞かせてあげたいな」そろそろ帰ろうとカズヤが立ち上がるとその時どこからか声が聞こえた。カズヤ「えっ！！」カズヤがその声に意識を向けた瞬間、そこには不思議な光景が広がっていた！周り全体が紅と蒼の光に包まれていたのだ、そしてその光達から声が聞こえた。

（校長室）

カズヤ「それが、僕が初めて精霊達に会った時でした。精霊達が僕のおカリナの音を気に入ってくれたのかはわかりませんが、その日から周りの人達には内緒でオカリナの練習をする時だけは精霊達を呼んでいたんです」マーガレット「そうですか、その事がきっかけで精霊術に目覚めたんですね」カズヤ「はい．．ですが、当時の僕はそんな事は全く知りませんでしたから。まるで遊ぶように精霊達

を呼んで話したりしていたんです。けど……それがあの4年前の惨劇を生み出してしまったんです……」キム「それは、どういう事だ……」カズヤ「妖魔達が現れたんです……」

(4年前)

牛鬼ぎゅうき「どこだ小僧……どこにいるう……」  
「逃げてもむだだああああ……出てこい」妖魔達「ぎやああああ……カズヤ……ひやああああああ」カズヤ「助けて……カズ八姉さん……」  
「ここに、いたか」カズヤ「うわああああ……カズヤは逃げようとするが目の前に牛鬼が立ちふさがった。カズヤ「あつああああ……ああああ……恐怖で身体がうごかなかった。カズヤ「……けて……れか……助けて……」  
震える声でつぶやくしか出来なかった。牛鬼「終わりだ……」  
鵬「喰つてくれるは……」妖魔達「ひやあつああああ……カズヤ「助けてええええええええ……その瞬間カズヤから紅と蒼の強烈な光が発せられた、牛鬼「な、なんなのでああああ……ぎやああああああ……」  
鵬「うお……ひやつああああ……」  
妖魔達「びゅやあうあかああああ……」  
「……その瞬間妖魔達全てが消滅した。」

(校長室)

カズヤ「そして、しばらくして目を覚ました時には……そこにはいくつものクレーターと瓦礫の山に燃えさかる炎がひろがっている、そこはもう町ではなく荒野でした……あの惨状を造ったのは僕なんです……僕が力を暴走させてしまったからなんです……」  
沈黙が流れた、3人もあまりに辛い真実に言葉が出なかった。意を決したようにマーガレットが口を開いた、マーガレット「……その後はどうされたんですか……」カズヤ「とにかく、いそいで町を離れました……ここにいたらまた妖魔達が襲って

くるかも知れない、そしたら関係ない人達が……カズ八姉さんが襲われるかも知れない……。それが何より怖かったです」キム「カズヤ……」エリズ「……うっ……」マーガレット「アオイ君……」カズヤ「そして、町を離れて1週間くらいした時拾った新聞で自分が死亡したと書かれていた記事を見たんです……」キム「どうして、生きていると連絡しなかったんだ……」カズヤ「これが1番いい事だと思っただんです……」エリズ「いい事だと……」キム「ど、どおいう意味だ、答えるカズヤ……」キムの声が荒くなる。カズヤ「それが、カズ八姉さんの幸せの為だと思っただんです、僕が死んだ事にすればカズ八姉さんは妖魔に襲われる事もなく、1人の女性として素敵な男性を見つけて幸せになれる……そう思っただんです……」その瞬間校長室に乾いた音が響いた。カズヤが頬を叩かれたのだ、そしてたたいたのは……キム「はあ、はあ、はあ……ふざけるなあ……カズヤそんなふざけた理由があるか……」カズ八の幸せの為だと……カズ八にとってお前がどれほど大切な存在だったか……わかっていのかああ……。キムわ目に涙をためながら答えた。エリズ「キム……」エリズも同じ気持ちだった、エリズもキムと共にカズヤを失い泣き続けていたカズ八を見たのだから、だからこそカズヤの判断が許せなかった。自分が壊れてしまうほどにカズ八はカズヤを愛していたのだから……。そしてカズヤがつぶやいた。カズヤ「……すいません……」その言葉にキムは再び激高しそうになったのをマーガレットの声が妨げた。マーガレット「おやめなさい!!!、キム・ユミ」あまりにも大きな言葉にキムの動きが止まる、だが気持ちまでは静止できなかった。キム「で、ですがシスター・マーガレット」マーガレット「まだ10歳だったんです……」アオイ君は……」キム「えっ」エリズ「はっ……」マーガレットのその言葉で2人はどういう意味か理解できた、そうなのだ4年前はカズヤはまだ10歳だったのだ、1週間前の出来事のせいで忘れていたが4年前はカズヤは10歳で1人で生きていくる状態

ではなかったのだ、大人が守ってあげなければ生きていけなかったのだ、そんな子供が先ほどの決断をするのにどれだけの覚悟が必要だっただろう、どれだけ、苦しかっただろう、カズヤも同じように苦しんだのだ……キム「カズヤ……うっうう……すまない……すまない……」キムは涙を流しカズヤに謝罪する。カズヤ「いいえ、こうやって怒ってくれる人がいる！それだけで僕は幸せ者です」エリズ「ありがとう……カズヤ」キム「カズヤ……うっううう」マーガレット「それでは、落ち着いた所で話を戻しましょう……それでアオイ君その後はどうされたんですか？」カズヤ「とにかく、逃げ続けました……だけどさすがにろくに食事もとれず睡眠もとれてないと身体がどうしても限界だった時があったんです、そしてもう駄目だって思った時兄さんに出会ったんです！……！」キム「兄さんって……」エリズ「兄がいたのか??？」カズヤ「血は繋がっていません……でも本当の兄弟以上に強い絆で結ばれています。そして僕の目標です。聖也兄さんっていうんですけど、聖也兄さんも精霊術師だったんです……それも僕なんかとは比べ物にならないくらいに強い術者でした。マーガレット「アオイ君以外にも、居たのですか」カズヤ「はい、聖也兄さんは逃げ続けて身なりもボロボロで汚い格好していた僕を抱きしめてくれたんです、よく頑張ったなって……あの時は本当に嬉しかったです」3人はカズヤの話を聞きながらその聖也にカズヤを助けてくれた事に深く感謝した。そして、それから聖也兄さんと一緒に旅をしながら武器の使い方や格闘術や精霊術の使い方を教わったんです。後は勉強や色々な事を教えてくれました」キム「へえ……」エリズ「その、聖也さんは今も一緒なの？」カズヤ「いいえ、ちょっと別の所にいます！しばらく会えないけど、大丈夫です必ず帰って来ますから」エリズ「そうか」カズヤ「それで、聖也兄さんがくしばらく会えないけどお前はお前なりに好きな事しろって、学校に行ったりして友達と遊んだり、彼女つくったり、カズ八姉さんにも会って来いって、戦いだけが全てじゃないぞって」マーガレット「ユニー

クな方ですね」カズヤ「ふふ、そうですね！本当にそう思います」  
4人「ハッハッハッハッハッハッ」カズヤ「それで、学校は来年行こうと考えています。今からじゃどこも受けられないですから」  
キム「そうか、もう時期も時期だからな」エリズ「そうね」マーガレット「・・・」エリズ「シスター・マーガレットどうされましたか？」マーガレットの様子に気付いたエリズが話しかける。マーガレット「・・・アオイ君、ゼネティックスに入りませんか」カズヤ「えっ！！」キム「なっああ・・・」エリズ「シスター・マーガレット」突然の言葉に3人は驚愕した。しかし。マーガレットは言葉を続けた。マーガレット「どうか、あなたの力をかして下さい」  
マーガレットは真っ直ぐにカズヤを見つめ答えた「・・・」

## パンドラモード

4人が校長室で話しをしている頃、校庭の中央にあるオブジェの前にサテライザーが1人立っていた。サテライザーは空を見上げながら1週間前の戦いを思い出していた。サテラ「・・・本当に夢のようだった・・・アオイ・カズヤかあ・・・」サテライザーはふとあの場に現れた少年の名前を口ずさんだ、あの後あの子はすぐどこかへ行ってしまった。サテラ「・・・もう少し・・・話してみたかったな・・・」この1週間ずっと後悔で頭がいつぱいだった。サテライザーがそんな事を考えていると不意に後ろから呼びかけられた。ガネツサ「ここにいましたか！サテライザー・L・ブリジツト」サテライザーが振り向くと、そこには束縛の天使ことガネツサ・ローランドが不敵な笑みを浮かべ立っていた。

・・・その頃校長室では突然のマーガレットの誘いにカズヤはどう返していいかわからず戸惑っていた。カズヤ「あつ・・・うん・・・」どう返したらいいのかわからずカズヤは助けを求めるようにキムとエリスの方を振り向いた。キム「あつ・・・」エリス「はっはっ・・・」2人もマーガレットの言葉にどうすればいいか戸惑っていた。その空気を察したのかマーガレットが口を開いた。マーガレット「突然このような申し出を言っただけありません」カズヤ「あつ・・・いいえ」マーガレット「ですが、無礼を承知でお願いします！どうか、ゼネティックスに入学していただけないでしょうか・・・」キム「シスター・マーガレット・・・しかし、それは・・・」キムが何かを言おうとするのをマーガレットが静止した。マーガレット「わかっていません、私が今やっている事はただアオイ君の力を利用してしようとしているように見えると言う事に・・・」エリス「・・・うっ・・・」マーガレット「ですが、アオイ・カズヤさんどうか私達とともに戦っていただけではないでしょうか・・・」

「カズヤ」・・・「カズヤは何もはっしなかつた。しかしそれでも、マーガレットは今の自分の本当の気持ちを伝えた。マーガレット「我々人類がノヴァと戦い続けてもう1世紀になります・・・今でこそパンドラという存在が生まれた為に多少なりのも人類は対抗するを得ました。ですが・・・その間にも多くのパンドラ、リミッタ という若い命が失われているというのが現状なんです。アオイ・カズハさんもその1人です・・・」キム「うっ・・・」エリズ「・・・くっ・・・」カズヤはマーガレットの話を静かに聞いていた。マーガレット「・・・まだノヴァに関しては謎は多く、今後も我々の想像にも及ばない能力を使ってくる可能性もあります・・・我々にとってノヴァを相手にするそれだけでも厳しいのが現状なんです・・・なのに今度は妖魔というノヴァよりもさらに脅威となる存在まで出現した・・・今は何とか隠しとさせていますがいずれは妖魔の事も世界中が知る事になるでしょう。だから・・・どうかお願いします、どうか力をかして頂けませんか」マーガレットは再び頭を下げた。そのマーガレットの行動にキムとエリズもカズヤを向き頭を下げた。キム「カズヤ、私達からも頼む。どうか力をかしてくれないか・・・」エリズ「この通りだ・・・もしも、お前に危険が迫った時は私とキムが守るから・・・」3人は必死に頭を下げた。カズヤ「頭を上げて下さい・・・」マーガレット「あっ・・・はい・・・」キム「うっうっ・・・」エリズ「・・・くっ・・・」3人ともカズヤの様子を伺うように頭を上げた。カズヤ「みなさんのお気持ちはよくわかりました。マーガレットさんも本当の気持ちを答えてくれて嬉しかったです・・・だけど、少し考える時間を下さい。」キム「カズヤ・・・でも・・・」キムが何か言おうとしたがそれをマーガレットの言葉が妨げた。マーガレット「わかりました・・・もし答えが出たら連絡を下さい。待つていますから」カズヤ「はい・・・」マーガレット「お見苦しい所をお見せしてしまって申し訳ありません」するとまるでタイミングを合わせたかのように夕方を知らせる音なる。カズヤ「ああ、もう

こんなに時間立つてたんですね。じゃあ、そろそろ……」カズヤが立ち上がると不意にお腹の音が鳴った。キム「えっ？」エリス「ほへ？」マーガレット「あら」カズヤ「そういえば、今日は朝から何も食べて無かったですね。ハハハ」3人「ぷっ、ハハハツハハツハツ」さっきまでの重い空気が嘘のように吹き飛んだ。エリス「全く、せつかくの空気が台無しだよ」キム「ホントー」マーガレット「ホホホ、アオイ君せつかくですからゼネティクスで食事をされていかれませんか」カズヤ「えっ、でも……他の方に悪いですよ」エリス「大丈夫よ、カズヤは私達の大事なお客さんなんだから」キム「そうだ、それにお前なら誰も文句は言わないさ、なあ、もう少しだけゆっくりしていけ」マーガレットも微笑みながら頷く。カズヤ「じゃあ、お言葉に甘えて」キム「よし!!」マーガレット「それじゃ、行きましようか」キム「はい」エリス「はい」そういうと全員立ち上がり校長室を出た。4人が食堂に向かい歩いているとカズヤが不意に窓の外に意識を向ける。カズヤ「んっ……」キム「どうしたんだ、カズヤ？」突然外を見て立ち止まったカズヤにキムが話しかけた。カズヤ「いや、今風の精霊が外が騒がしい事になってる」キム「なっ……まさか妖魔か!!」エリス「なっ……」

「マーガレット」本当ですか……」3人に緊張が走る、カズヤ「あっ、いいえ妖魔ではないです。けどこの近くで何か戦闘が行われているみたいなんです」キム「この近くで？」エリス「また、パンドラ同士の戦闘じゃない」キム「ああ、なるほどね」2人はうんざりしたように答えた。マーガレット「ですが、一応校則で禁じられている行為ですから止めなければなりません。アオイ君どこで行われているかわかりますか？」カズヤ「はい、ええつと……あの辺りですね」カズヤが場所を示そうと窓を開けようとした時に凄まじい衝撃破は襲い掛かってきた。カズヤ「くっくっ……」マーガレット「うっ……」キム「この衝撃は……」エリス「まさか、パンドラモードを発動させたのか。たくっ、校内でパンドラモードを使うとは……」カズヤ「パンドラモード」マーガレット「キム

先生、エリス先生すぐに戦闘場所に向かつて下さい。すぐに辞めさせるのです」キム・エリス「はい！！」カズヤ「なら、お連れしますよ」キム・エリス「えっ」2人が振り向くとカズヤはすでに窓の外で浮いていたのだ。ここは3階である普通はあり得ない事だ。するとカズヤが2人に手を向けと穏やかな風が3人を包み込むと身体が浮いた。キム「すごいなあ・・・これが精霊術」エリス「まさか、空を飛べる日が来るとはね・・・」マーガレット「長生きはしてみるもんですね」カズヤ「それじゃ、行きます」

その頃、校庭ではガネツサがサテライザーを挑発するように話しかけていた。ガネツサ「あーら、これは学年2位さんこんな所にいたんですの」サテラ「学年2位・・・」ガネツサ「あら、知りませんの！あなた前のカーニバルで私に負けたではありませんか、オツホホホホ」そうなのだ、カーニバルは実戦を想定した訓練である、その為罫でありだまし討ちと言うものは認められているのだ。実戦において油断はそのまま死を意味するのだ。つまり今回のカーニバルではカズヤの乱入という形ではあるが攻撃を受けたサテライザーが悪いという判断になるのだ。ガネツサ「残念ですわね、無敗記録がとうとう破れて・・・ですが恥じる事はありません、なんせこの私が相手だったのですから。オツホホホホホ」なおもサテライザーを挑発するガネツサであったが、一方のサテライザーはまるで興味がないように無表情でガネツサを見つめていたが、不意に後ろを向きその場を後にしようとする。ガネツサ「あら、逃げるんですの！負け犬」その言葉にサテライザーの歩み止まり振り向きながらガネツサを睨みつける。だが、ガネツサは臆する事なく挑発を続ける。ガネツサ「負け犬に負け犬と言って何が悪いんですの、あなたは負けたのですから次のカーニバルまで待っている事ね」生徒達「何だ、何だ！！！！」男子生徒A「おい、あれ接触禁止の女王だぜ」男子生徒B「まじかよ、相手誰だよ？」女子生徒C「2年のガネツサ先輩よ、確か先週のカーニバルで接触禁止の女王を破ったっ

て「女子生徒D「うそ、ホント！！でも・・・噂じゃカーニバル中にアクシデントがあったって話よ」女子生徒E「じゃあ、そのおかげでって事勝てたのは」騒ぎを駆け付けた野次馬だ周りはいっぱいになっていた。ガネツサ「どうやら、もう一度私の实力を見せた方がよろしいようですわね！ポルトウエポン展開」ガネツサが束縛の鎖を装着する。ガネツサ「もう一度あなたに敗北を味あわせてあげますわー」そして、一方のサテライザーも自身のポルトウエポンを展開する。ちょうどそこに騒ぎを聞きつけたシフォンとティシが到着した。シフォン「これは・・・」ティシ「会長・・・」2人が到着した時にはすでに野次馬は増え収集がなくなっていた。そして、その中央ではガネツサがサテライザーと戦闘をしていた。ガネツサ「くらええええー」ガネツサの鎖がサテライザーに襲い掛かる、しかしその攻撃をサテライザーは簡単に弾き飛ばす。ガネツサ「くっ・・・この女」ガネツサは焦っていた先ほどから攻めてはいるが一撃も当てる事が出来ていないのだ。シフォン「おやめなさい、ローランドさん！正当な理由もなくパンドラ同士の争いは禁じられています」シフォンの声が響いた。ガネツサ「うるさいですわ、私にとってこの女を・・・はっ！！」その一瞬の油断が致命的だった、ガネツサがシフォンに気を取られている一瞬の隙をサテライザーは見逃さなかった。一瞬間合いを詰めると一閃する。ガネツサ「きゃああああああー」ガネツサのポルトウエポンは破壊され、ガネツサ自身も多大なダメージを受ける。生徒達「あああー、やっぱりか・・・」シフォン「あちゃ、ローランドさんかわいそう」ティシ「わかっていた事ですが・・・気の毒です」女子生徒E「やっぱり、すごいわね接触禁止の女王は・・・」女子生徒B「やっぱり、あのカーニバルは何かの間違えだったのよ」男子A「そうだよねな、俺達でもどちらが強いかわかるもん」野次馬達から色々の声が飛んでいた。その声が再びガネツサを立ち上がらせた。サテラ「やめろ、もうお前に勝ち目はな！無駄な事だ・・・」ガネツサ「うるさいですわ、こ

うなっただら校則を破つてでもあなたに勝つて見せますわー」その瞬間ガネツサの雰囲気が変わる。ガネツサ「パンドラモード起動ー」まるで咆哮のような叫びとともに周りにとつてもない衝撃が走る。サテラ「くっっ・ううう」あまりの衝撃にサテライザーはバランスをくずしポルトウエポンを離してしまふ。男子生徒達「うわっあああああー」男子生徒な中にもバランスを崩したり吹き飛ばされている者達もいれば、女子生徒「きゃああああああー」女子生徒達はさすがはパンドラであるといえるのか吹き飛ばされることは無かったが全員スカートがめくれないように抑えるのに必死になっていた、シフォンもティシも例外ではなかった。そして、衝撃やんだ瞬間そこには身体を青白く光らせ両手両足に輪のようなものを装着したガネツサがたっていた、そしてその瞬間先ほどとは比べ物にならない速さでポルトウエポーンがサテライザーに襲い掛かる。サテラ「はっ、ぐう・うううううううううう」ポルトウエポーンの展開が間に合わず鎖に拘束されてしまう女子生徒の中で1人2階ベランダにいたヒイラギはガネツサの姿をみて驚愕していた。ヒイラギ「2年生にもいたんだパンドラモードを持っていてる人が・・・」サテラ「ぐう・うううううううううう・・・」ポルトウエポーンに捕らわれたサテライザーは痛みを耐えていた。ただ拘束されているだけならまだよかったのかも知れない、しかしガネツサの鎖は身体を傷つけ喰い込んできていた。ガネツサ「ポルトウエポーンを手放すなんて・・あなた私を舐めてますの」シフォン「おやめなさい、ローランドさん」ガネツサ「むっ・・・」シフォン「実戦以外でのパンドラモードの使用は禁止られています」シフォンにしてはめずらしく怒気を含んでいた。しかし、それでもガネツサは引かない！ガネツサ「なら、今この瞬間が私にとって実戦ですわー」その声と同時に鎖が再びサテライザーに襲い掛かる。シフォン「あっー」ティシ「はあああ！！！！」ヒイラギ「あぶない！！！！」誰もが鎖がサテライザーを貫くと思われた時、またしても彼はまに合った。カズヤ「はっ！！！！」ガネツサの鎖

を気で吹き飛ばしサテライザーを守るように立つ。ヒイラギ「あつ、あの子」シフォン「アオイ君」ティシ「カズヤさん」突然のカズヤの出現にシフォン達を初め、その場にいた野次馬達も驚いていた。キム「どうやら、間に合ったようだな」エリズ「そうね」マーガレット「ふふ」突如空から声が聞こえたのでシフォンとティシが振り向くとマーガレット、キム、エリズが空から降りてきたのだ。あまりの光景にみんな開いた口が閉まらなかつた。そんな野次馬の事は余所に3人はすぐにカズヤに視線を向ける。ガネツサ「全く忌々しいですわね、一体何なんですのあなたは。どうして私の邪魔をするのかしら」カズヤ「もう、勝負はついていきます！もうこれ以上の戦闘に意味はありません！だから、早くこの人を解放してください」その後ろでサテライザーは痛に絶えながら必死にカズヤを見ていた、もう一度会いたかった人に。ガネツサ「関係ありませんわ、その女には私が受けた屈辱を味あわせてあげるのですから」ガネツサの言葉を聞きカズヤが口を開く、カズヤ「そんな力に意味はありません」ガネツサ「何ですって・・・」カズヤ「僕の兄さんが言っていました、力は誰かを守る為に生れてくるって・・・だけど、その力の意味を忘れただ欲望の為に扱えばそれはただの暴力です。だからこそ、強い力を持つ者はその力を理解しないといけない」カズヤの言葉にその場にいる全員の心に響いた、特にカズヤの過去の一部を知っている、マーガレット、キム、エリズの3人その意味を理解していた。ガネツサ「関係ありませんは、とにかく今は私にとっていまこの戦いは重要なのです。邪魔をしないでくださいー」その瞬間ガネツサビンタがカズヤに当たる。カズヤ「ぐう・・・」キム・エリズ「なっ・・・」シフォン・ティシ「ああっ・・・」キム達がガネツサを抑えようと飛び出そうとした瞬間声が響いた。サテラ「パンドラモード・・・起動」その瞬間先ほどよりも凄まじい衝撃破が発生した。ガネツサ「ぐううううー」うううう「あまりの衝撃にガネツサもバランスを崩す。シフォン「まさか・・・これは」ティシ「くうううううー」キム「ぐうう・・・」エリズ「何て

でたらめな……」男子生徒達「うわああああああ……」  
女子生徒達「きゃああああ……」ヒイラギ「う  
っ、他にもいたんだ2年生でパンドラモード・持っている人」サ  
テラ「ぬううおおおお……」凄まじい声とともにサ  
テライザーは鎖を引きちぎる、そしてサテライザーの身体もガネッ  
サのように青白く輝いていた。ガネッサ「そ、そんな・あなたも  
持っていたというのパンドラモード」そしてサテライザーがボルト  
ウエポンを構える、ガネッサ「サテライザー・L・ブリジットおお  
おお……」先にガネッサが攻撃を仕掛けるがもはやサテライ  
ザーには当たらなかつた。そして再びサテライザーの刃が一閃する。  
ガネッサ「そ、そんな……学年1位のこの私が……」今度こ  
そ決着がついた。シフォン「パンドラモードのローランドさんを一  
撃で……」テイシ「……すごい……」キム、エリズを除く  
全員がサテライザーの強さに圧倒された。カズヤ「強い……」  
カズヤも純粹にそう感じていた。ガネッサ「う……うっ……」  
認めませんわよ……私わ……サテライザー・L・ブリジット  
「……」まだ戦意を失っていないだけ大したものであった。  
しかし、ボルトウエポンもなく、ボルトテクスチャーも無くなった  
ガネッサに対抗する力は無かつた。サテラ「……」とどめを刺  
そうとサテラがガネッサに近寄る。ヒイラギ「まだ、やるの……」  
シフォン「いけない」テイシ「サテライザーさん……」刃が  
降ろされると誰もが思ったがそれは起こらなかつた。カズヤがサテ  
ライザーの手を抑えていたのだ。カズヤ「もう、十分ですよ」サテ  
ラ「あつ……」その言葉を聞いた瞬間サテライザーはボルトウ  
エポンをしまう。そして、カズヤに振り向いていた。サテラ「あつ  
あの……」うまく言葉が出なかつた、カズヤ「傷だらけですね・  
息吹け、蒼癒」その瞬間再び蒼い光がサテライザーとガネッサを  
包んだ、そして、数秒で傷を癒した。キム「カズヤ……」エリ  
ズ「大丈夫か」カズヤ「あつ……はい」2人はカズヤの無事を確  
かめるとすぐに厳しい目つきでサテライザーを睨む！「サテライザ

「I・L・ブリジット後で指導室へ来い」ガネツサ「ふふ、いいきみ  
ですわ」キム「お前もだーーーーー」ガネツサ「うええええ、ええ  
え」

こうして騒ぎ収集した、この後カズヤはマーガレットとシフォン達  
に見送られゼネティックスを後にした

## パンドラモード（後書き）

ようやく、学園生活をかけるかな・・・ほかのキャラクターとどう絡ませよう・・・

## 決心（前書き）

サブタイトル、内容と会ってるかな？

## 決心

カズヤ「うっ、いい風だな」カズヤはある丘の草原にいた、あの日ゼネティックスを後にしてから一月が過ぎ、その間カズヤはバイクで色々な所を周りその場所で生きている人達や、その思いを見してきた。カズヤ「・・・聖也兄さん、僕達が生まれた世界はこんなにも強い人達が生きてるよ・・・」カズヤは今は別の所にいる最愛の兄の事を思い出していた。

(1年前)

聖也「カズヤ、姉さんに会って来い・・・ここからの戦いは俺1人で行く・・・」カズヤ「何言ってるんだよー、ずっと一緒だって言っただじゃないかあー、僕も行く・・・それに・・・今頃姉さんに会ったって・・・」すると聖也は微笑みながらカズヤに語りかけた。聖也「なら、遠くからでもいい・・・直接会わなくてもいい一目姉さんに会って来い。カズヤ、家族はいつまで経っても家族なんだ」カズヤ「聖也兄さん・・・」その時突如光の空間が開くとその中にカズヤは吸い込まれていった。カズヤ「聖也兄さんー」  
「必死に抵抗するがなすすべもなかった、イヤだった、もう1人になるのは必死に叫ぶがどんどん吸い込まれていった。その時聖也から声ご響いた！聖也「カズヤ、例えどんなに離れていても俺達はどこで繋がっているから」聖也は胸に手をあてカズヤに語りかけていた。聖也「必ず生きて帰ってくる、約束だ！だからその間俺達が生まれた世界を頼んだぞ、カズヤ」カズヤ「聖也兄さんー」  
「その瞬間カズヤは光に吸い込まれた。

(草原)

カズヤは聖也の言葉を思い出しながら閉じていた目を開いた！カズヤ「よし、決めた」そういうとおもむろに立ち上がると急いでその場を後にする。

場所は変わり、ウエストゼネティックス・・・ちょうど休み時間だったのか教室の自分の席でヒイラギ・カホは外を見ながらポオ〜ととしていた。ヒイラギ「あの子どうしてるんだろう?・・・」そんな事を考えていると不意に話しかけられた。アーサ「よお〜、ポオ〜ってしゃってどうしたんだよ、ヒイラギ」同じクラスで友人のアーサ が話しかけてきた。ヒイラギ「ちょっと、ねえ〜」アーサ「アーサー「なんだ?太ったのか!!!」その瞬間裏拳が炸裂する。アーサ「ぐああああ」ヒイラギ「んな訳ないでしょうが」アーサー「いててて、冗談だよ〜」ううう」涙目になりながら答えた。アーサ「あいつの事だろ・・・」ヒイラギ「・・・うん、あれから一カ月・・・あの子どうしてるんだろ・・・」アーサー「ああ、そうだな・・・」2人ともあれからカズヤがどうなったのか気になってしょうがなかった。

場所は変わり校長室、今校長室には誰もおらず部屋は薄暗かった!すると、不意にへやに電子音が鳴り響いた。マーガレットの机に置いてあるメール機器が震えていたのだ、そして点滅した光にはこう映し出されていた(アオイ・カズヤ)と・・・

その頃、マーガレットは軍との共同会議の為に本部のあるシュバリ工に来ていた!マーガレット「ふう〜」軍幹部A「お疲れのようですな、シスター・マーガレット」マーガレット「いいえ、ちょっと考え事がありました・・・」軍幹部B「あまり、無理をなさらないで下さい!あなたはノヴァ對抗する為の力としてパンドラと同様に必要な方なのだから。倒れられては困ります」マーガレット「わかっています」軍幹部達の言葉を冷静に受け止めると、カズヤからの返信が来ているか確認しようとメール機器を取り出そうと胸元に手をいれた瞬間・・・マーガレット「あっ・・・あれ、ない!あっ、机の上に・・・」軍幹部C「どうされました?」マーガレ

ツト「あつ、いいえ！申し訳ありません。ちょっと急ぎの用事を思い出したので失礼します」そういうとマーガレット急いで帰宅する為へリポートへ向かった。

辺りが夕焼けに染まり始めた頃、ゼネティックスの校門の近くキムが1人校門を眺めていた。キム「今日も来ないか・・・」カズヤがゼネティックスを後にしてから一カ月いつ来るかも知れないカズヤの為に自分が受け持つ時間以外は出来るだけ校門の近くで待つのが日課になっていた。すると、後ろからエリズが話しかけてきた。エリズ「キム！！」エリズは両手にコーヒーを持ちながら現れた。エリズ「はい、ホットコーヒーよ」キム「ありがと！」エリズ「さすがに日が落ちると冷えてくるわね」キム「ああ、カズヤ大丈夫かな・・・」エリズ「そうね・・・」そして、辺りがあつという間に暗くなった。エリズ「キム、これ以上はさすがに冷えるは戻りましょう」キム「ああ、そうだな」2人は校内へと入った。

その頃、カズヤはゼネティックスのすぐ近くまで来ていた。カズヤ「まいったなあ・・・、辺りが暗くなってきた。急がなきゃ・・・」アクセルを回すとスピードを上げる。

そして、辺りが真っ暗になり誰もいなくなった校庭に1人の人影があった。サテラ「うう、寒い」サテライザーはオブジェの前に座りながらカズヤの事を思い出していた。サテラ「また、お礼が言えなかったなあ・・・」あの時せっかくのチャンスだったのにまともには話す事が出来なかった。サテラ「もう、何で私はこうも・・・」  
「こういう時に人付き合いが苦手な自分が疎ましかった。サテライザーがそんな事を考えながら落ち込んでいると近くからバイクの音が聞こえた。サテライザーがどこからだろうと辺りを見渡すとバイクは校門の前に停止した、そしてヘルメットをとったその顔を見た時サテライザーは駆けだしていた。

カズヤ「すっかりおそくなっちゃったなあ……、さすがにこんな  
に時間が掛っちゃったからな！出直そう」そうしてカズヤがバイク  
に再びエンジンを掛けその場を後にしようとした時、後ろから声が  
聞こえた。サテラ「待ってええー！ー！ー」カズヤ「えっ……」  
カズヤが振り向く見覚えのある女性がこちらに向かっていた。カズ  
ヤ「あの人は……」サテラ「はあ、はあ、はあ、はあ……ち  
よっ……と待って」サテライザーは息を切らしながら答えた。カズ  
ヤ「お久しぶりですね！」サテラ「はあ、はあ、……そうね  
……」カズヤ「あの……僕に何か？」サテラ「えっ！！ああああ  
あ、いやあ……その……」いざお礼を言おうとすると緊張  
で言葉が出なかった。サテラ「あっ……あのね」サテラがお礼を  
言おうとした瞬間軍用ヘリがやってきた。カズヤ「うわっ！！」サ  
テラ「きゃあ！」突然のヘリが現れたのでカズヤはバイクを支え、  
サテライザーはスカートがめくれれないように必死に抑えていた。そ  
して、ヘリが校庭に降り立つと中からマーガレットが降りてきた。  
マーガレット「アオイ君」マーガレットは急いで校門に駆け寄って  
きた。マーガレット「良かった、ヘリからあなたの姿が見えたので  
急いで来たんです。ですが、何故サテライザーさんがここに？」サ  
テラ「……そ、それは……」答えにくかったのか、カズヤが助  
け舟を出す。カズヤ「僕が困って、帰ろうとした時にサテライザー  
さんが声を掛けてくれたんです」マーガレット「そうですか！あり  
がとうございます、サテライザーさん」マーガレットはサテラの方  
を向く頭を下げた。サテラ「そ……そんな別に……」恥ずかし  
そうに俯いてしまう。カズヤ「シスター・マーガレット返事をしに  
来ました」その言葉を聞きマーガレットに緊張が走る。マーガレッ  
ト「そうですか……それではお聞かせ願えますか」なんの事かわ  
からないサテライザーは2人の話を聞いていた。カズヤ「この一カ  
月、僕は色々な所をまわって来ました！そして、そこで色々な人達  
の生き方や想い・感情を見てきました」マーガレット「そうですか

！どうでしたか」カズヤ「守りたいと思いました、今この世界で懸命に生きている人達の現在いまをそして、これから生まれてくる者達の可能性と未来を」マーガレット「そ、それじゃ」カズヤ「もし、ご迷惑でなければ僕もみなさんと一緒に守らせて下さい」カズヤのその言葉を聞いた瞬間マーガレットの目から涙がこぼれた。マーガレット「ううっ、ええっ・・・もちろんです！アオイ・カズヤ君私達と一緒に戦いましょう」そうするとマーガレットはカズヤの手を握り締めた。カズヤ「はい、よろしくお願いします」

この日、カズヤはゼネティックスへの入学を決意する。そしてこれから多くのパンドラ達がカズヤと接する事で大きく変わって行くのはもう少し先の話である。

## 入学（前書き）

途中まで書いた内容を保存しとく方法ないかな

## 入学

カズヤ「ふう〜、荷物はこれだけだな」サテライザーとマーガレットに入学を伝えてから一週間が過ぎその間にカズヤは借りていたアパートの退去の手続きや荷造りに勤しんでいた。カズヤ「あつ！いけないこれを忘れるなんて・・・」カズヤは机の上に飾ってあった2枚の写真を取った、1枚はカズ八と幼い時に撮った写真ともう1枚は兄である聖也と撮った写真である。カズヤ「フツ」カズヤはその2枚を大切に収めるとマーガレットから連絡があった待ち合わせ場所に行く為部屋を出る。カズヤ「よしっ、行くか」

その頃ウエストゼネティクスにあるパンドラ・リミッタ 達のお墓にキムとエリズの2人がいた、2人がここにいる理由は1つであるカズ八にカズヤが入学するのを伝える為である。キム「カズ八、今日は報告があつて来たんだ・・・実はカズヤが生きていたんだ、死んでなかった元気だったよ。そして今日カズヤがゼネティクスに入学するんだ、これから私達と一緒に人類を護るんだ・・・」エリズ「もしかしたら護つてもらっただけ立場になっちゃうかもしれないけどねフフ」キム「ちゃつと、エリズ」エリズ「ごめん、ごめん！だけどねカズ八、本当に・・・それくらいカズヤは強くかつこいい男になつてるわよ出来る事なら、カズ八にも見せてあげたいくらいよ」キム「確かに、だけどカズ八何があつてもカズヤは護つて見せるから・・・どうか見守っていてくれ」そして2人はしばらくカズ八の墓石を眺めていた。エリズ「そろそろ、行こうか」キム「ああ」2人が立ち上がりその場を後にしようと歩き出した時、カズ八「2人とも無理はしちゃダメよ」・・・キム「えっ・・・」エリズ「カズ八・・・」2人は急いで振り向くがそこには誰もいなかった。キム「気のせい・・・か・・・」エリズ「見たい・・・ね・・・」それが幻なのか幻聴なのかは分からないが久しぶりに聞けた親友の



に今着ている服を脱ぎ出した。シフォン「なななああなななああ  
あああー、何をしているんですかカズヤさ……。ん……。  
」突然のカズヤの行動に赤面になりながら注意しようと振り向い  
た瞬間シフォンはカズヤの肉体に目を奪われた、シフォン「綺麗・  
」カズヤの肉体は一切の無駄な筋肉が無くまるで彫刻のような肉  
体だった。シフォン自身男性の身体を見て綺麗と思ったのは初めて  
の事だった。シフォンがそんな事を考えていると、カズヤ「あつ、  
後ろに着替える所があったんですね！すみませんお見苦しいものを」  
シフォン「え……。いいえ何でもありませんー、早く着替えて下さい  
貰った……。いいえ何でもありませんー、早く着替えて下さい  
ー」カズヤ「あつ……。はい」そして、しばらくして真新し  
い制服に身をつつんだカズヤが出てきた。カズヤ「どうですか・。  
似合ってますかね」カズヤは照れながら答えた。シフォン「ええ、  
お似合いですよ」カズヤ「ありがとうございます……。ふう〜  
緊張するな」再び席に座るとカズヤが答えた。シフォン「フフ、  
意外ですわね！カズヤさんにも緊張する事はあるんですね」カズヤ  
「恥ずかしながら、やっぱり不安はあります！勉強にはついていけ  
るかとか、友人は出来るかなとか正直不安です」シフォンはカズヤ  
の表情を見ながら何故か嬉しい気持ちになっていた。目の前にいる  
少年は強い純粋な戦闘力、精神の強さどれをとってもこの世界の誰  
よりも強いとおもっ自分なんか足元にも及ばないくらいに、だがそ  
の考えは間違っていた。目の前にいる少年は自分達のパートナーと  
なんら変わらない少年だったのだから、そう思うと身近に感じて嬉  
しかった。カズヤ「あの……。シフォンさあ……。あつシフォン先輩  
1つお聞きしてもよろしですか？」シフォン「はい、どうぞ」カズ  
ヤ「あの、リミッタにも適正つてあるんですか？」シフォン「え  
っ、それは？」カズヤ「例えば何か検査とかして適正に合わなかつ  
たらなれないとか……。」シフォン「ああ、そお言う事ですか！そ  
れは大丈夫です。リミッタはパンドラとは違いそうだったものは  
無いんです、ゼネティックスにいる男子はみな志願して来ているん

です。」「カズヤ「へえ〜、すごいな・・・僕も欲しかったな  
勇気が・・・」シフォン「でしたら、すこしリミッタ について説明  
しましょう」「するとシフォン壁についてある画面を操作すると画像  
を出す。シフォン「まず、リミッタ の役目としてはノヴァから発  
せられるフリージングを中和し私達パンドラの活動できる空間をつ  
くる事にあります。このリミッタ の存在によって私達の肉体に対  
する負荷も軽減されます、とは言ってもリミッタ の男の子達も最  
初からこのフリージング能力が使えるわけではありません!」「カズ  
ヤ「どういう事ですか?」「シフォン「まず、このフリージング能力  
を男の子が使えるようになるには洗礼と呼ばれる行いが必要なん  
です。パンドラが熟成させた聖痕のカケラを移植する事によって初め  
て可能になります。こうしてイレインバーセットと呼ばれる五感を  
供有することが出来ます、あとこの場合年下の男の子が適している  
と言われています。このように五感を共有しイレインバーセットを  
行うという事はお互いを信頼している証明でもあるんです」「カズヤ  
「へ〜、まるで恋人同士というか、結婚相手を探してみたいですね。  
フフ、僕も出会えるかな・・・」シフォン「・・・アオイ君な多  
すぎて困るくらいと思いますけど・・・」カズヤ「えっ、何かいい  
ましたか?」「シフォン「えっ!!! あっ何でもないですわ。ホホホ  
ホホ」そしてそうこうしている内にウエストゼネティックスが見え  
てきた。

テイシ 「あつ、来ましたねヘリが」「マーガレット「そうですね」  
キム「カズヤ」エリス「フフツ」そしてヘリがヘリポートに降り立  
つとまず先にシフォンが降りてきた。シフォン「アオイ・カズヤ君  
をお連れしました」そしてそれに続くようにカズヤが姿を現した。  
テイシ 「カズヤさん」マーガレット「ようこそ、ウエストゼネテ  
ィックスえ」キム「似合ってるぞ」エリス「本当に」カズヤ「あり  
がとうございます、キムさあ、キム先生、エリス先生」慌てて言い  
直したカズヤにキムが近づくと、キム「堅苦しくなくていいぞ、私  
もエリスも姉代わりと思ってくれれば」カズヤ「代わりだなんて、

お2人は僕なんかにはもつたいないくらい素敵な姉さんですよ」キム「なあ・・・」エリズ「うつ・・・」2人共カズヤの言葉に赤面してしまい言葉が出なかつた。マーガレット「まあ、やりますわね」テイシ「カズヤさん!!!」シフォン「こちらが、恥ずかしくなりますは」マーガレット達もあの笑顔であれだけの言葉を言えるカズヤに赤面していた。キム「オホン、とにかく中に入るう」マーガレット「そうですね、行きましょう」カズヤ達は校内に向かい歩き始めた。

その頃校内ではある一部の生徒にだけある噂が広がっていた。2年生パ「ちよつと聞いたあの噂」2年生パ「知ってる、知ってるあの子が入学してくるって」2年生パ「ホントにー」3年生の教室3年生パ「おい、聞いたかあの噂・・・」3年生「聞いた、あれマジらしいよ」3年生「やつぱりそうないんだ・・・もう一度会えるんだな」その3年生の中で3人の少女が噂話をしている3年生に首をかしげていた。クレオ「一体、何の話をしているんだ？」アーネット「さあ・・・ね、興味ないもん」アティア「そうよ、クレオどうせくだらない事よ」クレオ「そうか」するとそこに・・・イングリッド「ならいいがな」アーネット「どういう意味よ、イングリッド」イングリッド「この噂話はどうやら全学年の一部の生徒の間で広まってるらしい」アティア「どおいう事よ？」イングリッド「さあーな、誰だか知らないがこのように秩序を乱す行為をするものを私は許さない」そういうとイングリッドは去って行つた。クレオ「相変わらずだな」アーネット「お固い事で」アティア「まあ、いいんじゃない」彼女達は知る事になるこの噂の意味をそして1年生の教室でもその噂で持ちきりだった、アサー「ヒイラギ聞いたかよ例の噂」アサーが興奮しながら話しかけてきた。ヒイラギ「はいはい、知ってるわよ!でっ・・・」アサー「でっ、お前興味ないのかよ。あいつがゼネティックスに入学してくるんだぜ」ヒイラギ「所詮は噂でしょ、そんな確証もない事でなに盛

り上がってるのよ」アーサ「あつ・・・うん、確かに」校内が噂話で持ちきりになっている頃、カズヤは校長室にいた・・・カズヤ「何だか・・・随分騒がしいようでしたけど何かあつたんですか？」キム「お前なあゝゝ」エリズ「鈍いなあゝゝ」2人ともカズヤの鈍感さに呆れるとともに、女性関係に不安を覚えていた。マーガレット「フッフ、今校内ではあの戦いの場にいた一部の生徒の間ではアオイ君が入学してくると言う噂が流れているんです。」カズヤ「そうですねですか・・・何か複雑な心境です、ハハハ」カズヤは苦笑いを浮かべた。シフォン「全く、少しは自覚してくださいアオイ君！あの戦いの場にいた人間にとつてはアオイ君は特別なんですよ！」テイシ「そうです！！、みんな、会いたかつたんですから」カズヤ「あつ・・・すいません」2人に凄まれカズヤはつい謝ってしまう。マーガレット「とにかく、アオイ君の授業への参加は明日からになります。クラスはキム先生が受け持つクラスです」キム「よろしくな、カズヤ」カズヤ「はい！！キム先生」マーガレット「フッフッフ、とりあえず今日は荷物の移動などもあるでしょうからゆっくり休んで下さい。これがアオイ君の部屋の鍵です」マーガレットがカードキを差し出す！マーガレット「男子寮の場所への案内は・・・えゝゝ」マーガレットが案内役を指名しようとするのをカズヤがせいした。カズヤ「あつ、大丈夫です！自分で探せますから」エリズ「大丈夫か？かなり広いぞゼネティックスは」カズヤ「少し、歩いてみたいんです」カズヤの発言にすシフォンとテイシは尚更案内役をやるうと直訴しようすると、マーガレット「わかりました！色々見て回ってみて下さい」カズヤ「はい、ありがとうございます」カズヤ「それじゃ、失礼します」マーガレット「ええ！！」キム「カズヤ、明日遅れるなよ」カズヤ「はい」返事を返すとカズヤは校長室を後にした。マーガレット「これから、楽しみですね！」キム「はい」エリズ「ええ」マーガレット達はこれから始まるカズヤとの学園生活に胸を躍らせていた。その隣で案内役になれなかつ

たシフォンとティシ が落ち込んでいたのは言うまでもない！

その頃、校長室を後にしたカズヤは男子寮に向かいながら周りの光景を見ていた。カズヤ「すごいな〜、どれだけの広さ何だろう？」カズヤは改めてゼネティックスの規模の大きさに驚いていた。カズヤ「道覚えられるかな・・・」カズヤがそんな事を考えながら歩いていると前方から見覚えのある女性が歩いてきた。カズヤ「あつ、あの人」サテラ「早く帰ろう・・・」訓練が終わり寮に戻ろうと歩いていたサテライザーの前方歩いてくる人影があつたいつものような顔会わせず無視しようとしたが不意に人影が近づいてくるといきなり声を掛けられた。カズヤ「やつぱりあの時の」サテラ「えっ！！！」サテライザーはその声を聞き思わず声の主を見た。そこには、あの少年アオイ・カズヤがいたのだ。サテラ「あつあああ、あなた！！！！」突然の事にサテライザーは天パっていた。そのサテライザーの心境を知ってか知らずかカズヤはどんどん話しかけてきた。カズヤ「嬉しいな、まさかまたあなたに会えるなんて」カズヤは笑みを浮かべながら話しかける。サテラ「あつああああ、あの・・・」何とか声を絞り出そうとした時いきなり後ろから大きな声が聞こえた。アーサ「あー！ー！ー、アオイ・カズヤ」カズヤ「えっ！！！！」突然名前を呼ばれ振り向くと、それと同時にサテライザーがその場からもうダッシュで駆けだした。カズヤ「あつ、あの・・・」サテライザーはカズヤの静止を無視し駆けだした。そして、その後ろ姿を見送っていたカズヤの背中にアーサが飛びかかってきた。アーサ「すげえ〜〜〜〜、本当に入学してたんだな。あの噂は本当だったんだな」いきなりの事に内心驚いていたが顔には出さず、カズヤはアーサ に話掛けた。カズヤ「あの、君は？」アーサ「俺、俺はアーサ ・クリップトン1年だよろしくな」カズヤ「うん、僕はアオイ・カズヤよろしくねアーサ 君」アーサ「堅苦しいよ、アーサでいいから」カズヤ「う、うん・・・わかった！・・・（明るい子だな）」とアーサ の第一印象を

感じていると、アーサー「今から、寮に行くんだろ！案内してやるよ」するとアーサーはカズヤの手を掴むと走り出した。カズヤ「ちよっと、アーサー」カズヤはアーサーに引つ張られながら寮に着くはめになった。

その頃、サテライザーは自分の部屋がある女子寮に着くと息あらくドアの前に立っていた。サテラ「ハア、ハア、ハア、ハア……あの子本当に……」あれから随分と時間がたつのに胸の高鳴りと呼吸がなかなか落ち着かなかつた。サテラ「ハア、ハア、フウ」本当に入って来たんだ」あの時の話は本当だった、あの子はアオイ・カズヤはゼネティックスに入学してきたのだ、そう思うと嬉しかった。こんなに嬉しい気持ちになったのはウエストに来てから2度目だった。彼女に出会えたときと……サテライザーはしばらく顔がにあげるのを抑える事が出来なかつた。しかし、しばらくして話チャンスだったのを思い出し落ち込むのであつた

入学（後書き）

やっぱり、途中で止まった

## アクセルターン(前書き)

少しだけ、あのキャラクターが出ます

## アクセルターン

カズヤ「ハアアア、デヤアア、ハアアア……フウ」  
「まだ、周りは寝静まつている時間にカズヤは1人ゼネティックスから少し離れた山の中で鍛錬に励んでいた。昨日は早速出来た友人アーサに掴まり結構な時間まで話に付き合わされたので正直寝むかったが、日課の事だったので自然と身体が起きてしまったのだ。カズヤ「よし、これくらいにしとくか」ちょうど、その瞬間太陽が昇る。カズヤ「いよいよだな、フフ」期待と楽しみ半々の気持ちを胸にしながらカズヤは風を纏いその場を後にした。

場所は変わり、同時刻日本のもう一つのゼネティックス、イーストゼネティックスに所属するパンドラである少女キャシー・ロックハートはベッドの上である結晶を見ていた……キャシー「……綺麗ななあ……、一体何の結晶何だろう？」キャシーが見ている結晶は蒼と紅の2種類の色が混じった不思議な物だった。これは、つい一カ月前にウエストゼネティックスへの応援要請に行きウエストの校庭で拾った物だった。キャシー「不思議だなあ……なんだかとても暖かい気持ちにしてくれる、フフフ」そういうとキャシーはその結晶は首に掛けた。キャシー「さて。起きますか！ううう」  
「その時彼女は気付いていなかった、結晶が輝いている事に……  
・ 彼女がこの結晶の正体を知るのもう少し後の事である……

そして、すっかり陽も昇りウエストでも学生達もそれぞれの自分のクラスや授業に向かっていた。カズヤも今は自分のクラスに担任であるキムと向かっていた。カズヤ「フウ」キム「緊張しているのか、フフ」カズヤ「やっぱり、不安もあります……受け入れてもらえるかな」弱気な発言をするカズヤにキムを優しく語りかける。

キム「大丈夫だカズヤ、お前ならみんな受け入れてくれる！なっ」  
そういつてウインクをしてきた。カズヤ「はい！！」キム「行こう」  
そして、再び歩き出す。カズヤ「ありがとう姉さん」キム「えっ・  
・ふう、カズヤ」突然の事にびっくりしたが、すぐに切り替え少  
し先を歩くカズヤに追いつく。

その頃、教室では生徒達が授業の準備をしキムの到着を待っていた。  
ヒイラギ「ハア〜アア〜、キム先生遅いわね。ねえアーサ  
！ん？」ヒイラギが近くに座るアーサに話しかようと見ると何故  
かニヤニヤしていた。ヒイラギ「ん？」普段から愛想がよく常に笑  
っている印象のある友人ではあるが今日はいつにもまして笑ってい  
た。アーサ「フッフ〜フ〜」ヒイラギ「えらく、ご機嫌ね  
！何かいい事でもあったの？ねえ、教えなさいよ」アーサー「へへ、  
内緒ー」ヒイラギ「いいじゃない、教えなさいよ」アーサー「ダ  
〜メ〜」ヒイラギ「何よ、ケチ」アーサー「すぐに、わかるよ」  
ヒイラギ「えっ？」すると扉が開く音が聞こえるとキムが入ってき  
た。ヒイラギ「起立、礼」生徒達「おはようございます！！」ヒイ  
ラギ「着席」キム「みんな、おはよう！今日はこのクラスに転校生  
が来ている・・・入ってくれ」女子「ええ、この時期に？どんな子  
だろ」女子「カッコイイ子がいいな〜」女子「私は守ってあげ  
たい方がいいけどな」男子「お前、男か女どっちだと思う」男子「  
さ〜な、賭けるか」男子「いいね〜」クラスのいろんな所で話  
が広がっていた。ヒイラギ「大袈裟ね、ただの転校生じゃない」興  
味がなさそうに言っていると、アーサー「ただの転校生ねえ〜」  
フッフフ「ヒイラギ「うっう？」アーサーの様子が変なのには気  
になったが、その事はすぐに吹き飛んでしまった。入ってきた転校  
生にヒイラギはいやクラス全体が目を奪われた。なぜなら、そこに  
いたのは一カ月前に起きた戦いの中で突如現れ自分達を守ってくれ  
たあの少年だったのだから。ヒイラギがアーサの方を見るとやつ  
てやったといわんばかりの笑顔で笑っていた。カズヤ「え〜とっ・

・今日からみなさんと一緒にこのクラスで学ぶ事になったアオイ・カズヤです。色々と不慣れな事やわからない事も多いと思いますのでこれからよろしくお願いします。」キム「よし、それじゃ後ろの空いてる席に座って！」カズヤ「はい」キムの指示で後ろの席に座ると、斜め前にいたアーサーがピースサインを向けてきた、それに対してカズヤも笑顔を返す。キム「それでは、授業を始めるぞ」こうしてカズヤの学園生活が始まった。その頃女子寮のある部屋で1人の女子生徒と3人の男子生徒がいた。ミヤビ「フフ、なるほどかわいい子じゃない」男子生徒A「ミヤビ様、どうぞ着替えです」ミヤビ「着けさせて」この部屋の主であるカンナツキ・ミヤビは3年生のパンドラであり上位メンバーにはおとるものそれなりの実力を持ち、それに通常1人のはずのリミッタを3人もいるパンドラなのだ。ミヤビ「かわいいは、このカンナツキ・ミヤビ様の洗礼を受けるに値するは」ミヤビは不気味な笑みを浮かべながらカズヤの画像を見ていた……。その頃授業を終えたカズヤは少しでも遅れを取り戻すために先ほどの授業の内容を復習していた。カズヤ「えっと、イレンバーセットの継続時間は約2分が限界とされていると、確かこのイレンバーセットも洗礼を受けないと使えないんだよな」カズヤが先ほどの授業の内容を思い出していると何だか視線を感じた。カズヤが何だろうと振り向くとクラスメイトである女子数名がこちらを見ていた、そして目が合うと急に、女子生徒達「きゃあっ」かわいらしい声を上げながらすぐに視線をそらす。そして別の場所からも同じように男子や女子の視線が向けられていた、感じている視線からして決して悪い感じではないようだが、こういった感情に鈍いカズヤにはわからなかった。カズヤ「うん、やっぱりどこか僕おかしいのかな？」全体的外れな考えをしているカズヤに2人の男女が近づいてきた。アーサー「よっ、人気者はつらいな！カズヤ」ヒイラギ「ホント！」カズヤ「アーサー、えっと君は？」ヒイラギ「ああ、私ヒイラギ・カホ！このクラスの委員長よ。よろしく」カズヤ「よろしく！」アーサー「しかし、真面目だな！

休み時間にも勉強だなんてよ！」カズヤ「少しでも、みんなに追いつかないとね」ヒイラギ「アオイ君はアンタとは違うのよ」ヒイラギが厭味つたらしく言ってきた。アーサ「はいはい、そうですね！あつ、そーだカズヤ今から食堂に行くんだけど一緒に行かないかまだ、よく場所分かってないだろう」ヒイラギ「うん、行こう」カズヤ「うん、ありがとう！」そういうと3人はクラスを後にした。その時クラスの女子からヒイラギが嫉妬の目で見られていたのは言うまでもない……

教室を出て、カズヤ達は話ながら向かっていた。カズヤ「ねえ、ヒイラギさん」ヒイラギ「何？」カズヤ「僕つて、どこか変？」ヒイラギ「へっ……」突然の質問にヒイラギは素頓きよんな声を出した。アーサ「どうして、そう思うんだ？」隣を歩いていたアーサ「が聞いてきた。カズヤ「イヤ……その何だかクラスのみんなの視線が変と言うか、別に悪い感じじゃないんだけど……ごめんうまく言えない」ヒイラギ「あ~~~~なるほどね」カズヤの疑問にヒイラギはすぐに納得した。普通に考えればカズヤは自分達と比べるとかなり変わっているだろう、なんせたった1人であるほどの存在を倒す力を持っているのだから。その事はクラスのほとんどの者が知っている、あの光景は簡単に忘れられる物ではない。本来であればあれほどの力を持つていれば嫉妬であつたり恐怖の目で見られてもおかしくないのだが、しかしカズヤ感じている感情はむしろ悪い物ではなく良い物だ。特に女子からの感情は好意に近い、ヒイラギもその1人である、そうなっているのは彼の人柄と雰囲気から生まれている物だ。ヒイラギ「まあ、大丈夫よ！みんな、早くあなたと仲良くなりたいただけよ」カズヤ「そうかな？」ヒイラギ「うん！」ヒイラギも笑顔で答えた。アーサ「まあ、男子からは嫌われるかもな！ハハハ」ヒイラギ「あんたは余計な事を言うのよ」ヒイラギがアーサの耳を引っ張る。アーサ「イテテテ、悪い、悪い」カズヤ「ハハハハ」そうしている内に食堂に到着した。カズヤ「うわあ~~~~、すごい……」カズヤは食堂の広さもさること



笑いをしていた。とりあえず2人は席についた。ヒイラギ「あ〜ん、う〜ん！おいしい〜」ヒイラギがハンバーガーを食べている横でカズヤは静かに手を合わせていた。カズヤ「いただきます」そしてカズヤも食事を始めた。ヒイラギはなぜかカズヤの食事の作法に目を奪われた、カズヤの作法まるでお手本のように綺麗だったからだ、自分とその隣で食べるアーサとは違ってとても上品に見えたのだ！そのしぐさはまるで女性にも見えたからだ。ヒイラギ「ああつ……う〜ん」そう考えたらなぜか姿勢を正してしまった。アーサ「どうしたんだヒイラギ、ちゃんと座ったりして？」ヒイラギ「別に女性だからあたりまえじゃない」アーサー「ふ〜ん、そっか！じゃ、俺おかわりしてくるから」そういうとアーサは1人席を立つ。ヒイラギ「は〜〜〜」カズヤ「フフ、凄いなアーサの食欲は」ヒイラギ「食べ過ぎよ」カズヤ「ねえ、ヒイラギさん！教えて欲しい事があるんだけど」ヒイラギ「何？」カズヤ「サテライザー先輩にはどこに行けば会えるかな」ヒイラギ「えっ……」「意外な言葉に一瞬理解が出来なかった。ヒイラギ「ど、どうして急に？」カズヤ「実はこの前のカーニバルの時サテライザー先輩が負けちゃったのは僕のせいなんだ」ヒイラギ「ええっー、じゃあガネツサ先輩が優勝出来たのはあなたのせいだったのお……」カズヤ「シツ、声大きいよ！アーサには聞かれたくないんだ」ヒイラギ「ああ〜、だから今」ヒイラギはカズヤの今の言葉を聞き、カズヤなりにアーサを気遣つての事だと理解出来た。カズヤ「だから、謝りたいんだサテライザー先輩に……」ヒイラギ「う〜〜、あまり勧めたくないかな！あなたの為にゆうけど接触禁止の女王にはかかわらない方がいいわよ」カズヤ「えっ？接触禁止の女王、サテライザー先輩のふたつ名の事よ！戦いにおいて相手を自分に触れさせる事なく倒す事からそう呼ばれているのよ、しかもそれは普段の生活でもそう少しでも自分に触れるものなら容赦なく攻撃を加えると言われているわ。私もよくわからないけどあの先輩イカレているのよ、だからアオイ君も……」ヒイラギが言葉を続

けようとすることをカズヤの人差し指が防いだ。カズヤ「えっ・・・ええ・・・」突然の事にヒイラギは戸惑っていた、しかしそんなヒイラギに構わずカズヤが話した。カズヤ「駄目だよ、ヒイラギさん、よく知らない人の事を悪く言っちゃ。ヒイラギさんせつかく素敵な女の子なんだから・・・ねっ」カズヤは笑いながら話しかけた。ヒイラギ「あっ・・・う、うんゴメン」カズヤの言葉は何故か心に届く言葉だった。カズヤ「会ってみるよ、サテライザー先輩に!!」ヒイラギ「えっ、でも」カズヤ「自分の目で確かめてみるよ」カズヤは笑いながら答えた。ヒイラギ「アツ・・・」その笑顔にヒイラギは見惚れていた。アーサー「よっ、立ち上がったでしょう」たんだよ」料理を取りに行ってたアーサー「戻ってきた。カズヤ、別に何でもないよ!ねっ!」ヒイラギ「う、うん」すると突然食堂が騒がしくなる。カズヤ達も何事かと振り返るとそこにはサテライザー・L・ブリジットがいたのだ。すると周りの生徒達は恐怖の為に次々と自分から道を開ける、とうのサテライザーはそんな事を気にも止めず一直線にバーガークインに向かうと1人で食べるには多いハンバーガーを購入すると足早にそこを後にする、帰る時と同じである生徒達は自分から道を開ける。しかし、今日は例外が1人いた。カズヤ「あの、サテライザー先輩」サテラ「えっ!!」ヒイラギ「アーサー「あっ!!!」男子生徒「おい、あいつ死ぬぞ」女子生徒「大変よー、ひいひい」」周りは悲鳴を上げているがとうのカズヤはそんな事は気にも止めずサテライザーに近付く。カズヤ「お久しぶりです、突然呼びとめてしまいました」サテラ「あっああ・・・」サテライザーは焦っていた、自分が会いたいと思っていた少年が突然現れたからだ、ホントなら話したい事、言いたい事沢山あるはずなのに今は何故かその場から早く立ち去りたかった。カズヤ「あっ、あの」カズヤがさらに近づこうとするとそれを避けるようにカズヤの横を通りぬけようとすると、それをカズヤの伸ばした手がそれをさせなかった。カズヤ「待って下さい」サテラ「はっああ!!!」」アーサー「ヒイラギ「触れた」」



とヒイラギは信じられないという顔をしていた。アーサー「マジかよ!!!」ヒイラギ「うそおおお・・・あの接触禁止の女王が」そんな心情も知らずカズヤはサテラと話しを続けていた。カズヤ「やっぱり、先輩はやさしい人ですね」サテラ「えっ、私が優しい・・・」カズヤ「はい！初めて先輩の瞳を見た時いつけん冷たい印象は受けましたけど、でもその奥にとても暖かい物を感じましたから、これは兄さんのうけうりなんですけど。素敵な女性は瞳を見ればわかるって、だからサテライザー先輩は本当に素敵な女性ですよ」カズヤは笑顔で答えた。それを言われたサテラ、そして隠れて聞いていたアーサー・ヒイラギも顔を赤くしていた。アーサー「よくあんなセリフ言えるよな」ヒイラギ「全くよ、自覚してないから、なお厄介よ」2人ともカズヤと会って1日だが、カズヤがどういった人間なのか分かった気がした。すると人がくる気配がした、それに気付いたアーサーとヒイラギは今度は入り口の天井の隠れた。すると、4人の男女が現れた。カンナツキ「ずいぶん気持ちいいセリフをいうじゃない」カズヤ「えっ」カズヤが振り向くとそこにはシヨートへアーで少し大人びた女性とリミッタ と思われる3人の男子生徒がいた。カズヤ「あの・・・あなたは？」カンナツキ「貞操の解放者、カンナツキ・ミヤビ3年生よ」カンナツキの名前説明を隠れて聞いていたヒイラギが呆れたいた。ヒイラギ「何が、貞操の解放者よただの」アーサー「リミッタ 喰い」ヒイラギ「そう、あの先輩美形を見つけたら片っ端から洗礼してるつよ、そして用がすんだら聖痕を抜き取ってるつよっぱらの噂よ」アーサー「その用って？」ヒイラギ「うっ、言わせないでよ」アーサー「まさか、カズヤも!!!」ヒイラギ「それは、大丈夫でしょ。アオイ君なら」2人がそんな話をしている頃下では・・・カズヤ「あの、なにか御用ですか？」カズヤがカンナツキに質問をしているとサテラがその横を通り過ぎ、カンナツキも通り過ぎようとした時カンナツキから声がかかる。カンナツキ「お待ち、2年生の分際で3年生に挨拶もなし」明らかに不快感がこもったものだった。サテラ「・・・」

その言葉に振り返ると一礼しその場を後にする。カズヤ「あつ、サテライザー先輩待つて下さい」カズヤがサテラの後を追いかけようとした時、カンナツキが行くてを塞ぐ、カンナツキ「あなたには用があるの、私と洗礼を結びなさい！最高の学園生活を約束するは」カズヤ「えっ」カンナツキの発言にサテラは思わず振り向く。アーサ「カズヤ・・・」ヒイラギ「アオイ君」2人の心配をよそにカズヤの答えはこうだった。カズヤ「すみません、僕は先輩とは洗礼出来ません」カンナツキ「なっ！！！！」カズヤの言葉にカンナツキは顔を歪める。カズヤ「パートナーもう決めてるんで、すみません」カズヤが頭を下げてその場を後にしようとするとその行くてを男子生徒が塞ぐ。男子A「ふふっ」男子B「ふふっふふ」男子C「ふっ！！！」何やら不気味に笑っていた。そして、それと同時にうしろからカンナツキの声が響く。カンナツキ「貴様、私に恥をかかせてただで済むとでも」明らかに雰囲気の変わったカンナツキがそこにいた。普通にであればその雰囲気だけで恐怖で動けなかったかもしれない、だが今カンナツキ達の間目前にいる少年は普通ではなかった。単純な強さだけではカンナツキなど足元にも及ばない所にいる人間なのだ、あの戦いの場にいなかったカンナツキは知る由もなくカズヤに近付く。カンナツキ「さあ〜て、どうしてくれようかしら」カンナツキがカズヤに触れようとした時カンナツキの首先の剣が向けられる。カンナツキ「むっ！！！」カンナツキが振り向くとそこにはポルトウエポンを展開したサテラがいた。サテラ「その子に指一本でも触れてみる！ただではすまさない」先ほどまでとは比べ物にならない殺気を放ちながら宣言する。アーサ「うそだろ、接触禁止の女王がカズヤの為に」ヒイラギ「無茶よ！！！！2年生が3年生に勝てる訳がないは」カンナツキ「ふ〜ん、ただではすまさないね！私もずいぶん舐められたものだは」その瞬間カンナツキが素早くサテラの胸ぐらを掴むと柔道技の投げでサテラを地面に叩きつける。サテラ「くはあああっ！！！！」コンクリートが弾けるほどの威力にサテラの顔が歪む。そして、カンナツキはサテラ

を見下ろしながら告げる。カンナツキ「さて、お手並み拝見といこうかしら！ホーミングダガ」カンナツキがボルトウエポンを発動させると空中に複数のダガ がういていた。そして、カンナツキ指示によりそのダガ が四方八方からサテラに襲い掛かる。サテラ「ハアアアーーーー、フン、フンツ、ハアア」サテラはその攻撃を円を描くように周りながらそれを全部弾き返す。カンナツキ「へえへ、さすがねお世辞抜きで！でも」その瞬間カンナツキの姿が消えるといったの間にかサテラの背後に回っていた、ヒイラギ「3年生にはこれがあるのよ」アーサー「ああ、アクセルターン！ハイエンドスキルの1つだ」カンナツキ「ハアハハアアア」不気味な笑いを浮かべながらダガ がサテラの背中を切り裂こうとした瞬間今度はサテラの姿が消える。カンナツキ「なっ！！！！」攻撃が空振り態勢崩した所にサテラの攻撃が迫る。カンナツキ「くっ！！！」それを間一髪で交わすとサテラを見据える。アーサー「マジかよ！！！」ヒイラギ「ウソオーーーー、だってハイエンドスキルは3年生のカリキュラムのはずよ」カンナツキ「驚いたわね、アクセルまで使いこなせると！噂通りねえ、サテライザー・L・ブリジットおおおおーーーー」その瞬間先ほどとは比べ物にならない速さで動きだす、サテラもそれに対抗するように速度を上げる、普通の人間では捉える事の出来ない速度で動いている2人をカズヤは捉えていた。カズヤ「早い、だけど・・・聖也兄さんほどじゃない」そんな事を考えながら戦闘を見つめる。カンナツキ「全く、2年生の分際で、ハア・・・ハア、ハアここまでアクセル使いこなせるなんてね」サテラ「ハア、ハア・・・ハア、ハア」2人とも身体への負担が大きいのか息切らしていた。アーサー「ヒイラギ、俺シフォン会長を呼んでくるよ！何かヤバそうだ」ヒイラギ「うん！！！！急いでね」アーサー「っわかった！！！」そういうとアーサー は屋上を後にする。そして、その瞬間両者が動く！カンナツキ「おもしろいわーーーー、サテライザー・L・ブリジットおおおおおお」サテラ「くう・・・」サテラも向かいつつそして両者が交差すると衝撃破が

周りを襲う。ヒイラギ「きゃあ！！！！」リミッタ 3人「くっ・  
・うっうう」、そして静まりかえったその瞬間カンナツキの悲鳴が  
上がる。カンナツキ「いやぁーーーーー、わ、私の・・・  
私の顔に傷がああ・・・ああああああ」カンナツキは我を失い  
ながら叫ぶ、リミッタ 3人「ミヤビ様！！！」リミッタ 達が駆  
け寄る。その後ろでサテライザーは立ち上がるとボルトウエポンを  
しまっ、ヒイラギはその光景を見てサテライザーの強さに唾然とし  
ていた。ヒイラギ「すごい・・・、3年生に勝った」そのヒイラ  
ギとは対照的にカズヤはこの結果が分かっていたようにその光景を  
見つめていた。しかし、戦いはこれで終わりではなかった先ほどま  
で悲鳴を上げていたカンナツキが冷静さを取り戻しながらも先ほど  
よりも不気味な笑みを浮かべながらつぶやき始めたのだ。カンナツ  
キ「こいつ・・・よくも私の顔に傷を・・・許さないわ、制  
裁ごときではすまさないわこの世恥辱と屈辱を味あわせてやるはー  
ーーーー。お前達ーーーー」リミッタ 3人「はい！ミヤビ  
様」すると3人のリミッタ が陣形をとるようにカンナツキの後ろ  
に並ぶ。サテラ「うっ！！あれは」ヒイラギ「まさか！！！」カ  
ンナツキ「イレインバーセトーーーー」その瞬間リミッタ から  
フリージングが屋上に展開されカンナツキの聖痕も輝き出す。カズ  
ヤ「なっ・・・動けない」フリージングに捕らわれてしまったカズ  
ヤは動きを完全に封じられていた。サテラ「あっ、くっ」カズヤを  
助けようとするサテラにもフリージングが迫る。サテラ「うっうう  
！！！」サテラはそれを間一髪空中に飛び回避する。そのサテラの  
驚異的な身体能力にカンナツキは驚愕していた。カンナツキ「馬鹿  
な、いくら完了前とはいえフリージングの領域であれほどのジャン  
プが出来るなんて」驚愕しているカンナツキを気にも止めずサテラ  
はカズヤを見ていた。サテラ「今の状態では、不利だ早くあの子を  
連れて！！！」地面に着地すると素早くカズヤの元へ向かい手を伸  
ばした瞬間サテラの腕が切り裂かれる。カズヤ「あっ！！！！！」  
サテラ「うっ・・・うっうっうっうああああ」そしてその瞬間サ

テラもフリージングに捕らわれる。カズヤ「サテライザー先輩！！  
！くそお」何とか動こうとするがまだ知識の乏しい今のカズヤでは  
どうする事も出来なかった。そこに笑いながらカンナヅキとリミッ  
タ が近づく。カンナヅキ「フフフ、もう逃げられないわよ、さあ  
どうしてくれようかしらね！上級生には向かった報いをね。でもそ  
の前にこいつにもお仕置きをしないとね。やれ！！」カンナヅキ  
が指示すると3人ともカズヤに向かうと3人がかりでカズヤに暴行  
を始めた。ヒイラギ「ああー」どれだけ強かろうと今のカズ  
ヤはフリージングの空間に捕らわれそんな状態ではどうする事も出  
来なかった。カズヤ「うつ、ぐつ・・・ぐはあ」3人のカズヤに対  
する暴行は続く・・・そして、その光景を見ながらカンナヅキ自身  
はサテラの破れた服の部分から胸などをさわりながら楽しんでいた。  
カンナヅキ「フフフツツ、いい光景ね！！しかし、いい胸の触り  
ごごちじゃない。これで、接触禁止の女王だなんてもつたいたいわ  
あ~~~~！大丈夫から触られる事の快感を教えてあげる」サテラ  
「アツ・・・やめて・・・やめて」よわよわしい声でつぶやく  
が、それを楽しむかのようにカンナヅキの制裁は続いた、そしてそ  
れはエスカレートしていった。

場所は変わり校内、女子生徒「おはようございます！シフォン会長」  
女子生徒達「おはようございます」シフォン「おはよう、みなさん」  
シフォンはいつものように笑顔で挨拶を返していると、そこに・・・  
・テイシ 「会長ー」シフォン「うつ？」後ろから1人  
の男子生徒を引き連れテイシ が走ってきた。シフォン「どおうし  
たのテイシ ？そんなに慌てて？」するとテイシ の後ろにいた男  
子生徒が駆け寄ってきた。アーサ 「大変なんです！屋上で接触禁  
止の女王と3年生がっ・・・うつ戦いを初めちゃって」シフォン「何  
ですって！！！！」アーサー「しかも、カズヤも巻き込まれちゃっ  
てて」その言葉を聞いた瞬間シフォンとテイシ のは走り出すと急  
いで屋上に向かう。その頃、屋上ではカンナヅキとリミッタ に

よるサテラとカズヤに対する暴行が続いていた。ヒイラギ「酷い、これは幾らなんでも酷過ぎる・・・」あれから大分時間が経つがカズヤに対する暴行は続いていた、額は切れそこからは血が滲み、顔にはそれほど目立った外傷はないがそれでもだつた。そして、サテラ自身もほとんどの服はきざまれカナンナツキの恥辱に絶えていた。サテラ「うっ・・・うっうっ」懸命に涙を堪えるしかサテラには出来なかった。すると、突然カナンナツキが動きを止めるとリミッタを呼ぶ、カナンナツキ「さあ、仕上げよ！今のこの女の映像をばらまきなさいヒイラギ」えっ・・・「サテラ」なあ・・・やめて・・・「そんなサテラの言葉を聞かずリミッタ達を携帯を取り出し四方から写真を撮り出した。ヒイラギ「くっ・・・くっうっうっうっうっ」ヒイラギは怒りを必死に抑えていた。本当ならば今すぐにも飛び出してあいつらをぶっ飛ばしてやりたい、しかし今のヒイラギではどうすることも出来なかった、そんな自分が情けなかった・・・しかし、この時カナンナツキ達は気付いていなかった決して敵に回してはいけない男を敵に回した事に。カズヤはサテラが暴行されているのを見ながら聖也の言葉を思い出していた。聖也「いいか、カズヤ目の前で女が泣いていたら必ず助ける！例え力がなかつとも目の前で泣いている女を見捨てる男にだけは絶対になるな。お前の力は誰かを守る力なんだから！いいな、絶対だぞ」カズヤ「・・・そうだよな！聖也兄さん」その瞬間屋上に凄まじい衝撃が走る。シフォン「はあ、はあ、はあ、アオイ君どうか・・・」テイシ「はあ、はあ・・・カズヤさん」アサー「は、早い！！！！！」そして、シフォンが屋上の扉を開けた瞬間凄まじい衝撃破が襲いかかった。シフォン「きゃあぁあぁあぁー」あまりの衝撃にシフォンは吹き飛ばされる。テイシ「会長ー、くっ」吹き飛ばされたシフォンをテイシ「が受け止めるがテイシも一緒にしたまで飛ばされる、そしてまるでタイミングを測ったようにアサーにぶつかると2人はアサーをクッションにして立ち上がるとさかさず屋上の外に向かう。するとそこには・・・シフォン「これは

・・・一体「テイシ」「会長!!!」「シフォンとテイシ」が見たものは服が破けてボロボロになり、泣いているサテラとそしてそれを囲むカンナツキと男子生徒、そして額から血を流し服がボロボロになりながら立つカズヤの姿だった。カズヤ「・・・離れる・・・サテライザー先輩から離れる」カンナツキ「フツ、離れるですって・・・口の聞き方には気をつけなさい!どうやってフリージングを解いたのかわからないけど!もう一度膝待つかせてあげるはー、お前達」リミッタ 3人「はい!!!フリージング」再びフリージングを展開しようとした瞬間3人は目を疑ったリミッタ A「あれ、いない」リミッタ B「どこに・・・」リミッタ C「馬鹿な・・・どこに行ったー」カズヤ「ここだ」3人「えっ」その声を聞いた瞬間3人の身体が四方へ吹っ飛びリミッタ A「ぎゃあああー」リミッタ B「痛いよー」リミッタ C「痛いよー」リミッタ C「あつあああああー」3人と壁に叩きつけられ痛みのみあまり絶叫していた。シフォン「いつの間に・・・」テイシ「なんなの今は」ヒラギ「うっ・・・ごく」改めて3人はカズヤの規格外の強さに寒気を覚える。その時屋上の扉が開かれるとキムとエリズが入ってきた。キム「どうしたんだ!」エリズ「さっきの衝撃は何?」シフォン「キム先生、エリズ先生」キム「どうしたんだ?」シフォン「あつ、ああ」シフォンが振り向いた先を見るとそこには明らかに重傷の男子生徒とサテラとカンナツキ、そしてカズヤがいた。エリズ「どうして、カズヤがあそこに?」キムもエリズも何が何だか分からなくなってきた。しかし、そんな2人よりも混乱していたのがカンナツキだった。カンナツキ「なんなのこいつは・・・」あまりに事に言葉を失っていた。しかし、彼女は気付いていなかった自分がもう1人怒らせてはいけないう人間を怒らせていた事を。カンナツキ「うっ!!!」「強い殺気に後ろを振り向いた瞬間カンナツキの悲鳴が上がる。カンナツキ「いやああー、あつああやめて」サテラ「うをおおー」怒りがおさまらないサテラは容赦なくカン

ナツキに攻撃をしかける、そこには情けなでは一切なかった。あまりに突然の事に周りの人間はどうする事も出来なかった。そしてサテラはカンナツキを馬乗りになるとポルトウエポンを上にあげたまま止まっていた。カンナツキ「お願い・・・もう許して・・・」カンナツキが必死頼むがカンナツキを見据えているサテラの瞳はどこまでも冷たかった。キム「まずい！！」エリズ「くっ」2人がポルトウエポンを展開し、止めに入ろうとした瞬間カズヤの声が響くカズヤ「いけないー」その叫びと一緒にフリージングが展開される。全員「ええっ！！！！」あまりの事に全員が驚いてるのをしり目にカズヤはサテラに話しかける。カズヤ「それ以上は駄目です、サテライザー先輩！確かにカンナツキ先輩とこの人達が生じた事は許せる事じゃない。それは僕も同じです・・・だけど、あなたの、いいやあなた方パンドラの力は大切な人を守る力です。決して誰かを傷付ける者じゃない。どうか、カンナツキ先輩を許してあげて下さい」キム「カズヤ・・・」シフォン「アオイ君」サテラ「・・・」するとサテラはカンナツキを解放すると立ち上がり歩き出す。エリズ「テイシ、すぐに救護班を呼んで来てくれ」テイシ「はい！！」キム「サテライザー・L・ブリジット、お前は教官室だ！付いてこい」サテラ「・・・」サテラはその言葉に何も言わず従う、カズヤ「サテライザー先輩、ありがとう助けてくれて」サテラ「・・・」サテラは何も言わず屋上を後にする。エリズ「アオイ・カズヤお前も後で教官室に来い！詳しい話はそこで聞く」カズヤ「・・・はい」カズヤは頭を下げながら答えた。エリズ「だが、その前に保健室来い！いいな」エリズは笑顔で答えると屋上を後にする。こうして、この騒ぎは幕を閉じた。しかしこの時、少し離れた別の校舎の屋上から1人の少女が今の騒ぎを見ていた。アティア「接触禁止の女王」その表情は明らかに不快感を表せていた。

## アクセルターン（後書き）

サテライザーって書くの大変なんで途中からですがサテラにしました

## 特異体質

カズヤ「フリーー……ハッアアー」カズヤの気合の声とともに蒼い光が校庭の広範囲に広がる。(フリージング)リミッタと呼ばれる少年達がパンドラである少女達と洗礼を行う事によって初めて使える能力である。しかし、カズヤはまだ誰とも洗礼をしてはおらずフリージングが使えるはずもない、なのになぜカズヤがフリージングを使えるのかそれは数日前の事である……

(一週間前)

屋上での騒ぎの後、カズヤはゼネティクスにあるメディカルセンタ―で自分の身体を検査していた。エリズ「カズヤ！今からCTスキャンを撮るから動くなよ」別室にいるエリズの声がスピーカーから聞こえた。カズヤ「……コク」カズヤは頷いて返事をする、何故このような事になっているかと言うと先ほどの屋上の騒ぎの中でカズヤがフリージングを使った事にあつた、洗礼をしていないリミッタがフリージングを使えるのはあり得ない事なのだ。カズヤ自身も何故そうになったのか知りたいと言う事もあり身体の検査をする事になったのである。エリズ「よし！OK撮れたわ、カズヤ起きても大丈夫よ」カズヤ「はい、わかりました」そういうとカズヤは装置から身体を降ろす。エリズ「それじゃ、着替えてらっしゃい！その間に調べておくから」カズヤ「わかりました」カズヤは部屋の中にある扉から外に出る、そしてそれを見送るとキムが口を開いた。キム「それで、検査の結果はどうなんだ？」エリズ「まあ、さすがはアオイ・カズハの弟って事かしらね……」キム「どういう意味だ？」エリズ「そのままの意味よ、カズヤもカズハと同じように特異体質なのよ」キム「何だって！！！！」エリズ「知ってのとうり、通常リミッタがフリージングを使うにはパートナーであるパンド

ラから洗礼を受け聖痕のカケラを移植する必要なのよ、そしてそう  
する事によってイレインバーセツトをした時に、フフツ！あれと同  
じ感覚を得る事によって五感を共有出来るのよ」キム「何を今さら、  
そんな事1年生でも知ってるわよ」キムが興味なさそうに答えた。  
しかし、エリズの次の言葉に耳を疑う。エリズ「カズヤもカズ八と  
同じように聖痕体なのよ！」キム「なつ、ちよつと待ってカズヤは  
男なのよ」エリズ「まあ、男というのは置いて！キムも知って  
いるように通常パンドラが聖痕を熟成出来るのは2個から3個、だ  
けどカズ八20個以上の聖痕を熟成出来た。しかも驚く事にカズ  
ヤの骨格は30%以上が聖痕組織で形成されているのよ。キムはそ  
のデータを見て驚きを隠せなかった。キム「どうやったらかんな身  
体に・・・」エリズ「カズ八と同じ理由なのかは分からないけど、  
とりあえず言えるのはカズヤのフリージングはかなり強力な物よ、  
下手をすればノヴァレベルの力よ」キム「何だと！！、ノヴァレ  
ベル、そんな事が」エリズ「普通ならありえないは、ノヴァレベル  
のフリージングなんて人間技じゃないは。だけど生まれながらの聖  
痕体の身体とカズヤの強靱な精神力がそれを可能しているんだは」  
キム「ハア~~~~、全くなんて規格外な！困った弟だな」エリ  
ズ「えっ？弟って？」キム「あつ、実は今日カズヤが私の事を姉さ  
んって呼んでくれたんだよ。それが、嬉しくてな」エリズ「へへ  
へ、よかつたじゃない！私も呼んでもらおうかしら」そして、そこ  
に着替えを終えたカズヤが入ってきた。そしてエリズから大まかな  
説明を受け、自分の身体の秘密を知ったのだ。そして時間は戻り・  
・・・

（校庭）

そして、あれから今日までカズヤはこの力を意識して出せるように  
特訓してきた結果まだ完全ではないがフリージングを意識して出せ  
るようになっていた。それでも一般のリミッタのフリージングと  
比べてもその威力と範囲は強力なものだった。カズヤ「よし、今日

はこれくらいにしよう」カズヤが特訓を終わったとの同時に後ろから声が聞こえた。キム「よし、今度は私達の特訓だな」エリス「ええ、今日でやってみせるわよ」そこにはシュバリエの騎士の証である戦闘服を着たキムとエリスがいた。どうして、ここに2人がいるかとゆくと、これがカズヤの処罰だからだ。サテラは度を行き過ぎたという事あり1週間独房という罰が与えられたのだがカズヤの場合リミッタ が処罰されるなど前例がない為キム達に一任され、そしてキム達がカズヤに言い渡した処罰は自分達に戦闘もしくはそれに近い事を教えると言うもので、カズヤ自身生徒が教官に教えるのはまずいのではと言ってみたのだが、2人は気にするなと言われ、結果気の引き出し方を教えると言う事になり今日まで2人はカズヤにそれを教わっていたのだ。カズヤ「今日は早いですね、キム先生、エリス先生」カズヤが振り返り2人に話しかける、するとキムが・キム「カズヤ、今は学業とは関係ないんだ！姉さんだ」カズヤ「あっ・・・ハハア」カズヤは苦笑いするしかなかった、エリス「はいはい、それじゃ始めましょうよ」キム「ああ」カズヤ「はい、それじゃ！まず気を引き出して下さい」キム・エリス「ああ」すると2人は全身の力を抜きリラックスさせると両手を前に持つてくる。気を一点に集中させる。すると2人の手のなかに小さな光が出てきた。カズヤ「うん、もう気の出し方は大丈夫ですね」キム「ああ」エリス「何んとかね」2人とも余裕と言わんばかりの笑顔で答えた。カズヤ「本当によく一週間でここまで、すごいです！それじゃ試してみてくださいようか！キム姉さん、エリス姉さんポルトウエポンを展開してください」キム「わかった、ポルトウエポン展開」エリス「ポルトウエポン展開」そして2人は月狼とドッペルゲンガーを展開する。カズヤ「それじゃ、気をポルトウエポンに纏わせて下さい、そうですね感覚的には貼り付けるようなイメージですかね」エリス「貼り付けるね」キム「とにかく、やってみよう」エリス「そうですね」2人は先ほどと同じように集中させ気を具現化させる、そしてカズヤのイメージの感覚でポルトウエポンに気を纏わせる。する

と明らかにボルトウエポンの雰囲気が変わっていた透明な光が包んでいたのだ。キム「すごいな、なんかうまく言えないが・」エリス「そうね、確かに」2人とも新たに得た力に喜んでいた。するとキムが月狼の威力を試したくなったのか、軽く振ろうとしたのをカズヤが止める。カズヤ「キム姉さん、ダメ」キム「えっ、何でだ？」カズヤ「まだ、姉さん達はようやく気を引き出せるようになっただけでコントロールはまだ完全じゃないんだ。だから、力の加減が出来るんだよ。とにかく気を纏わせた武器はかなりの威力が付いてるんだ、むやみにふるっちゃいけない」キム「わかった、すまない」エリス「今度、時間つくって安全な所で使ってみましょう。カズヤ、それなら大丈夫よね」カズヤ「はい！」エリス「それまでは、私達も特訓しましょう、もう今日でカズヤとの特訓も終わりだし、後は自己練習よ」キム「ああ、そうだなフフツツ」そして朝日が昇る。キム「そろそろ、戻るか」エリス「ええ」カズヤ「はい、あつ・・・キム姉さん」キム「何だ？」カズヤ「えっと、サテライザー先輩は・・・」エリス「あつ・・・」キム「・・・今日の夜にはあいつの処罰も終わる安心しろ」先ほどとは違い少し怒気がこもった声だったが、カズヤは、カズヤ「良かった・・・それじゃ、戻りましょ・・・」うつ「カズヤの表情が変わる、エリス「どうした、カズヤ？」カズヤの変化に気付いたエリスが話しかける。カズヤ「風の精霊がすこし、今妖気の気配を・」キム「何だって！！！！」エリス「大丈夫なのか！！」2人の問いかけにカズヤは少し黙ると不意に口を開ける。カズヤ「お2人は先に戻って下さい！僕は少しこの辺りの山の中を調べてきます」キム「駄目だ！！！！危険すぎる」エリス「そうだ、私達も一緒に行くぞ」カズヤ「大丈夫です、必ず戻って来ますから。信じて下さい」キム「あつ・・・」エリス「カズヤ・・・」その言葉に2人は何も言えなかった。カズヤ「少し、遅くなるかもしれませんが！いつてきます」そうするとカズヤは風を纏いその場を後にする。キム「くうー」キムが悔しそうに拳を握る、するとエリスが！エリス「信じましょう、私達の自慢の弟を」



ツド」……！！！！」その名を聞いた瞬間イングリッドの表情  
が変わる。アティア「それじゃ、よろしくね」そういつとアティア  
その場を後にする、そして帰りながらつぶやく。アティア「イング  
リッド、やりすぎなければいいけどフフ」ミヤビを倒したサテラに  
たいする3年生の制裁が開始された。

## 秩序の守護者

カズヤ「この辺りから感じたんだけど・・・どこだ！」キム、エリズと別れ後カズヤは光学迷彩して姿を隠しながら空から妖気を探っていた。カズヤ「急がなきゃ、夜になれば探しにくくなる」そういうとカズヤはその場所を離れ別の場所へ移動する。しかし、その時茂の中に隠れ息を潜めていた3体の妖魔がいた。火車「行ったか・・・」火鼠「何とか見つからずすんだようだな」化蛇「しかし、隠れる必要があったのか！あの程度の精霊術師など我ら3人おれば」火車「愚か者、あの鶴をたつた1人で倒したんだぞ！今の我々では一瞬で消されるだけだ」化蛇の発言に巨大な猫の様な姿の妖魔が吠えた。火鼠「落ち着け火車、気配を感じとられるぞ」火車「ううっ・・・すまん」火鼠「とにかく、今はまだ隠れ家が見つかるのは不味い！窮奇様もまだ完全ではないのだから」火車「ああ・・・わかつている」化蛇「これから、どうする？奴をつかるか？」火鼠「イヤ、奴わどうやら風の精霊を使っているようだ、うかつに近づけば見つかってしまう。とにかく今はこの事を窮奇様に伝えるのが先だ」火車「そうだな！急ぐぞ」化蛇「承知した」そして、火鼠達はその場を後にしする、しかしこの時火車達は気付いていなかったその場を離れた時蒼き風が吹いた事を。

場所は変わりゼネティックスから少し離れた場所にある独房、その廊下をキムは歩いていた。この独房は学園内で問題を起こしたパンドラ及びリミッタ を収監し反省をさせる場所である。そしてキム1人のパンドラを出す為に独房の中を歩いていた。そして1番奥にある部屋に辿りつくくと足を止める。キム「1週間ぶりだな、出ていぞ」そこには暗闇の中地面にすわるサテラの姿があった。サテラ「・・・」本来どんなパンドラでもこの独房から出られれば表情が変わっているものなのだが、サテラの表情は1週間前と

変わらず怯えや恐怖といった感情が一切なかった。そしてキムが力ギにパスワードを打ち牢を開ける。キム「運がよかったな、カンナツキ・ミヤビは幸い命に別条はなくパンドラとしても正常に戻るそうだ。もしも死んでいればこの程度ではすまされなかったぞ、だが次はない今度なにか起せばその時は私達手を下す事になる覚えておけ」そういつてキムがその場を立ち去ろうとするとサテラから言葉が発せられた。サテラ「そんなに強いんですか・・・」サテラの挑発するような言葉にキムの雰囲気が変わる。キム「なら味あわせてやるつかその身体に今ここで」淡々と喋りながらも含まれている殺気は尋常を遥かに超えるものだった普通なら気絶してもおかしくない殺気にサテラは平然としていた。キム「こいつ・・・全くおびえていない」サテラの瞳はなんの感情もなくただキムを見据えていた。キム「というのは嘘だ！いくらお前が問題を起こそうと、そしてお前自身がどうなるかと私にはどうでもいい事だ・・・だが、もしもお前が起したくだらな事でカズヤに何かあればその時はただではすまさない。お前の命をもって償わせる」サテラ「ウツ・・・」その時一瞬だがサテラの表情が変わったのをキムは見逃さなかった。そして、サテラに背を向けると先に独房を後にする。キム「カズヤお前ならもしかしたら・・・」フツ早く帰ってこい「今だ帰らぬ弟心配し空を見上げていた・・・」

キムが出てから少し立ってから独房を後にした桜の咲き誇った道を歩きながら女子寮を目指していた。すると不意に歩みを止める。サテラ「誰だ・・・」その言葉に反応したように桜の木の影から1人の少女が出てきた。イングリッド「サテライザー・L・ブリジット」そういつとイングリッドはサテラの前へと歩み立ち止まる。サテラ「お前は」イングリッド「お前と随分だな上級生に向かつて、イングリッド・バーンシュタイン3年生だ」サテラ「負け犬の尻拭いか、ご苦労なことだな」その瞬間サテラはボルトウエポンを展開し矛先をイングリッドの首筋に向ける。しかし、とうのイングリッドは冷

静だった矛先をどけると再び歩きながら話を始める。イングリッド「あせるな、何も今ここでお前をどうしようとするわけではない。」サテラ「……」イングリッド「周りの人間は私の事を秩序の守護者と呼ぶ、何故か判るか！」サテラ答えない。イングリッド「フツ、簡単な事だ私は今まで秩序を乱してきた者達を全力で罰してきたお前のような者達を、それが私のパンドラとして貫かなければならない使命だからだ。明日の午後までにリミッタを探しておけ！やる以上は全力で潰す当然リミッタもだ。」そういうとイングリッドはその場を後にする。そしてサテラもボルトウエポンを終い歩き出した。しかし、2人以外にもう1人この場にいた人間がいた。ヒイラギ「どうしよう……と、とんでもない事を聞いてしまったかも」看板の後ろに隠れていたヒイラギが話を聞いてしまったのだ。ヒイラギ「とにかく、アオイ君に知らせなきゃ」ヒイラギも急いでその場を後にする。そして、サテラと別れたイングリッドも歩きながらある事を思い出していた。イングリッド「マリン、私は秩序を乱すものを許さない！あの時だって本当なら君は……」クツ「拳を握り締めイングリッドも歩みを早める。」

場所は変わり山の中、その山道を火鼠達は隠れ家に向かい走っていた。その時化蛇が先頭を走る火鼠に話しかける。化蛇「おい、火鼠一体どこに向かっているのだ！アジトへの道はこの方角ではないぞ」火鼠「……」火鼠は何も答えずただ走り続ける。その態度に化蛇が吠える、化蛇「貴様……」話を聞いているのか「……」化蛇の怒りが爆発する。すると先頭を走っていた火鼠が急に立ち止まるとそれに合わせるように火車も走るのを止める、そして2人同時に後ろを振り向くと化蛇を見つめる、突然の火鼠達の行動に化蛇に緊張が走る、そしてその瞬間火鼠と火車が妖気を放出させると黒い炎を造り出すそしてその炎を化蛇に向け放つ、化蛇「や……やめろ……」突然の攻撃になすすべもなく消滅するのかと目を瞑る、しかしいつまで経っても衝撃は来





じゃなかったのよ！アーサー、アオイ君はどこにいるの」「アーサー「さあ〜な、今日はまだ見かけてないんだよ。朝からどこかに出かけたみたいでさ」「ヒイラギ「そんな〜、この緊急な時に、もう〜」」「アーサー「一体どうしたんだよヒイラギ？」「アーサーの言葉で少し落ち着きを取り戻したヒイラギは先ほどの事をアーサーに話した。アーサー「それマジかよ！」「ヒイラギ「当たり前よ、こんな事冗談で言えないわよ！あ〜もうどうしよう」「アーサー「確かイングリッド先輩は3年生の学7位強さだけで言えばミヤビ先輩より遥かに上だ、しかもリミッタも一緒となればリミッタのいない接触禁止の女王に勝ち目はない」「ヒイラギ「そうなのよ、だから絶対接触禁止の女王はアオイ君に頼みにくるはず、ああ〜」」「もうどうすればいいのよ」「アーサー「ならちようどいいじゃん」「ヒイラギ「えっ？」「アーサー「下手にカズヤに伝えたら自分から志願してリミッタになりに行こうとするかも知れないだろう。なら下手に伝えないほうがいい、カズヤの安全を考えるなら」「アーサーの言葉に一瞬ヒイラギは思考を停止するがすぐに戻すと、ヒイラギ「確かにそうね、なんだ焦って損したは！ハア〜」」「アーサー「ヒイラギらしくないな！」「ヒイラギ「そうね、……邪魔いたわね」「ヒイラギが部屋を出ようとすると不意に腕を掴まれた。ヒイラギ「えっ？」「振り向くと満面の笑みを浮かべながらアーサーが答えた。アーサー「頼むヒイラギこれ教えてくんない」その瞬間ヒイラギの額に青筋が浮ぶと怒声が響く。ヒイラギ「自分でやんなさい〜」」「男子寮にヒイラギの声が響いた。

そして場所は変わり2年生の女子寮、サテラの部屋！サテラは部屋に戻るとすぐに浴室に入りシャワーを浴びていた。サテラ「……」  
「……」浴室の中でサテラはイングリッドの言葉を思い出していた。イングリッド「明日の午後までにリミッタを見つけておけ、いいな」その言葉を思い出すと少し胸が痛かった、なぜなら自分のリミ

ツタ になつてくれる男子がいる訳ないからだ。周りの生徒から自分がどのように思われているか十分自覚している。そしてなにより、男に触れられると忌まわしいあの感覚が蘇ってくる。サテラ「クウ・……」その瞬間サテラは自分の身体を抱きしめる、忘れたはずなのに決して消えることのないこの忌まわしい光景。そしてそれを振り払うように早々に浴室を出る、バスタオル1枚を捲いて浴室からサテラの格好はとて10代の少女とは思えぬものだった。発育が進み過ぎた豊富な胸に白い肌、普通の男ならイチコロである。しかし、サテラは身体目当ての男も嫌う1年前の事もそれが原因なのだから。サテラ「私はパートナーなんて必要な……あつ……」その瞬間1人の少年を思い出す！自分を恐れず接して来てくれた少年、そして触れても全然いやじゃなかった少年の事を。サテラ「もしかしたら、あの子なら……私の……ハッ」サテラは言葉を途中で止め先ほどの事を忘れるように頭を振り払う。サテラ「私にパートナーは必要ない、私は1人でいい……」そしてバスタオルを脱ぎすて着替えテーブルに置かれた眼鏡を付ける。その時のサテラの瞳は先ほどの10代の少女の瞳ではなく完全に戦う者の瞳だった、そして部屋を出るとある場所に向かう。

カズヤ「不味いな、すっかり夜になっちゃったよ。随分手間どったからな」夜の空を飛びながらカズヤはゼネティックスを目指していた。カズヤ「だけど、あいつが言っていた主とは一体何なんだ……」カズヤには火鼠が最後に言った主の存在が気がかりだった。カズヤ「ちよつと、調べてみる必要があるそうだな」そういいながらカズヤはスピードを上げる。

3年生の女子寮、イングリッド「……」イングリッドは女性用の白いスパッツとタンクトップの格好で自身の部屋の窓から外を眺めていた。すると不意にイングリッドが話始める。イングリッド「我々パンドラはシュバリエの候補生だ。いずれこのゼネティッ

クスを卒業し前線に出てノヴァという驚異と戦わなければならない、当然それは命掛けの戦いになるそれはパンドラ全員に言えることだ。しかし、どんな状況に置いても厳格な上下関係があれば勝手行動し仲間を危険に曝すことも無駄死にする事も少なくなる、これが私の考えだ！お前はこの心理の意味をどう考えるサテライザ・L・ブリジット」イングリッドが視線を後ろに向けるとそこにはいつのまにかサテラが立っていた。サテラ「リミッタ のいない私がリミッタ のいる貴様を倒すにはリミッタ が離れた時を叩くそれが私の答えだ」そしてつけている眼鏡をはずすとその瞳は真っ直ぐにイングリッドを捉えていた。その瞳を見て納得したようにイングリッドも答えた。イングリッド「そうか」そして次の瞬間サテラが一気にイングリッドとの間合いを詰めると攻撃を仕掛ける、イングリッド「フンッ」イングリッドはその攻撃を最小限の動きで交わすとサテラの顔を掴むと身体ごと窓ガラスのある壁に叩きつける。そのあまりの衝撃に壁が吹き飛び砂塵が上がる、そして砂塵が晴れるとそこから顔を鷲掴みされたサテラとそのサテラを片手で持ちあげているイングリッドが出てきた。いくら女性とはいえパンドラを片手で持ち上げるなど並のパンドラでは出来る事ではない、この時点でイングリッドがどれほどの実力者なのかを示していた。サテラ「クッ・・・ウウ・・・」必死に腕を外そうとするサテラにイングリッドは淡々と告げる。イングリッド「私は言ったはずだ、リミッタ と共に全力で貴様を罰するとな、リミッタ がいなければ貴様が勝てるチャンスがあるとでも思ったか！自身過剰だな、なめるな」サテラ「クッ・・・」しかし、その瞬間サテラは身体を揺らし反動を付けるとその勢いでイングリッドのアゴに蹴りを入れる。イングリッド「グッ！」サテラの突然の攻撃に思わず手を離してしまう。解放されたサテラは一回転し地面に着地する。サテラ「ハア、ハア・・・ウッ」そして先ほどの場所を見つめる、イングリッド「やるじゃないか、ずいぶんおもしろい真似をしてくれる」サテラ「クッ！！」「イングリッド」「フフ、では試させてもらおうか！カンナツキ・ミヤビを

瀕死に追い込んだ力と貴様の二つ名接触禁止の女王の実力を。ボルトウエポン展開ディバイン・トラスト、行くぞ下級生」不敵な笑みを浮かべイングリッドはサテラを見据える。サテラ「ボルトウエポン展開ノヴァ・ブラッド、ふん下級生だからどうした本来なら私は17だ！お前を先輩と呼ぶ必要がどこにある」イングリッド「そうか、行くぞ、サテライザー」サテラ「ハアアア」それぞれの譲れぬ信念の為に今、接触禁止の女王と秩序の守護者が激突する

テンペスタ・ターン・友の本当の想い（前書き）

難しい



浮かべ再び戦闘に目を戻す。マーク「これで、確実に接触禁止の女王の敗北は確実ですね」アティア「そうね、あの女のリミッタになる人間なんている訳ないもの。フフフ」

イングリッド「ホォー、スピードが上がったか」サテラのアクセルのスピードに少し驚く素振り見せたもののイングリッドの動揺はない、むしろ冷静なまま両目を閉じた。サテラ「ムウ……」その行動のいとに気付きさらにスピードを上げ破動音をさらに発し、その勢いのままイングリッドの左辺から攻撃を放つ。生徒達「ああ！！！！！！」アティア「無駄よ！！！！」そして、サテラの攻撃が放たれた瞬間何かが砕ける音が響いた。サテラ「なあ！あああぁ……」サテラ自身も驚愕していた、確実に捉えたであろう思っていた自身の攻撃をイングリッドは自身のボルトウエポンの根の部分で受け止めていたのだ。サテラ「くう……」態勢を立て直すためイングリッドから距離をとる。そして、イングリッドは閉じていた目を開くと静かに口を開く。イングリッド「なるほどな、貴様はどうやらオンリーアクセルタイプのような！2年生でここまでのスピードを出せるのは大したものだ。カナツキ・ミヤビ倒したのも頷ける。だが……貴様今使っているアクセルは3年生なら誰でも使う事で出来るハイエンドスキルの中でも基礎中の物だ。つまりだ……さらに上のハイエンドスキルを習得している相手には何の意味も持たないということだ。テンペスターン」その瞬間イングリッドの身体が揺れると3体の分身が出現する。サテラ「なあ！！！！！！」イングリッド「行くぞ」3人のイングリッドが一齐に動きだす。

(テンペスターン)パンドラが使用できるハイエンドスキルの1つである！自身の負荷を分身に変換する事により多方向同時攻撃を可能としたスキルである。速度こそはアクセル系のスキルには及ばないが決して遅いわけではない。1体多の状況を容易に作り出せるため個人戦などにおいては無類の強さを発揮する。

サテラ「くっ!!!」懸命にイングリッドの姿を捉えようとするが、アクセルとは違い実際に分身体が同時に現れる為攻撃を予測できない。こういう時に多少の経験があれば何とかなったのかもしれないが、いかにせん2年生のサテラではそれは無理だった。そうこうしている内にイングリッドの動きが激しくなり3体の分身達が同時に多方向から攻撃放たれる。イングリッド「ハッ!!!」。「タァーイー」。「フナー」。「ハァー」。「デヤァー」。「イングリッドの棍がサテラの腹、脇、足、背中そして最後の一撃が顔に当たるかと思われた時、サテラ「くう!!!!!!ハァァァァァ」倒れそうになる痛みを堪え顔面への攻撃を弾き返す。この攻撃にさすがのイングリッドも弾かれ距離をとる・・・サテラ「ハァ、ハァ、ハァ・・・ぐううう」最後の一撃は何とか交わしたとはいえ残りの4発は的確に急所に命中していたためダメージはかなりの物だった。しかし、そのような状態でもサテラの戦意は失われていなかった、ボルトウエポンを構えイングリッドを見据える。イングリッド「ホ~~~~、最後の一撃を弾くだけではなく・・・仮にも4発も私の攻撃を喰らい尚且つ立ち上るとは大したものだな!賞賛に値する」周りの生徒達・・・男子生徒1「すげ~~~~、あの接触禁止の女王が子供扱いかよ」男子生徒2「やつぱり、3年生はすげえ・・・」女子生徒3「次元違う!!!!」女子生徒4「これが、ハイエンドスキルを習得したパンドラの力」観戦していた生徒達から声がこぼれる。マーク「どうやら、終わりそうですねアティア先輩!まあ、頑張ったんじゃないですか」アティア「そうですね、むしろよく耐えたと褒めてあげるは。フッフ」そして、戦闘の途中から騒ぎを聞きつけて戦闘を見ていたアーサとヒイラギもイングリッドの強さに改めて実感していた。ヒイラギ「やつぱり、3年生はすごい!あの接触禁止の女王をあんなに簡単に」アーサ「ああ、実力どうこうとかの問題じゃない・・・レベルが・・・次元が違い過ぎる」ガネツサ「当然ですわ!イングリッド先輩には負けれない理由がありますもの」後ろからガネツサが2人の2年生

と一緒に現れたアーサ・ヒイラギ「ガネツサ先輩」ヒイラギ「それに、2年生のチロル先輩、バージニア先輩」ヒイラギとアーサは2人に頭を下げる。チロル「いいのよ、堅苦しくしなくて」バージニア「ええ、そうよ」2人とも笑顔で答えるとすぐに外を眺める。・・・その目はイングリッドを見つめていた。バージニア「イングリッド先輩・・・」チロル「まだ・・・」2人ともイングリッドを見つめる表情にはとても悲しい表情だった。ガネツサ「しかたありませんは、私達ではどうする事もできないのですから・・・」2人ともガネツサの言葉に何も言えなかった、確かに自分達は無力だ・・・自分達ではイングリッド先輩の凍った心を解かす事は出来ないのだから。アーサとヒイラギは3人の話をただ聞いていた。すると広場に動きがあった、レオ「イングリッド先輩、大丈夫ですか!」イングリッド「レオ、どうして?」レオ「マークから連絡があつたんです、どうして呼んでくれなかつたんですか!僕はあなたのパートナーなんですよ」レオが口調を強くしてイングリッドに語る。イングリッド「・・・すまなかつた、許してくれ」レオ「もう、これつきりですよ」そして、2人はサテラを見据える。イングリッド「これで、貴様の勝機はまんじもなくなつたぞ。私はリミッタを探す猶予を与えた、だがそれを不意にし挑んできたのは他ならぬお前自身だ」サテラ「・・・」サテラは何も言わない、だがイングリッドの言葉は紛れもない事実だからだ。イングリッド「良く聞け、最後にチャンスをやろう!都合のいい事にここは1年生の男子寮だ。もしこの中からお前のリミッタに志願するものがあるのであればそいつと洗礼するまで待つてやる。」イングリッドの言葉に1年生が騒ぎ出す。男子生徒6「おいおい、マジかよ・・・」男子生徒7「無理に決まつてんだろ!!」男子生徒8「殺されちまうよ!!!」男子生徒9「冗談だろ!!!誰もいねーよ」男子生徒達から拒否する声が響いた。サテラ「・・・」サテラはその言葉をただ聞いていた、自分の評判の悪さはわかつているからだ。自分のリミッタになつてくれる子なんて・・・」

イラギ「もう、情けないわね!!」あまいの男子のヘタレさにヒイラギは激怒していた。アーサ「無茶をいうなよヒイラギ、みんな接触禁止の女王が怖いんだ。触れた瞬間何をされるかもわからないし、接触禁止の女王自身に近づけない雰囲気が出てるんだ」ヒイラギ「そうだけど……」ガネツサ「ここまで嫌われると気の毒ですわね」チロル「ハハハ、確かに」バージニア「でも、本当不味いわよ!レオが合流した以上……もう彼女に勝ち目は無い」アーサー「ウツ……」ヒイラギ「くう……」

それから数分が過ぎたが、名乗り出るものはいなかった、イングリッド「どうした、この女のリミッタ になろうというものはいないのか」イングリッドの言葉に誰も何も返さない……、イングリッド「ずいぶん嫌われたものだな!だが容赦はしない、行くぞレオ」レオ「はい」サテラ「くう……」

再び戦闘が始まろうとした瞬間広場に声が響く、カズヤ「待つて下さい」イングリッド「うっ」レオ「何だ?」サテラ「……」アーサー「今の声……」ヒイラギ「まさか……」2人はこの声の主が誰なのかすぐにわかった。チロル「誰?」バージニア「何なの?」ガネツサ「はあ……、またですの」イングリッド「誰だ、そこにいるのは?」明りのない暗闇の場所を見据えイングリッドが答える。そしてその場にいる全員がその1点を見つめていた。そして、その言葉に合わせるようにゆっくりと足音が聞こえてくる、暗闇を照らす炎のように彼は現れた。カズヤ「僕がサテライザー先輩のリミッタ になります」

戦闘が始まる少し前、ようやくゼネティックスに到着したカズヤは一応キム、エリズの戻った事を伝えにいかうとした時風の精霊が反応をさたのだ、そして騒ぎは1年生の男子寮で起きていた。カズヤ「何だろう?」カズヤは男子寮へ向かう。そして、サテラとイングリッドの戦闘を見つけたのだ。イングリッド「誰かいのか!こいつのリミッタ になろうというものは」誰も反応を示さなかった、

そしてその時のサテラの顔は何の感情も持っていないかったが、カズヤに寂しそうに見えた・・・そう、かつての自分のように・・・そして躊躇はなかった。カズヤ「僕が、サテライザー先輩のリミッタ になります」

そして、時間は戻る！カズヤはゆっくりと歩きながらサテラの元に向かっていた。そのカズヤの姿に全員の視線が向けられていた。ヒイラギ「アオイ君！！」「アーサー」「カズヤ、っていうかなんであんな格好してんだ？」カズヤの今の格好は朝の鍛錬の格好だったため黒のノースリーブのような服に軽い素材のちよつと青がはいったズボンを履いていた。チロル「あの子は・・・」「バージニア「誰？」2人は突然現れてカズヤに驚いていた。この2人がカズヤを認識していないのには理由がある。1カ月前の戦いにおいて中には気絶していた者達もいたからだ2人はそれに当てはまる為カズヤの認識が無かったのだ。そしてカズヤはサテラの場合に辿りつくともまるでサテラを守るようにサテラの前に達イングリッドを見据えていた。イングリッド「お前が・・・そいつのリミッタ になるといつのか？」カズヤ「はい」「イングリッド「わかつているのか、そいつのリミッタ になると言う事はお前もそいつと一緒に罰する事になるその覚悟はあるのか？」カズヤ「はい！！」カズヤは躊躇なく答えた。イングリッド「こいつ・・・まるで迷いが無い・・・」「カズヤの揺るがない意志にイングリッドは心は何故か揺さぶられていた、自分でも気付かぬ内に。イングリッド「なら、さつさと洗礼をすませる」するとカズヤはサテラの元に近付くと膝をを曲げ、まるで騎士のような構えでサテラに語りかける。カズヤ「サテライザー先輩、僕をあなたのリミッタ にして頂けませんか」「サテラ「あっ・・・ああ」「カズヤの言葉にサテラは思わず背を向けてしまう。カズヤ「やはり、ダメですか？」サテラの行動にその場にいた全員が理解出来なかった、特に女子生徒からの反応は凄かった。女子生徒1「ウツソー、何でよ？断る理由がないじゃない」「女子生徒2「全くだ、

あの子の事はあいつも知っているだろうに「女子生徒「わ、私ならすぐにOKなのに」」その他にも色々な女子の声が響いていた。そして、その声を女子の声に男子生徒はカズヤに嫉妬の炎を燃やしていた。その光景をアーサ とヒイラギは苦笑いするしかなかった。アーサ ・ヒイラギ「まあ、カズヤだしな！アオイ君だしね」納得していた。カズヤ「あの？理由を教えてくださいませんか？僕何かサテライザー先輩の嫌がる事をしましたか？」サテラ「……………不潔よ…………」カズヤ「えっ？」サテラの言葉に全員が理解できなかった。するとサテラはカズヤに振り向くと恥ずかしさを堪えるように答える。サテラ「不潔よ、たまらなく不潔よー、身体を舐めまわすようなあの感じがイヤなのよ。イレンバーセットをするのも誰かが私に触れるのも、全部全部イヤなのよ」そういうとサテラは再び背を向ける。その言葉に観戦している生徒達！生徒達「ハアア????????????????」アーサー・ヒイラギ「エエエエエー」バージニア「馬鹿ですの？あの女は」チロル「洗礼をなんだと」カズヤ「あの、イレンバーセットってそんなにイヤらしい行為なんですか？」まだ知識でしかそれを知らないカズヤにはイマイチ理解できなかった。イングリッド「ご、誤解だ確かに五感を共有する為変に違和感があるが、互いのパートナー同士が信頼して初めて出来る神聖な儀式だ」話すイングリッドもレオも顔を紅く染め答えた。イングリッド「だから、つまりそいつの言うようなイヤらしいものではない」息を荒くしながら答えた。カズヤには戦闘の時より疲れているようにも見えた。カズヤ「はああ??？」イングリッド「むう…………」カズヤの反応にイングリッド表情が少し歪むがカズヤは気付かない。カズヤ「…………サテライザー先輩、あのおカズヤが何かを言おうとした瞬間サテラの言葉が遮る。サテラ「絶対イヤー、洗礼をするのも誰かが私に触れるのもイヤ！それに、私にはパートナー何て必要ない。邪魔なだけよ」カズヤ「……………」そして、再び背を向ける。誰もサテラの言葉に不信感

を出す、明らかにサテラの言葉は全員を敵に回すには十分なものだった。アーサ「酷過ぎる、いくらなんでも」ヒイラギ「あんまりよ！アオイ君の気持ちを……」すると沈黙が続いていたカズヤが話した。カズヤ「サテライザー先輩のお気持ちはわかりました、もうリミッタにしてほしいとも、触れる事もしません。サテライザー先輩が望むのであれば2度と目の前には現れ無いようにします」サテラ「うっ……」その言葉を聞きながらサテラは後悔でいっぱいだった、本当は嬉しかったこんな自分のパートナーになると言ってくれたのが……もつとたくさん聞きたい事、話したい事もあった。だけど、それはもう叶わない。あの子はもう私には関わらない、この結果を招いたのは他ならぬ自分なのだから……サテラ「……しかし、カズヤの言葉には続きがあった。カズヤ「だけど、今この時だけは僕を信じて下さい」サテラ「ええっ！！！！」イングリッド「なあ！！」ガネツサ「あの子、何を……」チロル「どうして……」バージニア「何で……」アティア「頭おかしいんじゃないの」広場にいる全員が驚愕していた、それはサテラ自身が1番感じていた。サテラ「どうして……そこまで……」サテラはカズヤを見つめながら呟くように答えた。するとその言葉に反応するようにカズヤがサテラに近づく、そしてあの戦いの時に見せた笑顔で答えた。カズヤ「サテライザー先輩、僕は知ってますよ！サテライザー先輩が本当は優しく、暖かい人だって」サテラ「アアッ……アア」その言葉にサテラは体中が暖かくなるのを感じた。カズヤ「とにかく、今は僕を信じて下さい」するとカズヤはイングリッドとレオを見据える。イングリッド「洗礼をせずに挑むか」レオ「あまり舐めるなよ！お前」2人ともカズヤを睨むがカズヤはそれを無人の野の如く黙殺する。その態度が2人を更にイラつかせる。カズヤ「リミッタの方は僕が何とかします、サテライザー先輩はあの人に集中して下さい」サテラもボルトウエポンを構える。イングリッド「行くぞ、レオ！インバーセットだ」レオ「ハイ！！」その瞬間レオの瞳に緑色の

光が灯る、それと同時にイングリッドの聖痕が活性化し光出す。イングリッド「アッ、アア」独特の感覚に耐えそして完了するとカズヤ達を見据える。そしてその後方にいるレオからフリージングが放たれる。レオ「フリージング」カズヤ「ハッ」サテラ「くっ」跳躍してかわそうとするが間に合わず捕らわれる。サテラ「アッ！ウウ」カズヤ「先輩」しかしその時イングリッドが迫っていた、イングリッド「終わりだ！サテライザー！……」誰もが決まったと思っただけでも信じられない事が起きる。カズヤ「フリージング」カズヤがイングリッドに向け手を向けた瞬間フリージングが発生しイングリッドを吹き飛ばす。イングリッド「ぐあああ……」サテラ「えっ」生徒達「ええええええ……」ヒラギ「ウソ、洗礼をしていないのに」アサー「何でできるんだよ？」イングリッド「ぐう、バカな洗礼もすませていないのにフリージングを使えるだ」と何とか空中で態勢を立て直しカズヤを見据える。イングリッド「何なんだ、こいつは」サテラ「どうして……」カズヤ「大丈夫ですか」カズヤが背中越しに話しかける。サテラ「うん……」イングリッド「どうして貴様がフリージングを使えるのかは知らんが、まずはお前から倒す！！」イングリッドがカズヤに迫ろうとした瞬間、サテラがそれに割り込むとイングリッドの胸部にを一閃するとそしてそれに続くようにカズヤが懐に潜り込むと掌底を打ちイングリッドを後方へ吹き飛ばす。イングリッド「ぐああああ……」レオ「イングリッド先輩」レオがイングリッドの元に駆け寄るとイングリッドを庇うように立つ。イングリッド「何故だ……どうしてお前達はそこまで秩序を乱す……」サテラの攻撃で胸部は裂け出血し乳房が出ているにも関わらずイングリッドの顔は怒りに震えていた。カズヤ「あなたこそ、どうしてそこまで秩序に拘るんですか！」イングリッド「だまれえ……」イングリッドの咆哮が轟く！イングリッド「ハアア……」イングリッドから放つ斬撃が衝撃破となり2人を襲う、そしてその瞬間にレオが再びフリージングを展開する。サテラ「く

うつつ」そしてサテラを拘束する、しかしその瞬間再びカズヤのフリージングがそれを中和する。カズヤ「先輩」先ほどよりも強力なフリージングが展開されイングリッドとレオを拘束する。イングリッド「馬鹿な、前方にフリージングの展開能力などありえん!!!」奴はノヴァと同じ力を使えるというのか」レオ「くそお・・・くつ」レオも何とか抵抗しようとするがカズヤとの力の差は歴然だった。サテラ「今だ!!!」サテラがレオに一気に詰め寄る。イングリッド「自らのフリージングを中和し私を解放しろ!サテライザーが来るぞ」レオ「えっ、ああっ」レオが上を見上げるとサテラが跳躍し迫っていた。イングリッド「避ける、レオ」しかし、フリージングに意識がいつていた為レオにはそれを交わす事は出来なかった。レオ「ぐああああ」サテラの膝蹴りが腹部に直撃するとレオは吹き飛ばされる。イングリッド「レオーーーーー」しかし自身なパートナーの心配をしている場合ではなかった、サテラが自分に迫って来ていたからだ。アーサー「レオ先輩がいないんじゃ」ヒイラギ「イングリッド先輩は動けない」しかし次の瞬間衝撃が走る、イングリッド「パンドラモード起動ーーーー」イングリッドの蒼く染まると聖痕が活性化する。カズヤ「ぐうっ」カズヤのフリージングを吹き飛ばす。カズヤ「パンドラモードか」イングリッド「ウオオオオオーーーー、ハアアアア」先ほどとは比べ物にならない衝撃破が襲う。アーサー「パンドラモードは確かフリージング領域なくても動けるシステムだ」ヒイラギ「リミッタ なしでも」イングリッド「ウオオオーーーー」イングリッドは一直線にサテラに突進する。サテラ「くうつつ」何とか受け止めようと試みるがイングリッドはそのまま周りの物を巻き込みながら押し込む。広場に破壊音が響く、カズヤ「先輩」サテラの安否を心配するカズヤであったがすぐには向かわずまず先ほど吹き飛ばされ気絶しているレオの元に向かう。チロル「あの子・・・」バージニア「一体、何を・・・」するとカズヤはレオを背負うと真っ直ぐにヒイラギ達のいる場所に向かってきた。ヒイラギ「アオイ君」アーサー「カズヤ!!!」2人が駆け寄る、

カズヤ「大丈夫だよ」2人を安心させるとカズヤはレオを地面にゆつくりと降ろすとレオに向かい手を向ける、カズヤ「息吹け、蒼癒」そして蒼い光がレオを包み込む。チロル「これは・・・」バージニア「あつ、ああ」初めて精霊術をみる2人には余りに不思議の光景だった。そして、あつという間傷を癒す、カズヤ「よし、これでよし」ガネツサ「全く、相変わらず非常識ですわね」ヒイラギ「ホントに」アーサー「まあ、カズヤだしな」三者三様の答えだった。チロルとバージニアは話について行けなかった、するとカズヤが話しだす。カズヤ「ねえあ、アーサー・・・どうしてイングリッド先輩は泣いてるんだろう」アーサー「えっ？泣いてる？」ヒイラギ「アオイ君、それどういう事」突然のカズヤの言葉に全員が視線をカズヤに向ける。カズヤ「イングリッド先輩はずっと泣き続けている、冷たい雨の中にいるようにずっと泣いているんだ。そしてそのせいで心が悲しみと凍ってしまってるんだ」チロル「えっ！！」「バージニア「この子」ガネツサ「どうして、それを・・・」その意味を知る3人は驚愕した、目の前の少年はあの僅かな時の中でイングリッド先輩の傷に気付いたのだ。その時3人が同じ事を考えていた、チロル・バージニア・ガネツサ「もしかしたら、この子なら」3人はもう一度視線を合わせるそしていを決したようにガネツサが話した。ガネツサ「1年前の事ですは・・・まだ接触禁止の女王が編入してくる前の事です、経験の浅い1年生達の為に野外訓練行われた時の事ですは・・・」

(1年前)

アルバート「なっ・・・があはぁー」マリン「アルバートー」  
「ー」タイプS「フオオオオー」マリン「なっ！！バカな」イングリッド「どうして、ここにタイプSが！！！！」  
1年生達「ウワァアアー」マリン「不味い、このままで陣形が崩れる・・・イングリッド私を含めた2年生で時間を稼ぐからその間に1年生の陣形を立て直してくれ」イングリッド「危

険すぎる、無茶でもやるしかない！小隊は私に続け」チロル・ガネツサ・バージニア「はい！！！」マリソ「ボルトウエボン展開！ハアアアアアアアアア」チロル「コノオアアアアア」バージニア「ウオオオアアアアア」ガネツサ「行きますわアアアアア」マリソを先頭にタイプSに仕掛ける。イングリッド「今の内に陣形を立て直せ、我々も迎撃するぞ」しかし先ほどのアルバートがやられた為にほとんどのパンドラとリミッタは恐慌状態に陥っていた、パンドラ1年生「イヤ・・・イヤアアアア」パンドラ1年生「無理よ！！！」リリミッタ 1年生「うわああアアアアアアアア」リミッタ 1年生「イヤだああアアアアア」その瞬間小隊の1年生達が次々と逃げ出したのだ。マリソ「なあ！！！！」イングリッド「お前からアアア隊長が戦っているんだぞ」イングリッドが叫ぶが1年生達は次々と逃げ出す、それを止めるすべはなかった。マリソ「くう・・・せめてこの子達だけでも」マリソは後ろを振り向き逃げずに立ち向かった倒れた1年生達を見た。するとマリソはボルトウエポソを構えタイプSに対峙する。ガネツサ「マ・・・マリソ・・・先輩ダメです・・・」チロル「マリ・・・ン先輩」バージニア「い・・・行けません」マリソはもう一度だけ振り向き微笑むとタイプSに向かう、マリソ「ウオオオオオオアアアアア」自分の持てる全ての力を掛けマリソは攻撃を放つ、しかし・・・それは届く事は無かった・・・マリソの攻撃が放たれる前にノヴァの触手がマリソの胸を切断した。イングリッド「ああああアアアアア・・・マリソアアアアア」イングリッドの悲鳴が響いた・・・

（現在）

それがマリソ先輩の最後でしたは、その後すぐに連絡を受けた3年生・4年生の編成された部隊によってタイプSは殲滅されました。マリソ先輩が無くなられる30分後の出来事でした・・・話を終えたガネツサ・チロル・バージニアはその時を思い出したのか拳を

握っていた。ヒイラギ「そんな事が……」アーサー「知らなかつた……」ガネツサ「だからこそ、秩序を守りそれを乱すものは全力で罰する事がご自身の信念だとお考えのはず、もう2度とマリン先輩のような者を出さない為にも……」沈黙が流れる、カズヤ「そうですね、そんな事が！なら思い出さなきゃイングリッド先輩は」ガネツサ「えっ？」チロル「どういう事？」カズヤ「イングリッド先輩は忘れてしまってるんですよ、マリン先輩の最後を見届けた時に託された本当の思いを」バージニア「マリン先輩の本当の思い」みんなカズヤの言葉が理解できなかった。カズヤ「人は悲しい事があるとすぐに忘れようとします、だけど同時に大切な事も忘れてしまふんです」これは聖也から教えられた言葉だった、（回想）聖也「カズヤ、人間ってゆうのは悲しい事も忘れるけど同時に大切な事や愛されていた事も忘れてしまふんだ」カズヤ「どうして？なんで忘れちゃうの、大切な事を……」聖也「前に進むためなんだ」カズヤ「じゃあ、もう思い出せないの？大切な事なのに」聖也「いいや、出来るぞ」カズヤ「どうするの……」聖也「心に呼びかけるんだ」

チロル「心に呼びかける……」カズヤ「それじゃ、行ってきます」立ち上がるとサテラ達の元に向かう。チロル「うつ……」バージニア「……」アーサー「大丈夫ですよ、カズヤなら」ヒイラギ「そうですね、アオイ君なら必ずイングリッド先輩を救ってくれます」2人は迷いなく答えた。バージニア「チロル」チロル「ええ、あの子を信じてみましょう」2人はカズヤにかけた、カズヤがイングリッドの凍った心を解かしてくれる事。

テンペスターン・友の本当の想い（後書き）

きつい、大変！内なる想いを書くのは難しい

悲しみの雨があがる時（前書き）

イングリッドの思いを書くのが難しい、マリンの思いも

## 悲しみの雨があがる時

イングリッド「ハアアアーーーーー」イングリッドの声とともに凄まじい破壊音が響く。サテラ「ぐはあーーーーー、くうっ・・・なんて威力だ・・・」パンドラモードとなったイングリッドの攻撃をサテラはなんてか防いでいるが、防御の上からでもイングリッドの攻撃は凄まじいものだった。イングリッド「余所見しているヒマは貴様にはないぞ!!!」サテラ「ハッ、くううう」イングリッドが斬撃破が迫る、なんとか防ぐがその威力に押され体勢を崩してしまう。サテラ「きゃあああーーーー」そしてサテラにとどめを刺すためにイングリッドが近づくと、その時歩みながらイングリッドの脳裏にはあの日の事が蘇っていた。イングリッド「マリン・・・私は間違っていないよな！あの時も1年生達が逃げ出さなければ君は死なずに済んだはずだ・・・そして今も私の隣を一緒に歩いていたはずだ。もう君のように無駄死にするような存在は生み出さない」イングリッドは突き進む心をいつかせ、マリンの思いとは違う道を・・・そしてサテラの元に辿りつく。イングリッド「サテライザー・L・ブリジット、貴様のように自分本位に行動し秩序を乱す者は仲間を見捨てる。そんな者を私は許さない！終わりだあーーーーー」ボルトウエポンが振り下ろされようとした瞬間、イングリッドの身体が地面に叩きつけられる、それと同時にパンドラモードが解除される。イングリッド「ぐはあ、くっ・フリージングか、まさか」イングリッドはゆいつ動ける首を右に向ける、そしてそこにはこのフリージングを発生させている少年がいた。カズヤ「もう、やめて下さい。イングリッド先輩・・・これ以上間違った道に進むのは」イングリッド「何だと・・・貴様あーーーーー」カズヤの言葉にイングリッドは再びパンドラモードを起動させるがカズヤのフリージングがそれを許さない。イングリッド「くっそおおおおーーーーー」悲鳴に近い声が響く、イングリッ



じる、そこにはイングリッドを見据えるカズヤがいた。するとカズヤが右腕をイングリッドに向ける、イングリッド「くうっ・・・」攻撃をされると思っているイングリッドはカズヤを睨みつける。しかしその右腕が向けられた瞬間イングリッドの拘束が解かれる。イングリッド「なあ！」サテラ「どうして!!!」驚いている周りを後目にカズヤはイングリッドに話しかける。カズヤ「イングリッド先輩、あなたは本当にマリ先輩が無駄死にしたとお考えなんですか？」イングリッド「何いー」カズヤ「僕は、マリ先輩はパンドラとして使命を全うしたんだと僕は思います。そんなマリ先輩の死を僕は無駄死とは思わない」イングリッド「貴様が・・・マリンの何を知っている」イングリッドは立ちあがるとカズヤの顔を思い切り殴りつける。サテラ「アアア!!!」アーサー「アッ!!!」ヒイラギ「アオイ君」チロル「・・・先輩」バージニア「・・・ウツ・・・」ガネツサ「イングリッド先輩」

イングリッド「ハア、ハア、ハア・・・お前に・・・何が分かる！あの時だつてええ・・・えええ1年生が逃げ出さなければマリンは今もここにいたんだ。今も・・・私とな・・・りに・・・」カズヤ「そうかもしれません、確かにその時に1年生の人達が逃げ出さなければマリ先輩は今もイングリッド先輩と一緒にパンドラとして生き、そしては普通の女性のように夢や好きな人の事や色々な事を話していたのかも知れませんが」イングリッド「それが・・・それがわかっていいるのなら・・・どうして、どうしてお前は邪魔をする」カズヤ「イングリッド先輩が泣いているからです。」イングリッド「えっ・・・」カズヤ「そして、マリ先輩に託された本当の思いを忘れてしまっているからです」イングリッド「マリ先輩の本当の思い・・・」カズヤ「イングリッド先輩、あなたは託されたはずです。マリ先輩の最後を見届けた時に」イングリッド「マリ先輩・・・私に・・・託した・・・」

(一年前)

マリ「イングリッド……うっ、ゴホオウウ」イングリッド「マリ、しっかり」マリ「……あの子達は無事……」イングリッド「あの子達……」マリ「一年生……達……」イングリッド「ああ、全員無事だ」マリ「……そう……よかつた、イングリッド私の分あの子達を……守ってあげて」イングリッド「マリ……マリ……」

(現在)

イングリッド「あの時マリは笑っていた……あれは1年生を救えた事と私に思いを託して……その笑顔だった……のか……じゃ私は今までマリンの思いを……踏みにじって……ウツウウ……アアアッアア、ウウ」イングリッドの瞳から涙がこぼれた。あの日枯れ果てたはずの涙だった……カズヤ「ハッ」そしてカズヤはフリージングを解除する。カズヤ「ふう……」レオ「イングリッド先輩」チロル「先輩」バージニア「イングリッド先輩」目を覚ましたレオとチロルとバージニアが来ていた。その後ろにはガネツサ、アーサ、ヒイラギもいた。カズヤ「後はお願います」そう言っサテラの元に向かおうとするのをチロルとバージニアが引き留める。チロル「待って!!!」カズヤ「えっ?」チロル「ありがとう、イングリッド先輩を助けてくれて」バージニア「私からも言わせて、ありがとう」カズヤ「僕は何もしませんよ、イングリッド先輩を助けたのはマリ先輩ですから。それじゃ」そういうとカズヤはサテラの元に向かう。チロル「不思議な子ね」バージニア「本当に」2人もまたカズヤと接した事により何かを得た、それが何かはまだわからない。

次の日イングリッドは教室の自身の席で外を眺めていた。あの後気絶したイングリッドをレオ、チロル、バージニアの3人が運んでく

れたそうだ。そして、保健室でチロルとバージニアの思いをしつた。イングリッド「マリン、私はこれからどうすれば……」その時不意にクラスメイトに肩を叩かれた。イングッド「な、何だ？」クラスメイト「あなたにお客さんよ」イングリッド「私に？誰だ」誰か確認しようとして入り口を見るとそこには、昨日自分を圧倒した少年が立っていた。カズヤはイングリッドの視線に気がつく頭を下げて挨拶をした、イングリッド「なあ……」意外な訪問者に目を丸くしていた。

あの後、カズヤが話があると云う事で時間を頂けないかと言われ、イングリッドはそれを承諾し2人は今屋上にいた。イングリッド「……ふう〜」イングリッドは何とか緊張をするのを抑えていた。昨日の事があるだけに何故か怖かったのだ、するとカズヤがイングリッドに近付いてくるそして次の瞬間……カズヤ「イングリッド先輩、昨日はすいませんでした」イングリッド「えっ……」余りに予想とは違う行動にイングリッドはついて行けなかった。イングリッド「ど、どうして謝るんだ……お前は別に」カズヤ「昨日は僕も冷静じゃなかったとは言え、あんな偉そうな事を言ってしまった、何より女性に手を出してしまったので」イングリッド「なっ、そんな事で……」カズヤ「兄さんと約束してるんですよ女性には何があっても手を出さなつて」イングリッド「……別に気にしていない」カズヤ「……そうですか、良かった」イングリッド「変なやつだな……あれだけの事をした人間と同じには見えないぞ全く」カズヤ「そうですね、フフフ」カズヤの笑いにイングリッドもつられて笑っていた。イングリッド自身もこんなに笑ったのは久しぶりだった。カズヤ「うん、やっぱりイングリッド先輩も笑った方が素敵ですよ」イングリッド「なあ……！！からかうな、所でお前名は何と云うんだ？」カズヤ「僕ですか、アオイ・カズヤです」イングリッド「アオイって、パンドラの英雄アオイ・カズハの弟なのか……」カズヤ「はい」イングリッド「そっか、どうりで！ア

オイ・カズヤありがとう。お前は私の心と同時にマリンの心も救ってくれた、感謝する」カズヤ「僕は何もしていませんよ」イングリッド「そっか、だがお礼はしないと」するとイングリッドは近付くといきなりカズヤの額にキスをした。カズヤ「えっ！！！！」イングリッド「光栄に思え、レオにだってやってないんだぞ」頬を紅く染めながら答えた。カズヤ「強烈な一撃ですね。フッフ、ハハハハ」イングリッド「フッフ、ハハハツハハハ」2人の笑い声が響いた。そしてこの日長く降り続いた雨が上がった。

悲しみの雨があがる時（後書き）

自分で書きながら分からなくなっていました。駄文です

## 踏み出す勇気（前書き）

自分を変える為一步踏み出す事、それはとても勇気のいる事だと思  
います。

## 踏み出す勇気

イングリッドと和解し、また学園には静かな日々が戻った。カズヤ自身も変わらないうつものように朝の鍛錬に励んでいた。しかし、今まで1人でやっていた朝の鍛錬も最近ではキム、エリズもたまにはあるが参加するようになっていた。これは2人なりのカズヤの力になりたいという思いからであった。

カズヤ「それじゃ、キム姉さん、エリズ姉さんボルトウエポンに気を纏わせて下さい」キム「わかった！フウーーー」エリズ「ええ、ハアアーーー」2人とも集中力を高め自身のボルトウエポンに気を纏わせる。キム「大丈夫だ」エリズ「OKよ」カズヤ「それじゃ、キム姉さんから試してみましよう。そうですね、うーと・・・あつ、あれにしましよう」カズヤは辺りみわたし少し離れた所にあった巨大な岩を指さした。カズヤ「それじゃ、この岩を両断してみて下さい」エリズ「えっ・・・これをか・・・えっああ」カズヤ「はい！割るでも、壊すのでも、両断して下さい」エリズ「カズヤ、さすがにこれは無理なんじゃ」エリズが止めようと話にはいつてきた。カズヤ「大丈夫ですよ、キム姉さんなら出来ます。自分の力を信じて下さい」カズヤのその言葉にキムは微笑むと目の前の巨大な岩を見つめ構えをとる、そして跳躍し岩の上から気合の声とともに月狼を振り下ろす。キム「ハアアアーーー」そして月狼が振り下ろされて少しの間あと、巨大な岩が綺麗に両断され崩れた。エリズ「ウソオ・・・あの巨大な岩を、信じられないわね、これならノヴァのコアなんて簡単に」キム「・・・すごいな・・・」実際に岩を両断したキムもエリズと同様に気の力に驚愕していた。カズヤ「それじゃ、今度はエリズ姉さんの番です」エリズ「ああ！！」早く試してみたいのか、エリズは笑顔で答えた。そして、カズヤはエリズにもキムと同じくらいの巨大な岩に攻撃するように指

示した。エリズ「ハアー、デヤアア」エリズは自身のボルトウエポン、ドッペルゲンガーの特性をいかした攻撃を繰り出す、放たれた無数の短剣を巨大な厚さの岩をもろともせずに貫きあつという間にただの岩の塊に変えてしまった。エリズ「凄いわね、気を纏うだけでこんなにも違うなんて」キム「ああ、全くだ」改めて自分達が手にいれた力の大きさに2人は驚愕していた。そこにカズヤが近づいてくると、カズヤ「お疲れ様です！それじゃ休憩しましょう」キム「ああ、そうだな」エリズ「そうね、疲れたは」

カズヤ「どうぞ、キム姉さん、エリズ姉さん」キム「ありがとう、カズヤ」エリズ「ありがとう」カズヤは2人にお茶を渡す。カズヤ「これも、もし良かったら」そういうとカズヤは予め作って置いたおにぎりを2人に差し出した。キム「全く、気がきくわね」エリズ「本当に、フフフ」2人ともカズヤの準備の良さに自然と笑顔がこぼれる。

エリズ「カズヤ、どう学園生活は？」カズヤ「はい、楽しいです！色々と分からない事は多いけどアーサ やヒイラギさんや、クラスの間みんな良くしてくれるし。」エリズ「そうか、良かった」キム「全く、初めはあんなに緊張してたのにな」エリズ「ええ！そうなのカズヤ、意外ね」カズヤ「アハハツ・・・やっぱり怖かったんです。受け入れてもらえるかなって・・・」キム「あつ・・・」エリズ「・・・カズヤ・・・」2人はその言葉の聞いて、それがどういう事なのか即座に理解した。カズヤ「この力に目覚めて、妖魔の存在を知っても普通の生活は出来ないんだってそう思ってた。仮に出来たとしても僕みたいな人間を受け入れてもらえる訳がないんだって決めつけてましたから・・・それに・・・」キム「それに、何だ？」カズヤ「ごめんなさい、これはまだ・・・乗り越えられてないから・・・」キム「・・・カズヤ・・・」エリズ「・・・乗り越えられてないか・・・」するとキムが立ち上がる。と後ろからカズヤを抱きしめる。カズヤ「エツ、何を・・・」突然

のキムの行動がカズヤには理解できなかった。キム「カズヤ、お前が話したくないのなら無理には聞かない。だけど、何でも1人で抱えこむ必要はないんだ」エリス「そうよ」エリスもカズヤの手を握り答えた。エリス「・・・もう1人じゃないんだから！ねえ」カズヤ「はい、ありがとうキム姉さん、エリス姉さん」キム「気にするな」エリス「これくらい、いくらでもするわよ」その瞬間3人を包み込むように風と火の精霊が舞っていた。

時間は少し経ち、3年生の校舎の廊下をイングリッドは1人歩いていた。イングリッド「むっ・・・」気配を感じ歩みを止める、すると陽の影に隠れた人影が姿を現す。イングリッド「珍しいな、お前がくるとは！学年2位エリザベス・メイブリ」エリザベス「イングリッド、あなたに聞きたい事があります」イングリッド「私に聞きたい事だと？フツ、接触禁止の女王の弱点でも知りたいのか！負けた責任を果たせと」イングリッドはエリザベスを睨みつける。しかし、そんなイングリッドの殺気にもエリザベスは動じる気配も見せず話を始める。エリズベス「そんなくだらない事などしません、第一貴方は負けてはいないでしょ、あれは引き分けです。勝負をきつしたのはあの1年生のリミッタの予想以上の力の為でしょ。そして実際に彼女のサテライザー・L・ブリジットは強い、例えばあなたじゃなくても負ける可能性はあったでしょう。今彼女を相手にして無傷で勝てるのはシフォン・フェアチャイルドくらいでしょう」イングリッド「随分買ってるんだな、あの女を」エリザベス「ええ・・・まあ」エリザベスは何かを思い出すように答えた。イングリッド「それでは、私に一体何を聞きたいのだ？」エリザベス「あなたに聞きたいのはあの1年生の少年、アオイ・カズヤについてです。」イングリッド「なっ・・・」

場所は変わりカズヤのクラス、そこでは女子によるカズヤ争奪戦が行われていた。クラスメイト「アオイ君、ちょっとこの問題教え





には話が別だぜ、1度検査してもらったほうがいいぞ」ヒイラギ「  
そうよ、そうしましょう」カズヤ「それなら、エリズ先生に頼んだ  
から大丈夫だよ！今、結果待ち」ヒイラギ「そうなの、で！！いつ  
来るの結果は」カズヤ「まだ、わからないよ」ヒイラギ「そうなん  
だ・・・がっかり」カズヤ「ハハツハ、ごめんね」ヒイラギ「い  
いわよ別に、あゝあなんかがつかりだなあゝゝゝ」アーサー「そう  
だよなゝゝゝ、俺もすぐに強くなってカズヤ見たいになれると思  
ったのに」カズヤ「そんな事ないよ、アーサーもヒイラギさんも強  
いよ」アーサー「えっ」ヒイラギ「ええっ」2人共カズヤの言葉の  
意味が理解出来なかった。アーサー「俺達が強い・・・」カズヤ  
「うん、2人は僕なんかよりもずっと強いよ」ヒイラギ「何言つて  
るのよ、そりゃあ私達は一般人に比べれば強いわよ！だけどあなた  
は別じゃない、あなたは私達パンドラがやつとの思いで倒すノヴァ  
を一瞬で、そしてノヴァ以上に強いあの化け物達を倒す事の出来る  
人なのよ」アーサー「そうだぜ、いやみにしか聞こえあねーよ」  
いつもなら人当たりのいいアーサーも少し怒気を込めてカズヤにあ  
たる。だけど、そんな2人の瞳を真っ直ぐに見つめてカズヤは答え  
る。カズヤ「確かに2人から見れば僕は強く見えるかもしれない・・・  
・・・精霊術が使えるから、だけどそれがなければ僕は弱い・・・  
それに本当に強いっていうのはこういう事じゃないんだ」アーサー  
「本当の強さ・・・」ヒイラギ「・・・ああっ・・・」カズ  
ヤ「ねえ、アーサーはガネツサ先輩の事どう思ってる？」アーサー  
「えっ・・・そりゃ、大事に思ってるよ！俺にとつてガネツサ先  
輩はかけがえのない大切な人だよ」ヒイラギ「あ、ああ・・・」  
いつもとは違う男らしいアーサーに驚くヒイラギを余所にカズヤは  
その答えに笑顔を浮かべていた。カズヤ「そう、その大切な人を思  
う気持ちが本当の強さだよ」アーサー「えっ、これが・・・」カ  
ズヤ「うん、あの時も僕は先輩を守らなきゃ、イングリッド先輩を  
助けなきゃ。そう思ったらあれだけの事が出来たんだ、これは僕の  
仮説なんだけどフリージングは思いによって変わるんだと思う」ア

「サー」思い・・・「ヒイラギ」・・・思い・・・「カズヤ」だから、これからも2人がその思いを忘れなければ強くなれるよ」「カズヤの言葉には強い意志が込められていた、するとちようどタイミングに合わせるようによれいになる。その音で2人の意識は戻される。ヒイラギ「イケない、急ぎましょう」「アーサー」「ああ」「カズヤ」「うん」そして3人は走り出す。そして2人は先頭を走るカズヤの背中を見ながら何故か微笑んでいた。まだ、カズヤの言葉の意味を全ては理解できないけど、それでもアーサーとヒイラギ2人の中に何か芽生えようとしていた。

そして、3人が走り去った後に廊下の物影からサテラが姿を現した。実はサテラはイングリッドとの件でカズヤにお礼を言おうとカズヤ達の教室の近くまで来ていたのだ、そこで偶然カズヤ達の話の聞いてしまったのだ。サテラ「・・・大切な人を思う気持ちか・・・」  
「先ほどカズヤが言った言葉を呟いていた、それを言うとは何故か心が暖かくなった！サテラはカズヤ達が走り去った廊下を見つめながら自分の中で1つの決心をする。サテラ「・・・よし・・・」  
そしてサテラもその場を後にする、サテラもまた踏み出す事を決意する。この勇気がサテラのこれからを明るくする事になる・・・

時間は経ち辺りはすっかり暗くなっていた、ゼネティックスの施設であるプールの中を月明かりに照らされながら1人の女性がいた。エリザベス「・・・あのイングリッドをあそこまで変えるなんて」「イングリッドと話しエリザベスが何より感じたのがイングリッドの雰囲気が変わっていたのだ。以前よりも強く、凛々しくなっているとさえ感じた。それは自分が特別訓練から戻ってきた時と同じものだったからだ。エリザベス「アオイ・カズヤ・・・あなたは一体・・・」水面から月に手を伸ばしながらエリザベスは呟く、ここにも1人踏み出そうとしている人がいた・・・

**踏み出す勇気（後書き）**

内容が中途半端ですいません。

## パートナー

カズヤ「これも、違うな……他の書物を探してみよう」「マーガレット「どうですかアオイ君、妖魔達が言っていた主に関する手掛かりになりそうな資料はありましたか？」

カズヤ「いいえ、まだ……」「マーガレット「そうですか……それでは私も手伝いましょう。調べ物は特意ですから」「カズヤ「すみません、無理を言って校長室の書物を貸して頂いているのに」「マーガレット「構いませんよ、これくらい」

この日カズヤはマーガレットにお願いし、火蛇達が言っていた主の存在を調べるために校長室の書物を調べていた。

マーガレット「何か、手掛かりでもあればいいんですが……」「カズヤ「手掛かりですか、そうですね……妖魔達が主と認める程の存在ですから今日まで僕らが戦ってきた妖魔達とは比べ物にならない存在だと思っんです。大袈裟にいうと神に匹敵するような存在、なので伝説の由来があるものをあたってみるといいかもしれないですね。」「マーガレット「わかりました！それでは始めましょう」「カズヤ「はい」

2人が調べ初めて数十分が過ぎた頃、校長室のドアが叩かれた。マーガレット「どうぞ」「シフォン「失礼します！シスター・マーガレット、シユバリエの本部より今度の会議に関する資料が届いていますのでお届けにまいりました」「ティシ「失礼します！あれ、カズヤさん何をしているんですか？」「シフォンの後に入ってきたティシが積み上げられた本とカズヤの姿を見て答えた。

カズヤ「あつ、どうもシフォン生徒会長、テイシ先輩！うつ、うわああ」2人に挨拶しようとした瞬間持っていた大量の本を落として転んでしまった。

シフォン「アオイ君」テイシ「カズヤさん、大丈夫ですか」2人がカズヤの元に駆け寄る。カズヤ「はい、大丈夫です！イテテ」シフォン「一体何をなさっているんですか？」マーガレット「ちよつと、妖魔の事で調べ物していたんですよ」シフォン「妖魔！！」テイシ「一体何があつたんですか！！」妖魔という言葉に2人は過剰に反応した。

カズヤは妖魔の何を調べているのか2人に説明した！

シフォン「妖魔達が主と呼ぶ存在ですか……」テイシ「あんな化け物上さらに上がっているんですか……」カズヤ「はい、妖魔と言っても弱い者から強い者までいますから今まで僕らが戦ってきた妖魔は人間でいう所の雑兵見たいなもんです」シフォン「あれが……雑兵……」自分達が何とか倒せたあの妖魔達が雑兵といわれる存在だった事にシフォンは動揺を隠せなかった。テイシ「それで、その主については何かわかったんですか？」カズヤ「それがまだ、それらしき資料が見つかってなくて」テイシ「それじゃ私達も手伝います！会長」シフォン「ええ、どういった本を探せばよろしいんですか！」2人はカズヤから説明を受けるとすぐに資料を探し始めた。

そして、4人で探し始めて少したった時、テイシが一冊の本を見つけた。

テイシ「山海経？中国に伝わる伝説か、カズヤさんこの本どうですか？」カズヤ「どれですか！」テイシ「声にカズヤ、マーガレット、シフォンがやってきた。テイシ「これ何ですけど、どうで

すか？」テイシ から渡された本を捲りながら調べているとあるページでカズヤの手が止まった。

カズヤ「まさか……」マーガレット「アオイ君、どうしたのですか」カズヤ「このページを見て下さい」カズヤは3人に自分が見ていたページを見せた。3人は言われたページを見てみると、奇妙な生き物の絵が四つ書かれ、そしてその絵の上には『四凶』と書かれていた。マーガレット「アオイ君、この書かれている生き物が妖魔達が言っていた主と関係があるんですか？」シフォン「しかし、字が滲んでしまつて読めませんね」テイシ 「そうですね、この生き物達名前でしょうか？何とか1つよめそうですね……何て読むんでしょうか？」カズヤ「窮奇」テイシ 「えっ!!!」シフォン「読めるんですか？」カズヤ「……はい、全てを読める訳ではありませんが、少なくともこの4体の名前はわかります。窮奇、混沌、檮骨 檮鬻それぞれが名前の中に災いの意味を持つ妖魔、恐らく妖魔達の主はこの4体で間違えないでしょう」マーガレット「どうして、断言出来るんですか？」マーガレットの問いにカズヤは先日倒した妖魔達との事、そして最後に残した言葉を話した。マーガレット「なるほど、そんな事が……しかし、アオイ君次からはそう言つた無茶な行動はしないでください。あなたが強いのはわかりますが、心配なんですからね……無茶だけはしないで……」カズヤ「はい……すいません」シフォン「本当ですよはよ」テイシ 「ダメですからね、カズヤさん」カズヤ「はい、約束します」マーガレット「フフフ、とにかく妖魔達の主が分かつただけでも収穫です！これから対策を考えましょう。アオイ君色々相談すると思いますがよろしくお願いします」カズヤ「はい」マーガレット「それじゃ、この片づけは大丈夫ですからそれぞれの教室に戻つて下さい」3人「はい、失礼します」こうして3人は校長室を後にする。マーガレット「……妖魔、これ以上隠すと失せるのは難しいですね……」

シフォンとテイシ と別れ教室に向かい授業を受けた後カズヤはアーサー とヒイラギと廊下で話をしていた。

アーサー 「なあ、カズヤさっきはどこに行ってたんだ？」ヒイラギ「そうそう、授業にもいかなかったしどうしたの？」カズヤ「うん、ちよつとね」ヒイラギ「怪しい〜〜〜」カズヤ「ハツ・・・ハハハ」アーサー 「そういえばさあ、カズヤあれから接触禁止の女王とどうなつたんだ？」突然アーサー がサテラの事を聞いてきた。

カズヤ「どうつて？何が？」アーサー「何が？お前あれから何にもないのかよ？」カズヤ「うん、あれからサテライザー先輩とも1度も会ってないし！特に何もないかな」カズヤのその説明にヒイラギが噛みつく！ヒイラギ「えええー！ー！ー！ー！あんなに身体はって助けたのにありがとうの一言もなかったの！！！！！！ありえないわよ」カズヤ「そんな、大袈裟だよ！お礼を言ってもらうためにやった訳じゃないから」ヒイラギ「何言つてんのよ、アオイ君あなた自分がどれほどの事をやったのか分かってないわよ。っていうかそれ以上に接触禁止の女王あり得ないわよ。あれだけの事をしてもらつて、くう〜〜他の女子からしたら羨ましいのにー！ー」アーサー「なあ、カズヤ！あの先輩は辞めとけつて、綺麗な薔薇には棘があるつてな。それりや、あの先輩は美人だしスタイルもいいし魅力もあるからつられる気持ちもわかるけどな同じ男として」カズヤ「別にそんなつもりはないよ！サテライザー先輩に限らずパンドラの人達は素敵な女性が多いよ。もちろんヒイラギさんもね」ヒイラギ「な・・・なななつな何言つてんのよ。いきなり、とつ、とにかくアーサー も言つていたように綺麗な薔薇には本当に棘があるのよ」アーサー「そうそう、それも飛びきり強力な毒の棘がね」3人

が話していると後ろから近づいてくる足音があった。

カズヤ「あっ!!」アーサ「えっ?」ヒイラギ「何、どうしたの?」カズヤの反応に2人は後ろを振り向くと、そこにはサテラが立っていた。その瞬間2人の顔色が変わる、そしてすぐに取り繕うようにサテラの事を褒めだした。

アーサ「あっつああ、イヤ、今ちょうどサテライザー先輩の事を話してたんですよ!!!」サテライザー先輩は美人な上にあんなに強いなんてあこがれるなあ~~~~って、ハツハハツハ「ヒイラギ「そ、そうなんですよ!同じ女性としてもパンドラとしても憧れちゃうなあ~~~~って」サテラ「.....」2人の言葉にサテラは無表情のまま何も言わない、そしてゆっくりと近づいてきた。

アーサ「ヤ、ヤバい」ヒイラギ「まだ死にたくない」自分達の最後を覚悟していた2人だったが、しかしサテラは2人を通り過ぎるとカズヤに話しかけた。サテラ「ちよつと、話があるの.....付き合って.....」下を向きながら恥ずかしそうに答えた。カズヤ「ええ、いいですよ」サテラ「.....来て」そういうとサテラは1人歩き出す。カズヤ「行ってくるよ」ヒイラギ「ちよ、アオイ君」アーサー「.....カズヤ」2人はサテラの後について行くカズヤを見送るしかなかった。ヒイラギ「大丈夫かなあ.....」

サテラ「.....」カズヤ「~~~~いい風だな」アーサとヒイラギと別れた2人は屋上に来ていた。カズヤ「それで、サテライザー先輩お話とは?」サテラ「.....」カズヤ「.....大丈夫ですか?」カズヤがサテラの側による。するとサテラは突然振り向くとカズヤの手を掴むと、自分の頬にあわせた。カズヤ「えっ!!!」先輩何を?」突然のサテラの行動にカズヤは理解できな

かった。そんなカズヤをよそにサテラはカズヤの手の温もりを感じていた。サテラ（暖かい、あの時と同じだ）「ハア・・・、やつぱりあなたの手は暖かい、触れられても全然イヤじゃない」カズヤ「どいう事ですか？」サテラ「人に触れられるのは・・・たまらなくイヤなの・・・だけどあなたはへ、平気みたい、どうしてこんな事初めて」その言葉を聞いた瞬間カズヤは何かを理解したように微笑んだ。

カズヤ「それはきつと、サテライザー先輩が僕を受け入れてくれたからだと思います」サテラ「私が受け入れたから・・・ど、どおいう事？」カズヤ「上手く言えないんですけど、その理解しようとしてくれた、認めようとしてくれたといえますか」サテラ「そう・・・理解しようとしてくれたか・・・フッフ、ねえ、それじゃ話なんだけど」カズヤ「はい」サテラ「あ、あなたフリージングが使えるわよね！その、イレインバーセットをしなくても」カズヤ「そうみたいですね、僕も変わり者みたいです。ハハハ」するとサテラが小さい声で話しました。

サテラ「・・・してあげる・・・」カズヤ「えっ？」サテラ「してあげるは、パートナーに・・・でも洗礼は出来ないは絶対に・・・それでも良ければだけど」普通に考えればサテラの条件を言われたら誰もパートナーなるわけではないのだが、しかしカズヤは笑顔で答えた。

カズヤ「はい、喜んで！一緒に大切な人を守りましょう」サテラ「あっ・・・うん・・・よろしくね、カズヤ！！！」

この日、決して誰にも触れる事も心を開く事のなかった接触禁止の女王にパートナーが出来た！この情報はあつという間に学園に広まっていた。

場所は変わり窮奇達がいる洞窟、そこでまた一体の妖魔の封印が解かれていた。窮奇「おお、待ちわびたぞ我が同胞よ」窮奇が洞窟の奥を見据えると、そこから巨大な狼のような身体に六枚の翼に足が六本ある長い毛を生やした妖魔が姿を現した。混沌「久しぶりの外の世界だ、かつて精霊術師に封じられたせきねんの恨み必ず晴らしてくれようぞ。人間どもは皆殺しにして喰ってくれるはぐをおおおおおおおー」洞窟を破壊するような咆哮が発せられた。窮奇「ふふふ、混沌が蘇った、フフフもう少しだ。みているがいい、アオイ・カズヤ」さらなる恐怖と闇がカズヤ達に迫っていた……

**初部屋入り・田舎娘登場！！（前書き）**

この話の中で少し聖闘士星矢の要素を少しいれようと思います。後、初部屋入りは普通にできる感じにします、三人娘も一応は登場させます。

今回は詰め込みたい要素が多いのでまた途中で投稿するかも知れませんがその時はすいません

## 初部屋入り・田舎娘登場！！

広大な自然と歴史ある遺跡が沢山存在チベット、そしてそのチベットの山奥に暮らすある一族の少女ラナ・リンチェン、彼女は今近くにある滝の中で日課である水浴びをしていた。

ラナ「ふうふう、いよいよ出発でありますな！」ラナは何処までも青く広がる空を見上げながら呟いた。

長「ラナよ、お前はこれから日本にあるウエストゼネティックスに向かう」ラナ「はい、長老」ラナは膝を曲げ頭を下げた体勢で長の話聞く。

長「よいか、ラナよ・・・ゼネティックスには世界中から沢山の男が集まると言われている、そこならば必ずお前の一生をとみに生きる伴侶が見つかるであろう」ラナ「はい」長「さあ、行けラナよ！お前が今度帰ってくる時を楽しみにしているぞ」ラナ「はい、それでは行ってまいります」

カズヤ「・・・くそ、一体どこに隠れているんだ」まだ辺りが暗い時間にカズヤは風を纏いながら空から妖魔達の皆を探していた、妖魔達の主が四凶と呼ばれる四体の妖魔と分かった以上早めに手をつけておく為である。

カズヤ「もし、四凶が復活したら僕1人でも勝てるかどうか・・・  
・くっ急がないと」カズヤがその場を離れようとした瞬間これまで感じた事のない凄まじい妖気を感じた。

カズヤ「誰だ！！」妖気が感じた場所を見据え、そしていつでも攻撃が出来る体勢をとる。するとそこには巨大な黒い影があった。カズヤ「誰だ、貴様……」窮奇「フッフ、随分と交戦的だな、精霊術師よ！しかも小僧ではないか。こんな者に鶴は敗れたのか、情けない奴だ、フッフ、ファハハハハ……」夜の空に窮奇の笑い声が響く。

カズヤ「お前まさか、四凶か」窮奇「その通り、四凶が1人窮奇だ……」窮奇が続きを喋ろうとした瞬間紅き炎が放たれるとそのまま黒い影をのみ込む。しかし、カズヤの顔は変わらず辺りを見渡していた。窮奇「フッフ、いきなり攻撃を仕掛けるとは無礼な奴だな」カズヤ「ふん、お前達を倒すのに正々堂々なんてするつもりはない」窮奇「まあ、それもよからう！だが、まだ貴様と戦うつもりはない、今日は挨拶がわりの様なものだからな。我もまだ完全ではないのでな、今日はこれくらいで帰るとしよう」カズヤ「逃がすと思ってるのか」カズヤはいつの間にか火の精霊を集めていた。窮奇「やめておけ、無駄な事だ！この姿は我の力の一部を変わりに使ったもの攻撃した所で意味はない、フッフ、そう焦るな！もうすぐ我ら四凶が揃う、その時に恐怖と絶望を味あわせながら殺してくれよう。フッフ……ハッハハハ、ハッハッハッ」笑い声を残し窮奇の黒い影は姿を消した。

カズヤ「ちっ……」窮奇が姿を消し、カズヤは火の精霊達を散らす。カズヤ「完全じゃない状態であの妖気……くっ、聖也兄がいれば……」今だ戻らぬ兄を思うカズヤ、そして朝の陽が上がる。

サテラ「……鬱陶しい」サテラはクラスの自分の席に座りながら周りの女子生徒達の話を聞き流していた。

女子生徒「ちよっと聞いた、あの接触禁止の女王にとぅとぅりミッ

夕 が付いたそうよ」女子生徒「ええー、ウソオ、誰よその命知らず」女子生徒「それが、例のあの子らしいのよ」女子生徒「ウソオ、本当に」今学園じゅうの生徒達の間ではこの話で持ちきりになっていた。あの接触禁止の女王にリミッタ が付いたと言う事だけでも大事件なのに、なんとそのリミッタ になったのがあのアオイ・カズヤと言う事もあり、おおくの女子生徒からは妬みなどもあり、話は飛躍しサテラが色気と美貌でカズヤを無理やりリミッタ にしたなどと憶測まで流れ始めていた。

朝からそんな話をずっと聞いている為いくら無視を決め込んでいるサテラでもさすがに鬱陶しくなっていたのだ。すると、そんなサテラの心情を考えることもせず1人の生徒が近寄ってきた。

ガネツサ「随分と上手くやったものですわね、サテライザー・L・ブリジット」学年1位？のガネツサが話しかけてきた。しかしサテラはそんなガネツサを黙殺する。

ガネツサ「むっ……相変わらず人をムカつかせる女ですわね」サテラ「お前がな」ガネツサ「な、なんですってー……くっ……ふん、まあいいですはこの学年1位の私はこれ位大目に見てあげますは。それよりもどういう風の吹きまわしかしたら、あれほど人を寄せ付けなかったあなたがリミッタ を認めるなんて、まあ、私に勝つためにはしょうがない事だとは思いますが！ホホホホ」サテラ「……惨めだな」ガネツサ「何ですって、もう一度言ってみなさいー……」サテラ「く……この女、勝……」ガネツサが勝負すると言おうとした瞬間教室にキムが入ってくる。キム「ほら、もうよれいほら鳴っているぞ席に付け」キムの声に生徒達は席に座り出す。

ガネツサ「っ……、覚えてらっしゃいー」ガネツサも渋々自身の席に座る。

カズヤ「よし、行こう」午前中の授業が終わり昼食の時間、カズヤはいつも一緒に食べているヒイラギ、アーサ、そしてクラスメイト達とは行かず1人教室を後にした。

アーサ「カズヤー、なんだ、あいつ1人で？」ヒイラギ「知らないの、アオイ君接触禁止の女王のリミッタになつたのよ」アーサ「あれ、本当だったのかよ！大丈夫かよ・・・」ヒイラギ「まあ、大丈夫じゃない！アオイ君だし、ほら私達も行きましょう」アーサ「あつ、ちよつと待てよ」2人も他のクラスメイトと同じように食堂に向かう。

カズヤ「え」と、先輩のクラスはと・・・」先に教室を後にしたカズヤはサテラの教室を目指していた。すると少し先にある教室からサテラが出てくるのが見えた。

カズヤ「あつ！サテライザー先輩ー」サテラ「えっ？」突然自分の名を呼ばれ振り向くとカズヤが走って来ていた。カズヤ「よかった！まだ居て」サテラ「ど、どうしてここに？」カズヤ「はい、先輩と一緒に食堂に行こうと思って、あつご迷惑でしたか？」カズヤが申し訳なさそうに言うとサテラは、サテラ「べ・・・別に・・・いい」カズヤ「よかつた！それじゃ、行きましょう」サテラ「・・・う、うん」2人は一緒に食堂に向かう。そして、その2人の姿を多くの女子生徒が嫉妬と妬みの視線で見られていたのはいうまでもない、特に3人の女子生徒からはその視線が強かつた。

オドリ「面白くないわね、あの女」タケウチ「ええ、全くあれだけの強さがあるのにさらにあのリミッタを手に入れた」トリス「早いとこ、何とかしないと・・・」

その頃、食堂はいような雰囲気になっていた、食堂にいる誰もがある席に座る2人を見ていたからだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4988x/>

---

風炎の契約者とパンドラの少女達の出会い

2012年1月6日12時47分発行